

都市計画道路出合新方線街路築造事業に伴う

今池尻遺跡  
新方遺跡 平松地点

—発掘調査報告書—

2003

神戸市教育委員会



1 今池尻遺跡第2次調査 調査地遠景（南から、平成12年8月撮影）



2 今池尻遺跡第2次調査 調査地遠景（北から、平成12年8月撮影）



1 今池尻遺跡第3次調査 SB201(新)の弥生土器



2 今池尻遺跡第3次調査 SX208の弥生土器



1 今池尻遺跡第3次調査 SX102-Sの土師器・須恵器



2 今池尻遺跡第3次調査 竪穴住居の土師器・須恵器



1 今池尻遺跡第2次調査 SB101の土師器・須恵器・砥石



2 今池尻遺跡第2次調査 SB102の土師器・須恵器



1 今池尻遺跡第2次調査 SP1158出土の土師器・灰釉陶器



2 今池尻遺跡第2次調査出土の施釉陶器・輸入磁器



新方遺跡平松地点第3次調査一Ⅱ区 SX05 土師器・製塩土器・須恵器



1 新方遺跡平松地点第3次調査一Ⅱ区 SD17の灰釉陶器・緑釉陶器



2 新方遺跡平松地点第3次調査一Ⅰ区出土の石釧 3 新方遺跡第44次調査出土の管玉と剥片





1 新方遺跡第44次調査  
SB401出土の土師器



2 新方遺跡第44次調査  
SB402・SD402出土の  
弥生土器



3 新方遺跡第44次調査  
SB403出土の弥生土器

都市計画道路出合新方線街路築造事業に伴う

# 今池尻遺跡 新方遺跡 平松地点

—発掘調査報告書—

2003

神戸市教育委員会

# 序

阪神・淡路大震災のあのつらい経験から8年にも及ぶ歳月が過ぎ、神戸の街もようやく明るさと元気を取り戻してきました。神戸市では、安心で快適なまちづくりを進めていますが、本当の意味でまちが復興するまでには、まだまだ歳月が必要と考えられます。

こうした中、依然として市街地を中心にして、震災復興の土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を鋭意継続して実施しているところです。

今回報告します西区の今池尻遺跡および新方遺跡の発掘調査は、都市計画道路築造に先立つもので、計画道路路線にかかる調査のため、遺跡の全容を窺うことは到底できません。調査の結果、弥生時代前期から室町時代前半にかけてのさまざまな遺構や遺物が発見されました。以上のような多くの成果をまとめた本書が、地域の歴史研究あるいは文化財の保護・普及啓発の資料として、今後市民の方々をはじめとする多くの方々に広く活用されれば幸いです。

最後にはなりましたが、現地での発掘調査事業の円滑な推進ならびに報告書作成までにご協力いただきました関係諸機関ならびに関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成15年3月  
神戸市教育委員会  
教育長 西川 和機



## 例 言

1. 本書は神戸市西区伊川谷町潤和字平松、合木、下近角に所在する今池尻遺跡第2次調査（平成12年度）・第3次調査（平成13年度）および新方遺跡平松地点第3次調査（平成9年度）・新方遺跡第44次調査（平成14年度）の発掘調査報告書である。

なお、今池尻遺跡第2次調査および新方遺跡平松地点第3次調査については、すでに当該年度の『神戸市埋蔵文化財年報』でその概要を報告しているが、本報告書をもって正式報告とする。

2. 調査は都市計画道路出合新方線（潤和工区）の街路築造事業に先立って実施したもので、（財）神戸市都市整備公社からの委託を受けて、神戸市教育委員会・（財）神戸市体育協会（平成10年10月（財）神戸市スポーツ教育公社から改組）が現地調査を実施した。

調査対象面積は約7,200㎡で、このうちの約4,300㎡について全面発掘調査を実施した。

3. 現地調査の遺構実測・写真撮影および遺物の実測、浄書は各調査担当者が分担して実施した。また、本書の作成も調査担当者がそれぞれに分担して執筆し、その文責は目次のとおりである。

なお、新方遺跡平松地点第3次調査－Ⅱ区については調査担当者である藤井太郎氏（神戸市立博物館学芸課）に執筆を依頼し、土器類の遺物実測は山本雅和と藤井珠美が担当した。

また、本書の編集については山本が行い、各担当者がこれを補助した。

4. 遺物の写真撮影については、神戸市埋蔵文化財センターにおいて、奈良文化財研究所 牛嶋茂氏の撮影指導の下、杉本和樹氏（西大寺フォト）が行った。

5. 今池尻遺跡第2次調査および新方遺跡平松地点第3次調査－Ⅱ区で確認された地震痕跡については、産業技術総合研究所 寒川旭氏に現地において懇切なご指導をいただきました。

6. 新方遺跡平松地点第3次調査－Ⅱ区で出土した鉾滓の分析については、株式会社パレオ・ラボに分析業務を委託した。この成果については第Ⅳ章で報告する。

7. 出土した木製品の樹種同定、土壌の花粉分析・プラント・オパール分析については、株式会社古環境研究所に分析業務を委託した。これらの成果については、調査地点毎に報告する。

8. 出土した石製品の礫種については、株式会社京都フィッシュン・トラックの檀原徹氏の鑑定による。fig. 264にその成果は一覧表としてまとめた。

9. 本書で使用した方位は座標北で、その座標は日本測地系の平面直角座標系第Ⅴ系である。標高は東京湾中等潮位（T. P.）で表示した。

10. 現地での発掘調査作業については、下記の各社に調査作業を委託して実施した。

株式会社東和商事 株式会社長谷川工務店 東海アナース株式会社 有限会社和田発掘調査所

11. 現地発掘調査における航空測量ならびに図化作業、基準点の設置については、下記の各社が実施した。

アジア航測株式会社 株式会社イビソク 株式会社ジオテクノ関西 神戸測量株式会社

12. 現地での発掘調査および遺物の整理にあたっては下記の関係機関ならびに諸氏にご協力いただきました。

ここに記して深謝いたします。

(財) 神戸市都市整備公社

池田征弘、合田幸美、多賀茂治、徳田誠志、菱田淳子、櫃本誠一、深江英憲、山田清朝

13. 神戸市埋蔵文化財センターでの遺物整理業務には、下記の方々に参加いただきました。

秋山典子 石井美乃利 井守芳美 大川美智子 岡邦子 木下幸美 佐伯都 芝恵子 杉本恵美

橋本千里 畑谷敦子 花房伸予 福本恭子 藤井珠美 藤原麻衣子 西馬久美子 森本尚子

吉野由紀 和田陽子 原裕子

青野美津子 栗田真佐子 石川淳子 岩沢美佐子 黒澤めぐみ 坂田洋子 高田輝子

高見千恵子 為森啓子 丹治真理子 富沢万紀子 中谷玲子 英登得 森弘玲子

吉田克子 渡部加代子

# 本文目次

序  
例言  
目次

I. はじめに	(山本雅和)	1
1. 発掘調査に至るまでの経緯		1
2. 今池尻遺跡		3
3. 新方遺跡		3
4. 調査組織		6
5. 発掘調査の経過		9
II. 今池尻遺跡第3次調査		11
1. 試掘調査の概要	(佐伯二郎)	11
2. 基本層序	(山本)	13
3. 弥生時代後期の遺構と遺物 (第2遺構面)		17
(1) 竪穴住居・掘立柱建物		17
(2) 溝		22
(3) 土坑・落ち込み		24
(4) ピット		30
4. 古墳時代後期の遺構と遺物 (第1遺構面)		31
(1) 柵列		31
(2) 竪穴住居・掘立柱建物		33
(3) 溝		45
(4) 土坑		48
(5) ピット		48
(6) 流路		48
5. 小結		53
6. 今池尻遺跡第3次調査における樹種同定	株式会社 古環境研究所	55
III. 今池尻遺跡第2次調査	(安田滋・浅谷誠吾)	61
1. はじめに		61
(1) 調査区の設定		61
(2) 基本層序		61
2. 縄文時代の遺物		63
3. 弥生時代中期の遺構と遺物		63
(1) 遺構		63
(2) 遺物		64
4. 弥生時代後期末の遺構と遺物		66
(1) 遺構		66

(2) 遺物	67
5. 古墳時代後期～飛鳥時代の遺構と遺物	71
(1) 遺構	71
i) 土坑	71
ii) 水田	72
iii) 流路	73
(2) 遺物	74
6. 平安時代後期の遺構と遺物	77
(1) 遺構	77
i) 掘立柱建物	77
ii) ピット	85
iii) 掘立柱建物北方の溝	86
iv) 調査区南半の遺構	88
(2) 遺物	90
i) 土器類の分類	90
ii) 掘立柱建物出土遺物	93
iii) ピット出土遺物	101
iv) 溝出土遺物	102
v) 灰色シルト層出土遺物	105
v) 金属製品製作関連遺物	112
vi) 掘立柱建物礎盤	113
7. 小結	113
8. 今池尻遺跡第2次調査における樹種同定	株式会社 古環境研究所 115
IV. 新方遺跡平松地点第3次調査一Ⅱ区	(藤井太郎) 123
1. 基本層序	123
2. 平安時代中期の遺構と遺物 (第3遺構面)	126
3. 平安時代中期～後期の遺構と遺物 (第2遺構面・第1遺構面)	131
(1) 第2遺構面の遺構と遺物	131
i) 掘立柱建物	131
ii) 溝	137
iii) 土坑・落ち込み	143
iv) ピット	156
(2) 第1遺構面の遺構と遺物	157
i) 掘立柱建物	157
ii) 土坑・落ち込み	162
iii) 溝	162
iv) ピット	163
4. 地震痕跡について	164
5. 小結	166
(1) 調査地での遺構の形成	166
(2) 鍛冶遺構について	168
6. 鍛冶遺構 (S X 07・S X 08) の保存科学処理	(千種浩・中村大介) 170



## 挿 図 目 次

fig. 1	今池尻遺跡・新方遺跡の位置……………	1
fig. 2	今池尻遺跡・新方遺跡と隣接の遺跡……………	2
fig. 3	出合新方線の路線と調査地区……………	8
fig. 4	整理作業〔写真〕……………	10

### 今池尻遺跡第3次調査

fig. 5	試掘調査地区の位置 (1/1,500)……………	11
fig. 6	試掘調査地区 トレンチ 土層断面……………	12
fig. 7	試掘坑2 土層断面……………	12
fig. 8	調査作業〔写真〕……………	13
fig. 9	西壁の土層断面……………	14
fig. 10	東壁の土層断面……………	15
fig. 11	検出した遺構……………	16
fig. 12	S B 201……………	18
fig. 13	S B 201 断面……………	19
fig. 14	S B 201出土の土器……………	20
fig. 15	S X 201……………	22
fig. 16	S D 201……………	22
fig. 17	S X 214……………	23
fig. 18	S X 214出土の土器……………	23
fig. 19	S X 202……………	24
fig. 20	S X 202出土の土器……………	24
fig. 21	S X 203……………	25
fig. 22	S X 204……………	25
fig. 23	S X 205・206……………	25
fig. 24	S X 206出土の土器……………	25
fig. 25	S X 208……………	26
fig. 26	S X 208出土の土器……………	27
fig. 27	S X 209・210……………	28
fig. 28	S X 213……………	28
fig. 29	S X 213出土の土器……………	29
fig. 30	S X 212・215……………	29
fig. 31	S X 212出土の土器……………	29
fig. 32	S X 215出土の土器……………	30
fig. 33	S P 202……………	30
fig. 34	S P 202出土の土器……………	30
fig. 35	S A 101……………	31
fig. 36	S A 101出土の土器……………	32
fig. 37	S A 101-P 4 出土の柱材……………	32
fig. 38	S A 102……………	32
fig. 39	S P 141出土の柱材……………	32
fig. 40	S B 101……………	33
fig. 41	S B 101カマド……………	34
fig. 42	S B 101出土の土器……………	35
fig. 43	S B 102……………	36
fig. 44	S B 102カマド・土坑1……………	36
fig. 45	S B 102出土の土器……………	37
fig. 46	S B 103……………	38
fig. 47	S B 103カマド・灰ピット……………	39
fig. 48	S B 103出土の土器……………	40
fig. 49	S B 104……………	41

fig. 50	S B 104カマド……………	41
fig. 51	S B 104出土の土器……………	42
fig. 52	S B 105……………	43
fig. 53	S B 105-P 7 出土の土器……………	43
fig. 54	S B 106……………	44
fig. 55	S B 106-P 4 出土の土器……………	44
fig. 56	S B 106-P 4 出土の柱材……………	44
fig. 57	S X 102-S・S X 102-N・S X 103……………	45
fig. 58	S X 102-S 出土の土器……………	46
fig. 59	S X 103出土の土器……………	47
fig. 60	S K 101……………	48
fig. 61	S K 101出土の土器……………	48
fig. 62	S P 136出土の土器……………	48
fig. 63	S R 101……………	49
fig. 64	S R 101出土の土器……………	51
fig. 65	S R 101出土の木製品……………	52
fig. 66	北半区包含層出土の近江系土器……………	53
fig. 67	今池尻遺跡第3次調査における樹種同定結果……………	57
fig. 68	今池尻遺跡第3次調査の木材(1)〔写真〕……………	58
fig. 69	今池尻遺跡第3次調査の木材(2)〔写真〕……………	59

### 今池尻遺跡第2次調査

fig. 70	調査区の設定 (1/1,000)……………	61
fig. 71	調査区東壁土層……………	62
fig. 72	縄文時代の遺物……………	63
fig. 73	第4遺構面……………	64
fig. 74	弥生時代中期の遺構……………	65
fig. 75	弥生時代中期の遺物……………	65
fig. 76	第3遺構面……………	66
fig. 77	弥生時代後期末の遺構……………	67
fig. 78	土器群301……………	68
fig. 79	弥生時代後期末の遺物……………	69
fig. 80	第2遺構面……………	70
fig. 81	S X 201……………	71
fig. 82	古墳時代後期水田断面……………	71
fig. 83	古墳時代後期水田……………	72
fig. 84	流路202……………	73
fig. 85	古墳時代後期から飛鳥時代の遺物……………	74
fig. 86	第1遺構面……………	75
fig. 87	第1遺構面北半の遺構……………	76
fig. 88	掘立柱建物の配置……………	77
fig. 89	S B 101……………	78
fig. 90	S B 101柱穴遺物出土状況……………	79
fig. 91	S B 102……………	80
fig. 92	S B 102柱穴遺物出土状況……………	81
fig. 93	S B 103および掘立柱建物に伴う柱穴……………	82
fig. 94	S B 103柱穴遺物出土状況……………	83
fig. 95	S B 104……………	83
fig. 96	S B 105……………	84
fig. 97	S B 106……………	84
fig. 98	S B 106柱穴 (S P 1080) 遺物出土状況……………	85

7. 新方遺跡平松地点第3次調査-Ⅱ区 出土鉾滓の材質構造分析……	
株式会社パレオ・ラボ 小村美代子……	172
8. 新方遺跡平松地点第3次調査における樹種同定……株式会社 古環境研究所 ……	181
<b>V. 新方遺跡平松地点第3次調査-Ⅰ区 …… (石島三和) ……</b>	<b>187</b>
1. 基本層序 ……	187
2. 弥生時代後期の遺構と遺物 ……	189
3. 平安時代の遺構と遺物 ……	192
4. 中世の遺構と遺物 ……	193
5. 小結 ……	196
<b>VI. 新方遺跡第44次調査 …… (山本) ……</b>	<b>197</b>
1. はじめに ……	197
2. 弥生時代前期の遺構と遺物 ……	201
3. 弥生時代中期の遺構と遺物 ……	202
(1) 落ち込み ……	202
(2) 溝 ……	203
(3) 土坑 ……	204
4. 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構と遺物 ……	205
(1) 竪穴住居 ……	205
(2) 溝 ……	214
(3) 土坑 ……	215
(4) ピット ……	218
(5) 土器棺墓 ……	219
(6) 落ち込み ……	219
5. 古墳時代後期の遺構と遺物 ……	221
6. 平安時代中期の遺構と遺物 ……	225
7. 室町時代前半の遺構と遺物 ……	227
8. 小結 ……	229
<b>VII. 新方遺跡第44次調査の自然科学分析 ……株式会社 古環境研究所……</b>	<b>231</b>
1. 新方遺跡第44次調査における花粉分析 ……	231
2. 新方遺跡第44次調査におけるプラント・オパール分析 ……	237
3. 新方遺跡第44次調査における樹種同定 ……	243
<b>VIII. ま と め …… (山本) ……</b>	<b>251</b>
1. 遺跡の形成と時期変遷 ……	251
2. 弥生時代後期の土器について ……	256
3. 古墳時代後期の土器について ……	260
4. おわりに ……	263

fig.99	ピット遺物出土状況	85	fig.150	S X04出土の土器	147
fig.100	S K104	86	fig.151	S X05	148
fig.101	掘立柱建物北方溝群	87	fig.152	S X05出土の遺物(1)	149
fig.102	第1遺構面南半溝群	89	fig.153	S X05出土の遺物(2)	150
fig.103	平安時代後期の土器分類	91	fig.154	S X05出土の遺物(3)	151
fig.104	S B101柱穴出土遺物	94	fig.155	S X05出土の遺物(4)	152
fig.105	S B102柱穴出土遺物	96	fig.156	S X05出土の遺物(5)	153
fig.106	S P1133 (S B102) 出土鞋	97	fig.157	鍛冶関連遺構	155
fig.107	S B103出土遺物	98	fig.158	S X06出土の土器	156
fig.108	S B104・105・106出土遺物	99	fig.159	Pit093出土の鉄釘	156
fig.109	S P1158・1160・1159出土遺物	100	fig.160	S B01	157
fig.110	S P1162・1164 S K104出土遺物	101	fig.161	第1遺構面	158
fig.111	S P1022・1079・1074・1051出土遺物	102	fig.162	S B01出土の土器	159
fig.112	S D158・140出土遺物	103	fig.163	S B02	159
fig.113	掘立柱建物北方溝群出土遺物	104	fig.164	S B02-Pit203出土の遺物	159
fig.114	S D168出土遺物	105	fig.165	S B03	160
fig.115	調査区南半溝群出土遺物	105	fig.166	S B03 Pit出土の平瓦	161
fig.116	灰色シルト層出土遺物(1)	107	fig.167	S B03 Pit出土の礎盤	162
fig.117	灰色シルト層出土遺物(2)	108	fig.168	Pit01	163
fig.118	灰色シルト層出土遺物(3)	109	fig.169	Pit01出土の遺物	163
fig.119	灰色シルト層出土遺物(4)	110	fig.170	地震痕跡	165
fig.120	出合遺跡出土「左口」刻印瓦〔写真〕	111	fig.171	地震痕跡の断面〔写真〕	165
fig.121	金属製品製作関連遺物	112	fig.172	地震痕跡の断面	165
fig.122	掘立柱建物礎盤	113	fig.173	建物と関連遺構の配置	167
fig.123	今池尻遺跡第2次調査における樹種同定結果	119	fig.174	鍛冶遺構の半截状況〔写真〕	170
fig.124	今池尻遺跡第2次調査の木材(1)〔写真〕	120	fig.175	遺構周辺の掘削作業〔写真〕	170
fig.125	今池尻遺跡第2次調査の木材(2)〔写真〕	121	fig.176	遺構全体の養生〔写真〕	170
<b>新方遺跡平松地点第3次調査-II区</b>					
fig.126	土層断面	124	fig.177	硬質発泡ウレタンで梱包〔写真〕	170
fig.127	第2・3遺構面	127	fig.178	重機による搬出作業〔写真〕	170
fig.128	S D17出土の遺物(1)	128	fig.179	表面処理作業〔写真〕	171
fig.129	S D17出土の遺物(2)	129	fig.180	保存科学処理の完成した鍛冶遺構〔写真〕	171
fig.130	S D27出土の遺物	130	fig.181	試料の詳細	172
fig.131	S B04	131	fig.182	鉍滓の各測定部の蛍光X線スペクトル	173
fig.132	S B05	132	fig.183	鉍滓の蛍光X線分析による測定箇所〔写真〕	177
fig.133	S B05-Pit501出土の土器	133	fig.184	R-022から検出された 各元素のマッピング画像〔写真〕	178
fig.134	S B06	134	fig.185	R-022のマッピング範囲でポイント分析した 蛍光X線スペクトル図〔写真〕	179
fig.135	S B06出土の土器	134	fig.186	R-013から検出された各元素の マッピング画像〔写真〕	179
fig.136	S B07	135	fig.187	メタル部の拡大写真〔写真〕	180
fig.137	S B07出土の土器・瓦	136	fig.188	鉍滓分析試料〔写真〕	180
fig.138	S B07 Pit出土の柱材と礎盤	136	fig.189	新方遺跡平松地点第3次調査における 樹種同定結果	183
fig.139	S D04周辺の遺構	138	fig.190	新方遺跡平松地点第3次調査の木材(1)〔写真〕	184
fig.140	S X04	138	fig.191	新方遺跡平松地点第3次調査の木材(2)〔写真〕	185
fig.141	S D04 銭貨検出状況〔写真〕	138	<b>新方遺跡平松地点第3次調査-I区</b>		
fig.142	S D04出土の遺物(1)	139	fig.192	西壁の土層断面	188
fig.143	S D04出土の遺物(2)	140	fig.193	弥生時代後期の遺構面	189
fig.144	S D21出土の土器	141	fig.194	弥生時代後期の土器	191
fig.145	S K02	143	fig.195	包含層出土の石釧	191
fig.146	S K02出土の土器	144	fig.196	平安時代の遺構面	192
fig.147	S K03出土の砥石	144			
fig.148	S K10出土の遺物	145			
fig.149	S X03出土の遺物	147			

fig.197 中世の遺構面	193
fig.198 中世遺構面および中世耕作土出土の土器	195

#### 新方遺跡第44次調査

fig.199 調査区の配置 (1/800)	197
fig.200 調査区西壁土層断面	198
fig.201 調査区の遺構平面(1)	199
fig.202 調査区の遺構平面(2)	200
fig.203 S X302	201
fig.204 S X302出土の土器	201
fig.205 Ⅲ区包含層出土の土器	202
fig.206 S X310・S D303	203
fig.207 S K311	204
fig.208 S X310・S D303・S K311 出土の土器	204
fig.209 S B301	205
fig.210 S B301出土の土器	205
fig.211 S B401	206
fig.212 S B401-土坑1	206
fig.213 S B401出土の土器	207
fig.214 S B402	208
fig.215 S B402出土の土器	209
fig.216 S B402出土の石製品	210
fig.217 S B403	211
fig.218 S B403-P2	211
fig.219 S B403出土の土器	213
fig.220 S B403出土の石製品	213
fig.221 S D402・S X418	214
fig.222 S D402出土の土器	214
fig.223 S K306	215
fig.224 S K306出土の土器	215
fig.225 S K307	216
fig.226 S K307出土の土器	217
fig.227 S X306	217
fig.228 S X306出土の遺物	217
fig.229 S K403	218
fig.230 S P310断面	218
fig.231 S P310出土の土器	219
fig.232 S T301	219
fig.233 S X301	220
fig.234 S X301出土の土器	221
fig.235 S R201出土の土器	221
fig.236 S R201	222
fig.237 S R202	223
fig.238 S R202出土の土器	224
fig.239 S R202出土の木製品	224
fig.240 S D201	226
fig.241 S D201出土の土器	226
fig.242 S A101	227
fig.243 S A101-P2 出土の土器	227
fig.244 S B101	228
fig.245 新方遺跡第44次調査における花粉分析結果	233
fig.246 新方遺跡第44次調査Ⅲ区における 花粉ダイアグラム	234

fig.247 新方遺跡第44次調査の花粉・胞子〔写真〕	235
fig.248 新方遺跡第44次調査のプラント・オパール分析結果	239
fig.249 新方遺跡第44次調査における プラント・オパール分析結果	239
fig.250 プラント・オパールの顕微鏡写真	240
fig.251 土壌サンプル採取地点 (Ⅲ区西壁)	241
fig.252 土壌サンプル採取状況〔写真〕	241
fig.253 S B402炭化材サンプル採取箇所	242
fig.254 S K403炭化材サンプル採取箇所	242
fig.255 新方遺跡第44次調査における樹種同定結果	247
fig.256 新方遺跡第44次調査の木材 および炭化材(1)〔写真〕	248
fig.257 新方遺跡第44次調査の木材 および炭化材(2)〔写真〕	249
fig.258 新方遺跡第44次調査の木材 および炭化材(3)〔写真〕	250

#### まとめ

fig.259 調査地区と現況地形	252
fig.260 時期別の遺構分布の変遷	254
fig.261 調査地点の模式断面	255
fig.262 弥生時代後期前半の土器	257
fig.263 今池尻遺跡第3次調査出土の 古墳時代後期の土器	261
fig.264 調査地点別 礫種の鑑定結果	264

## 巻頭写真図版目次

- 巻頭写真図版 1 1 今池尻遺跡第2次調査 調査地点遠景(南から)  
2 今池尻遺跡第2次調査 調査地点遠景(北から)
- 巻頭写真図版 2 1 今池尻遺跡第3次調査 S B 201(新)の弥生土器  
2 今池尻遺跡第3次調査 S X 208の弥生土器
- 巻頭写真図版 3 1 今池尻遺跡第3次調査 S X 102-Sの土師器・須恵器  
2 今池尻遺跡第3次調査 竪穴住居の土師器・須恵器
- 巻頭写真図版 4 1 今池尻遺跡第2次調査 S B 101の土師器・須恵器・砥石  
2 今池尻遺跡第2次調査 S B 102の土師器・須恵器
- 巻頭写真図版 5 1 今池尻遺跡第2次調査 S P 1158出土の土師器・灰釉陶器  
2 今池尻遺跡第2次調査出土の施釉陶器・輸入磁器
- 巻頭写真図版 6 新方遺跡平松地点第3次調査-II区 S X 05の土師器・須恵器
- 巻頭写真図版 7 1 新方遺跡平松地点第3次調査-II区 S D 17の灰釉陶器・緑釉陶器  
2 新方遺跡平松地点第3次調査-I区の石釧  
3 新方遺跡第44次調査 管玉と剥片
- 巻頭写真図版 8 1 新方遺跡第44次調査 S B 401の土師器  
2 新方遺跡第44次調査 S B 402・S D 402の弥生土器  
3 新方遺跡第44次調査 S B 403の弥生土器

## 写真図版目次

### 今池尻遺跡第3次調査

- 写真図版 1 第2遺構面 全景(南西から)
- 写真図版 2 1 S B 201(古) 全景(南東から) 2 S B 201(新) 全景(南東から)
- 写真図版 3 1 S B 201(新) 中央土坑近景(東から) 2 S B 201(新) 床面遺物検出状況  
3 S B 201(新) 床面遺物検出状況 4 S B 201(古)-P 1断面  
5 S B 201(新)-P 1礎盤
- 写真図版 4 1 S X 208 近景(北西から) 2 第2遺構面北半の遺構(西から)
- 写真図版 5 第1遺構面 全景(南から)
- 写真図版 6 1 第1遺構面 近景(南西から) 2 S B 101~104(西から)
- 写真図版 7 1 S B 101 全景(南から) 2 S B 101 カマド近景(南から)
- 写真図版 8 1 S B 102 全景(南東から) 2 S B 102 カマド近景(南東から)
- 写真図版 9 1 S B 103 全景(南から) 2 S B 103 カマド近景(南から)
- 写真図版 10 1 S B 104 全景(南から) 2 S B 104 カマド近景(南から)
- 写真図版 11 1 S A 101・S B 105・S B 106(西から) 2 S A 101 近景(西から)
- 写真図版 12 1 S R 101 全景(北西から) 2 S X 102-N 近景(南東から)  
3 S X 102-S(西から)
- 写真図版 13 S B 201出土の土器(1)
- 写真図版 14 S B 201出土の土器(2)
- 写真図版 15 S B 208・S X 214・S X 208出土の土器
- 写真図版 16 S X 208出土の土器
- 写真図版 17 S X 202・S X 213・S X 212出土の土器
- 写真図版 18 S X 212・S X 215・S P 210出土の土器、S A 101出土の土器と柱材
- 写真図版 19 S A 102出土の柱材、S B 101・S B 102出土の土器
- 写真図版 20 S B 102・S B 103出土の土器
- 写真図版 21 S B 104・S X 102-S出土の土器、S B 106出土の柱材
- 写真図版 22 S X 102-S・S X 103・S K 101・S R 101出土の土器
- 写真図版 23 S R 101出土の土器
- 写真図版 24 S R 101出土の土器と木製品

## 今池尻遺跡第2次調査

- 写真図版25 1 調査地遠景(西から) 2 調査地空中写真(上が東)
- 写真図版26 1 調査区東壁基本層序 2 第4遺構面全景(北から)
- 写真図版27 1 第4遺構面遺構(東から) 2 第4遺構面遺構(南から) 3 第4遺構面遺構(北から)
- 写真図版28 1 第3遺構面南半全景(北東から) 2 第3遺構面北半全景(南から)  
3 土器群30 1(北から)
- 写真図版29 1 第2遺構面南半全景(北東から) 2 第2遺構面南半全景(北から)
- 写真図版30 1 第2遺構面北半全景(南東から) 2 第2遺構面南半全景(南から)
- 写真図版31 1 第2遺構面水田(南西から) 2 第2遺構面水田(南西から) 3 第2遺構面水田(南から)
- 写真図版32 1 流路203(南東から) 2 流路202(南西から) 3 S X 201(東から)
- 写真図版33 1 第1遺構面北半空中写真(上が北) 2 第1遺構面北半全景(南東から)
- 写真図版34 1 第1遺構面北半全景(南から) 2 第1遺構面北半全景(北から)
- 写真図版35 1 第1遺構面掘立柱建物群(西から) 2 S B 105(南から)
- 写真図版36 1 柱穴内遺物出土状況(西から) 2 S P 1162・S P 1164(西から)  
3 S P 1134・S P 1133(南から)
- 写真図版37 1 S P 1120(S B 101) 2 S P 1146(S B 101) 3 S P 1084(S B 102)  
4 S P 1133(S B 102) 5 S P 1134(S B 103) 6 S P 1152(S B 103)
- 写真図版38 1 S P 1169・S P 1170(S B 103) 2 S P 1170(S B 103) 3 S P 1164  
4 S P 1162 5 S P 1158 6 S P 1074
- 写真図版39 1 S P 1051 2 S K 104 3 S P 1117礎盤 4 S P 1120礎盤  
5 S P 1176礎盤 6 S P 1142礎盤
- 写真図版40 1 S D 158(西から) 2 S D 140(東から) 3 S D 168(西から)
- 写真図版41 1 第1遺構面南半溝群(北東から) 2 第1遺構面南半溝群(南から)
- 写真図版42 1 第1遺構面南半溝群(東から) 2 S D 133(東から)  
3 S D 127遺物出土状況(西から) 4 S D 133遺物出土状況(西から)
- 写真図版43 1 縄文時代の遺物 2 弥生時代中期の遺物 3 弥生時代後期末の遺物(1)
- 写真図版44 弥生時代後期末の遺物(2)
- 写真図版45 1 S X 201出土遺物 2 水田出土遺物 3 流路および青灰色極細砂層出土遺物(1)
- 写真図版46 1 流路および青灰色極細砂層出土遺物(2) 2 S B 101出土遺物
- 写真図版47 1 S B 101出土遺物 2 S B 102出土遺物
- 写真図版48 S B 102出土遺物
- 写真図版49 S B 103出土遺物(1)
- 写真図版50 S B 103出土遺物(2)
- 写真図版51 1 S B 104出土遺物 2 S B 105出土遺物 3 S B 106出土遺物
- 写真図版52 S P 1158出土遺物
- 写真図版53 1 S P 1160出土遺物 2 S P 1159出土遺物 3 S P 1162出土遺物 4 S P 1164出土遺物
- 写真図版54 1 S K 104出土遺物 2 柱穴出土遺物
- 写真図版55 1 S P 1179出土遺物 2 S P 1074出土遺物 3 S P 1051出土遺物  
4 S D 158出土遺物 5 S D 140出土遺物
- 写真図版56 1 S X 105出土遺物 2 S X 104出土遺物 3 掘立柱建物群北方溝群出土遺物
- 写真図版57 1 S D 168出土遺物 2 S D 127出土遺物 3 S D 133出土遺物
- 写真図版58 灰色シルト層出土遺物(1)
- 写真図版59 灰色シルト層出土遺物(2)
- 写真図版60 灰色シルト層出土遺物(3)
- 写真図版61 灰色シルト層出土遺物(4)
- 写真図版62 灰色シルト層出土遺物(5)
- 写真図版63 1 第1遺構面出土黒色土器 2 掘立柱建物礎盤
- 写真図版64 1 金属製品製作関連遺物 2 鉦滓X線透過写真 3 第1遺構面出土砥石

新方遺跡平松地点第3次調査—II区

- 写真図版65 1 調査地遠景(空中写真 北から) 2 第2遺構面西半全景(空中垂直写真)
- 写真図版66 1 第1遺構面 流路全景(南から) 2 SD17遺物集中部(西から)  
3 SD17遺物出土状況 4 SD17遺物出土状況近景  
5 SD27全景(南から) 6 SD27遺物出土状況(南から)
- 写真図版67 1 第2遺構面調査区西半全景(南から) 2 第2遺構面調査区東半全景(南から)  
3 SB04全景(南から)
- 写真図版68 1 SB05(東側柱列を除く)全景(南から) 2 SB06全景(南から)  
3 SB07 Pit701礎盤検出状況 4 SB07 Pit707柱根出土状況
- 写真図版69 1 SD04全景(南から) 2 SD04土層断面(北) 3 同断面(中央)  
4 SD04遺物出土状況 5 SD04遺物検出状況近景
- 写真図版70 1 SK02東半検出状況(西から) 2 SK02西半検出状況(西から) 3 SK02遺物出土状況近景
- 写真図版71 1 SX04検出状況および半截による掘形等の確認状況(南から) 2 SX04断ち割り断面(南から)  
3 SK02およびSD04周辺の状況(南から)
- 写真図版72 SX05全景(南から)
- 写真図版73 1 SX05遺物検出状況1(南) 2 同2(中央東) 3 同3(中央西) 4 同4(北)  
5 SX05遺物検出状況(北から)
- 写真図版74 1 第2遺構面調査区北東部全景(北西から)  
2 鍛冶関連遺構群全景(西から) SX06~08・SK07・SK10・Pit093  
3 鍛冶関連遺構群断面(西から)
- 写真図版75 1 鍛冶関連遺構群近景(南から) SX06~08・SK07・SK10・Pit093  
2 鍛冶関連遺構群近景(南から) SX07・SX08・Pit093 3 SX08断面 4 SX07断面
- 写真図版76 1 第1遺構面調査区西半全景(南から) 2 第1遺構面調査区東半南端湿地部近景(北から)  
3 SB01西半全景(南から) 4 SB01東半全景(南から)
- 写真図版77 1 SB02全景(南から) 2 SB02-Pit203遺物検出状況  
3 SB03(東側柱列を除く)全景(南から)
- 写真図版78 1 Pit306(礫と瓦を礎盤に用いた柱穴)  
2 Pit306(同左の礫を除去すると下部には平瓦が敷かれている)  
3 Pit310(扁平な礫を一石用いた柱穴) 4 Pit311(木材を積み上げて礎盤とした柱穴)  
5 Pit312(木材と礫を根固めに用いた柱穴) 6 Pit151(拳大の礫を多数用いた柱穴)
- 写真図版79 1 Pit01遺物検出状況(南から) 2 Pit01下層須恵器破碎検出状況(南から)  
3 調査区北壁土層断面(西半) 4 調査区北壁土層断面(東半)  
5 調査区南北土層断面(北半) 6 調査区南北土層断面(南半)
- 写真図版80 1 第1遺構面噴砂検出状況(南から) 2 噴砂および柱穴検出状況近景  
3 噴砂のたちあがり(調査区南北土層断面)
- 写真図版81 SD17出土の遺物(1)
- 写真図版82 SD17出土の遺物(2)
- 写真図版83 SD17・SD27・SB05出土の遺物
- 写真図版84 SB06・SB07出土の遺物
- 写真図版85 SD04出土の遺物(1)
- 写真図版86 SD04出土の遺物(2)
- 写真図版87 SD21・SK02出土の遺物
- 写真図版88 SK03・SK10・SX03出土の遺物
- 写真図版89 SX04出土の遺物
- 写真図版90 SX05出土の遺物(1)
- 写真図版91 SX05出土の遺物(2)
- 写真図版92 SX05出土の遺物(3)
- 写真図版93 SX05出土の遺物(4)
- 写真図版94 SX05出土の遺物(5)
- 写真図版95 SX05出土の遺物(6)、Pit093・SK10・SD27出土の鉄製品
- 写真図版96 SX06・SB01・SB02・SB03出土の遺物
- 写真図版97 SB03-Pit出土の平瓦
- 写真図版98 Pit01出土の遺物

新方遺跡平松地点第3次調査-I区

- 写真図版99 1 第1遺構面 全景(空中写真) 2 第2遺構面 全景(空中写真)  
写真図版100 1 第3遺構面 全景(空中垂直写真) 2 東壁土層堆積状況(北から)  
写真図版101 1 第3遺構面直上包含層出土の土器 2 S D 301出土の土器  
3 第3遺構面直上包含層出土の小型土器 4 第3遺構面直上包含層出土の搬入土器  
写真図版102 1 第2遺構面水田面直上洪水砂出土の土器 2 第1遺構面河川跡最下層出土の土器  
3 第1遺構面河川跡出土の土器 4 第1遺構面河川跡出土の土器  
5 第1遺構面包含層出土の土器

新方遺跡第44次調査

- 写真図版103 1 III区 第5遺構面全景(北東から) 2 S D 501全景(西から)  
写真図版104 1 S X 302 遺物検出状況(西から) 2 II区 第3遺構面全景(北から)  
写真図版105 1 S K 311全景(南東から) 2 S X 310全景(東から)  
写真図版106 1 I区 第3遺構面全景(北東から) 2 I区北半 第3遺構面近景(南東から)  
写真図版107 1 S B 301全景(北東から) 2 S K 307全景(南から)  
写真図版108 1 S K 306(南西から) 2 S P 310断面 3 S T 301(南西から)  
写真図版109 1 S X 301全景(南西から) 2 S X 306全景(西から)  
写真図版110 III区 第4遺構面全景(南から)  
写真図版111 1 S B 401~403 全景(南西から) 2 同(北から)  
写真図版112 1 S B 401全景(南から) 2 S B 401床面遺物検出状況(北西から)  
写真図版113 1 S B 402全景(南西から) 2 S B 402床面遺物検出状況(南西から)  
写真図版114 1 S B 403全景(南から) 2 S B 403南東隅床面遺物検出状況(西から)  
3 S B 403-P 2 土器検出状況(北から)  
写真図版115 1 S D 402近景(西から) 2 S D 402土器検出状況(北西から)  
3 S K 403全景(西から)  
写真図版116 1 S R 202全景(北東から) 2 S R 202南肩部全景(北西から)  
写真図版117 1 S R 202西壁土層断面(東から) 2 S R 202南肩部土器検出状況  
3 S R 202黄色砂土器検出状況 4 S R 202黄色砂礫土器検出状況  
5 S R 202黄色砂木製品検出状況  
写真図版118 1 III区 第3遺構面全景(南から) 2 S R 301東壁土層断面(北西から)  
写真図版119 1 III区 第2遺構面全景(南から) 2 S D 201全景(南西から)  
写真図版120 1 I区 第1遺構面全景(北東から) 2 S A 101全景(南西から)  
写真図版121 1 II区 第1遺構面全景(北東から) 2 S B 101全景(南東から)  
写真図版122 1 S A 101-P 2 断面 2 S A 101-P 3 断面 3 S B 101-P 2 断面  
4 S B 101-P 3 断面 5 III区 第1遺構面全景(南から)  
写真図版123 S X 302・III区包含層・S X 310出土の土器  
写真図版124 S D 303・S K 311・S B 301・S B 401出土の土器  
写真図版125 S B 401出土の土器  
写真図版126 S B 402出土の土器  
写真図版127 S B 402・S B 403出土の石製品  
写真図版128 S B 403出土の土器  
写真図版129 S D 402・S K 306・S K 307出土の土器  
写真図版130 S K 307・S X 306・S P 310・S X 301出土の遺物  
写真図版131 S R 202出土の土器  
写真図版132 S R 202出土の土器・木製品、S D 201・S A 101出土の土器



# I. はじめに

## 1. 発掘調査に至るまでの経緯

神戸市西区は昭和57年に垂水区から分区し、平成14年8月1日には区政20周年を迎えた。田園と丘陵が織りなす地勢をもち、近畿地方でも有数の近郊農業地域である一方で、市域の1/4を占める工業製品の出荷高を誇るという、農村と都市がうまく調和した特性を生かしながら発展を続けている。現在では、市内9区のうちで最も多い約24万人の人々が生活するまちとなっている。

西区の中でも、第2神明道路以南の明石川下流域を中心とした地域は明石市とも接し、臨海市街地に近接するという地理的条件から幹線道路に沿ってスプロール現象が生じ始めたため、ベッドタウンとしての計画的な開発が昭和50年前後から盛んに実施され、さらに西神ニュータウンの造成をはじめとする大規模な開発によって、その景観も徐々に変貌を遂げてきている。

以上のように、着実に発展しつつあった当地域も、阪神・淡路大震災による被害は少なからず存在し、被災された方々への住宅供給の必要性が急増したことも加えて、土地区画整理事業が積極的に推進され、さらに新しい街並みが生まれつつある。

こうした中で、都市計画道路出合新方線の街路築造工事も計画された事業のひとつで、その全線計画決定は昭和50年1月にまで遡る。全長5.1km、幅員16mで、玉津町出合から今津を抜け、水谷中央地区・白水地区などの「西神戸グリーンタウン」と総称される土地

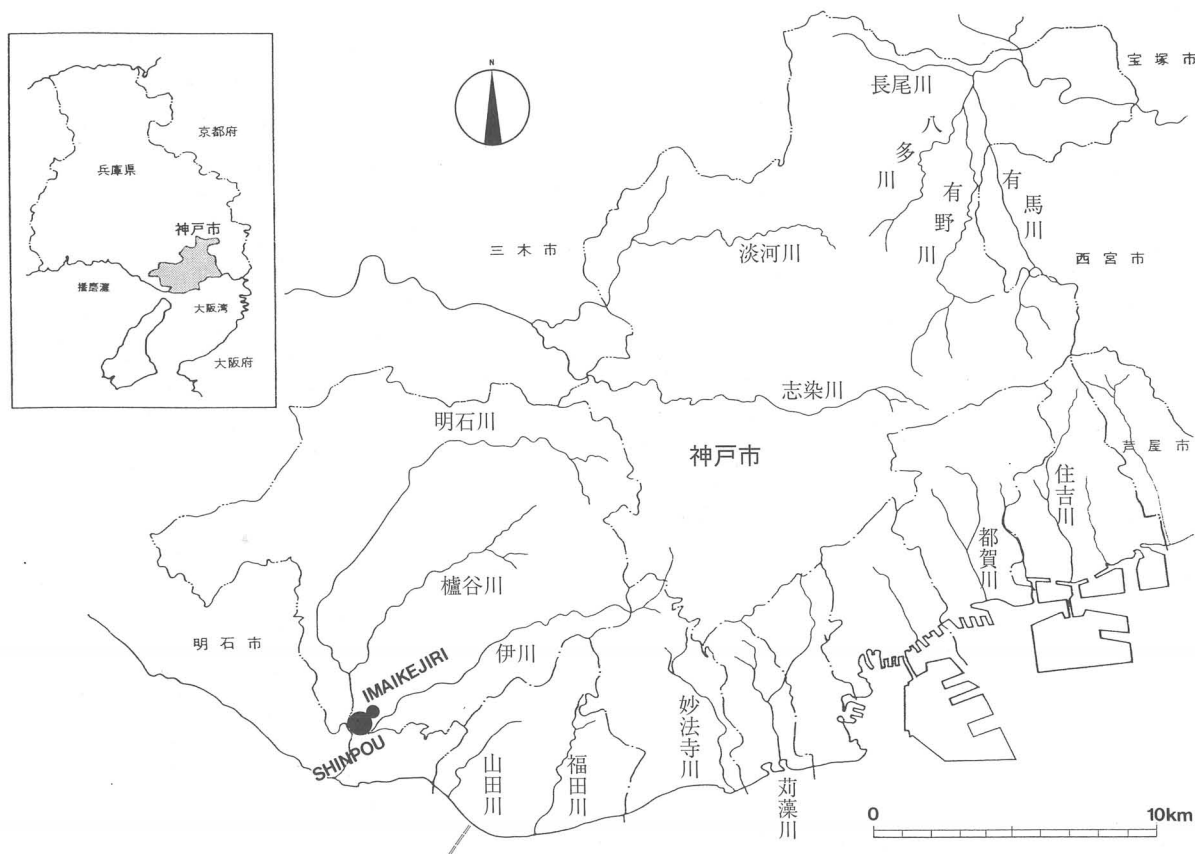


fig.1 今池尻遺跡・新方遺跡の位置

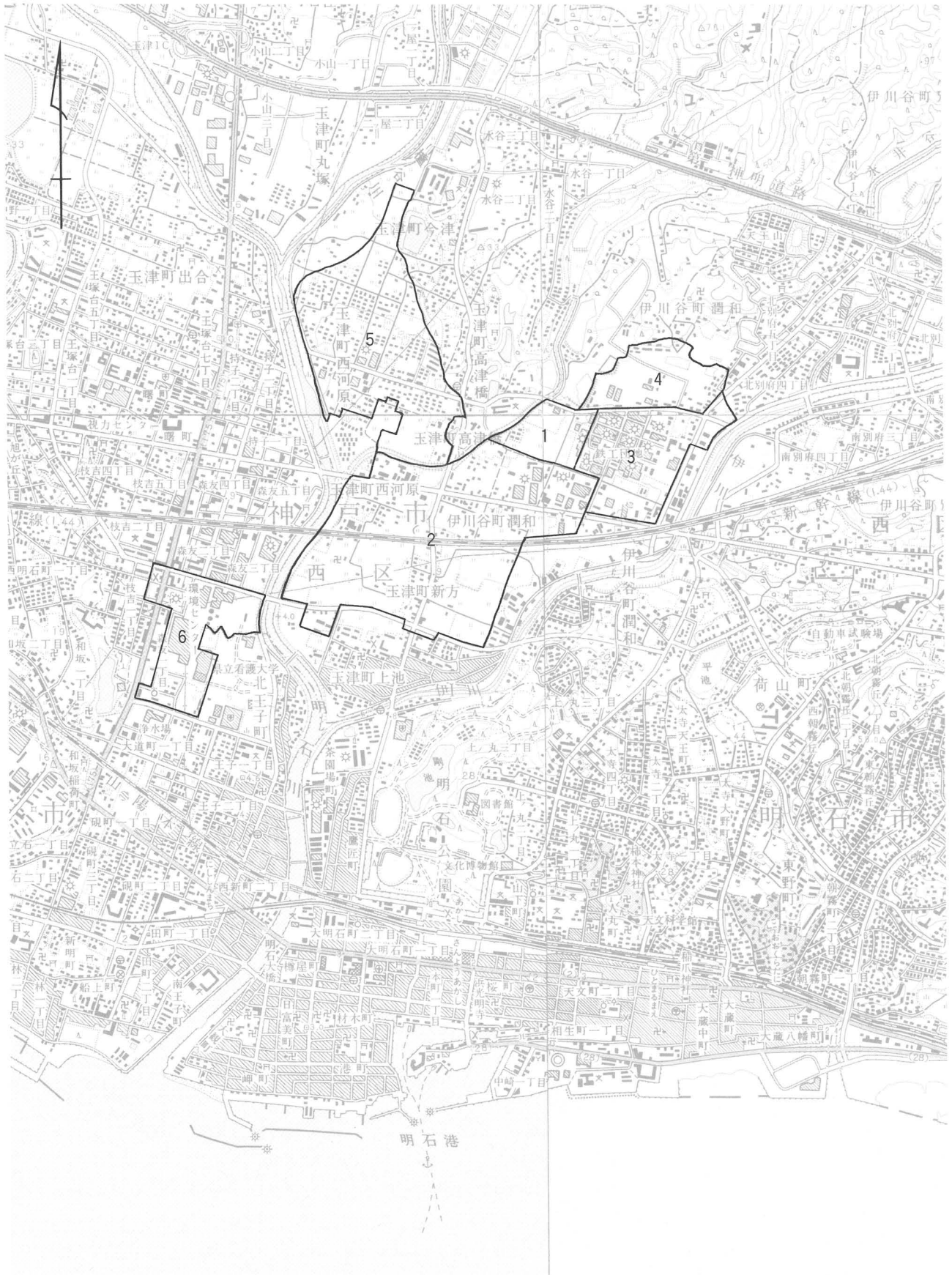


fig.2 今池尻遺跡・新方遺跡と隣接の遺跡 (国土地理院発行 1:25,000 東二見・前開・明石・須磨図幅)  
 1 今池尻遺跡 2 新方遺跡 3 潤和遺跡 4 白水遺跡 5 今津遺跡 6 吉田南遺跡

区画整理事業地を貫き、玉津町新方の都市計画道路玉津鳥羽線までを結ぶ補助幹線道路として位置付けられる。第2神明道路、国道175号線、主要県道神戸明石線（旧神明道路）をはじめとする既存の幹線道路の交通量を分散・緩和させ、交通の円滑な流れを生むことも目的としている。

今回埋蔵文化財調査の対象となった潤和工区は、東西方向に平行して位置する旧神明道路と市道出合白水線とを短絡する路線となり、南北約450mの区間で、今池尻遺跡および新方遺跡の東端を縦断する地区である。

## 2. 今池尻遺跡—これまでの発掘調査の成果—

今池尻遺跡は神戸鉄工団地とほぼ重なるように存在する潤和遺跡と東を接し、南は新方遺跡と接し、北は白水遺跡と接している。伊川の支流あるいは天上川が形成した埋没する自然堤防上あるいは微高地上に立地するものと想定でき、遺跡の範囲は大きくない。

民間開発に先立つ調査が平成4年度に第1次調査<sup>(1)</sup>として実施された以外は、これまでに調査成果はみられない。この第1次調査は倉庫の建物基礎部分のみの調査であったため、敷地全体の遺跡の内容を窺うことはできないが、弥生時代後期末の竪穴住居の中央土坑と考えられる土坑あるいは平安時代後期初めの溝・流路などが確認され、完形品に近い比較的多量の遺物が確認されている。この第1次調査地点は今回報告する第2次調査地点の東隣に接する敷地に当たる。

## 3. 新方遺跡—これまでの発掘調査の成果—

一方、新方遺跡で初めて埋蔵文化財発掘調査が実施されたのは昭和45年度にまで遡り、現在までに44回に及ぶ発掘調査が実施されてきている。遺跡面積に比して調査面積は少ないと言わざるを得ず、遺跡の全容を把握できるまでには至っていないものの、遺構・遺物の分布する遺跡の範囲は東西約1.5km、南北約2.0kmの範囲に及ぶ明石川下流域最大規模の遺跡であると想定できる。これまでの発掘調査は字名を採って地点名を呼称した上で、調査次数を付してきた。以下、時代順にその調査成果をまとめていく。

**弥生時代** 弥生時代では、野手西方地点・平松地点<sup>(2)</sup>での前期初めからの集落の展開が認められる。

**前期** 野手西方地点第1・2次調査<sup>(3)</sup>では縄文人の形質を強く残し、石鏃を抱いて眠る畿内最古の人骨が確認されて、注目を集めている。七反田地点第2次調査<sup>(5)</sup>では穿孔土器が出土し、後半の周溝墓の可能性が高い。

**中期** 中期になると、遺跡の規模は急激に拡大し、各地点でさまざまな成果が挙げられている。中期前葉（Ⅱ様式併行）では丁の坪地点第2次調査<sup>(6)</sup>では銅鏃が出土した直径6.5mの円形竪穴住居や土坑が、大日地点第1次調査<sup>(7)</sup>では直径8mの円形竪穴住居・溝などが確認される。東方地点第1～3次調査<sup>(8)</sup>では農具・祭祀具をはじめとする多量の木製品が出土し、当時の生活様式の一端が明らかになった。

中期中葉（Ⅲ様式併行）では丁の坪地点第1次調査<sup>(6)</sup>では川原石の貼石をもつ円形周溝墓が確認されている。また、村中地点第1次調査<sup>(9)</sup>でも円形周溝墓が確認されている。さらに、大日地点第1次調査地点<sup>(7)</sup>では人骨が遺存する木棺墓や鑄造鉄斧が最下層から出土

した<sup>(9)</sup>方形周溝状遺構が確認されている。

中期後半（Ⅳ様式併行）には明石川の各流域ではいわゆる高地性集落が展開することがよく知られる一方で、新方遺跡では継続した遺跡の展開が活発である。円形竪穴住居・土坑・溝が高ナギ地点第1次<sup>(11)</sup>・第2次調査<sup>(12)</sup>で、円形竪穴住居が丁の坪地点第5・6次調査<sup>(13)</sup>で確認され、さらに土坑群が丁の坪地点第2次調査<sup>(6)</sup>で確認されている。遺跡内でやや北に拡大して遺構の確認が顕著となっている。さらに、北方地点第2次調査<sup>(14)</sup>では分銅形土製品を含む多量の遺物を含む流路も確認されている。

以上のように、弥生時代中期における新方遺跡の展開<sup>(15)</sup>は、Ⅱ様式併行期の碧玉製玉類の製作、多量の紀伊型甕や結晶片岩・緑泥片岩製の石庖丁などの搬入品、播磨以西の影響を強く受けたと考えられる鋸歯文様などを多用する脚台部の存在などをはじめとして、周辺の他の集落と比較できないほど、広範かつ密度の高い交流が窺われ、明石川下流域での中核的集落あるいは拠点集落としての豊富な内容を示している。

**後期** 一方、後期では中期に比較すると目立つ成果がなく、遺跡の展開の継続が窺われる。丁の坪地点第2次調査地点<sup>(6)</sup>では円形竪穴住居・長方形竪穴住居・溝・土坑が、高ナギ地点<sup>(11)</sup>でも焼失竪穴住居が確認されており、いまだ埋没する集落域が存在しているものと想定できる。

やがて庄内併行期になると、さらに点的な資料しか確認できず、現明石川を挟んで南西側に広がる吉田南遺跡へとその中心が移動したものと推定できる。なお、高ナギ地点<sup>(11)</sup>では当該期に廃絶した溝が確認されている。

**古墳時代** 古墳時代に入ると、さらに遺跡の縮小傾向は顕著となり、前期段階では顕著な展開はみられない。高ナギ地点<sup>(11)</sup>では方形竪穴住居が、北方地点第2次調査<sup>(14)</sup>で流路が確認されている程度である。漸く5世紀末～6世紀前半になって再び遺跡の展開は活発となる。大日地点第1次調査地点<sup>(7)</sup>ではTK23型式併行の竪穴住居2棟が確認され、未製品を含む碧玉・滑石製玉類が多量に確認され、弥生時代中期以来の玉造り集団の存在が推定できる。また、野手西方地点第1・2次調査<sup>(2)</sup>でも同様に玉造り集団を想定できる竪穴住居が確認されているほか、初期須恵器を含む土師器の一括資料も確認され、大規模な集落の一端を垣間見ることができる。また、北方地点第3次調査<sup>(16)</sup>ではMT15型式に廃棄された井戸なども確認されている。6世紀後半代では丁の坪地点第2次調査<sup>(6)</sup>で溝が確認されている程度で、それほど集落の展開は顕著ではない。

**古代～中世** 奈良～平安時代中期は散在的には遺跡の展開がたどれるが、相対的に遺構の密度は希薄で、官衙推定地である吉田南遺跡へと遺跡の中心地が移動したものと考えられる。北方地点第3次調査<sup>(16)</sup>では大型柱穴をもつ奈良時代後半の掘立柱建物が確認されているほかは、丁の坪地点第3・4次調査<sup>(17)</sup>、野手西方地点第4次調査<sup>(18)</sup>では砂礫で埋没した深さ3m以上の流路が確認されており、不安定な環境であったと推定できる。なお、野手西方地点第4次調査<sup>(18)</sup>では奈良時代後半の小型銅鏡（素文鏡）が出土している。

平安時代後期～鎌倉時代には各地点ともに遺構・遺物の確認が顕著となり、比較的安定した環境となったことが窺われる。呪符木簡が出土した井戸や掘立柱建物・溝が確認された高ナギ地点<sup>(11)</sup>、下駄やツチノコ・曲物底板が出土した流路が確認された北方地点第2

次調査<sup>(14)</sup>、鎌倉時代の掘立柱建物群が確認された西方地点第2次調査<sup>(19)</sup>などの発掘成果がある。

- 註 (1) 藤井太郎「今池尻遺跡」『平成4年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1995
- (2) 東喜代秀「新方遺跡(平松地点)」『平成2年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1993
- (3) 山口英正・浅谷誠吾・工藤忍「新方遺跡 野手西方地区 第1・2次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2000
- (4) 丸山潔編『特別展 縄文人と弥生人～その時代を生きた人々の表情～』神戸市教育委員会 1998
- (5) 東喜代秀・阿部功「新方遺跡 七反田地点 第2次調査」『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1999
- (6) 丸山潔『新方遺跡発掘調査概要・居住遺跡発掘調査概要』神戸市教育委員会 1984
- (7) 丹治康明「新方遺跡(大日地点)」『昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1985
- (8) a) 渡辺伸行「新方遺跡(東方地点)ー第1次調査ー」『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1987
- b) 渡辺伸行「新方遺跡(東方地点)ー第2次調査ー」『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1987
- c) 渡辺伸行「新方遺跡(東方地点)ー第3次調査ー」『昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1988
- (9) 丹治康明「新方遺跡(村中地点)」『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1987
- (10) 千種浩「兵庫県下における弥生時代から古墳時代初期の鉄製品について」『埋蔵文化財研究会第16回研究集会 発表要旨・関連資料集1』埋蔵文化財研究会 1984
- (11) 丹治康明「新方遺跡(高ナギ地点)」『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1987
- (12) 菅本宏明「新方遺跡ー高ナギ地区 第2次調査ー」『昭和62年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1990
- (13) a) 佐伯二郎「新方遺跡 丁の坪地点 第5次調査」『平成6年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1997
- b) 富加見泰彦・和田理啓「新方遺跡 丁の坪地点 第6次調査」『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1999
- (14) 松林宏典「新方遺跡北方地点 第2次調査」『平成4年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1995
- (15) a) 丸山潔「明石川流域の中期弥生土器ー新方遺跡を中心にー」神戸市史紀要『神戸の歴史』第11号 新修神戸市編集室 1985
- b) 藁科哲男・丸山潔・東村武信「サヌカイトの流通から見た弥生時代摂播国境地域の交流関係」『昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1989
- c) 丸山潔「弥生集落の動態(1)ー摂播国境地域ー」『究班ー埋蔵文化財研究会15周年論文集ー』埋蔵文化財研究会 1992
- (16) 浅谷誠吾「新方遺跡 北方地点 第3次調査」『平成5年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1996
- (17) 平成2年度調査
- (18) 山本雅和・山口英正・浅谷誠吾「新方遺跡野手西方地区 第4～6次調査」『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2002
- (19) 東喜代秀「新方遺跡 西方地区 第2次調査」『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1998

#### 4. 調査組織

調査を実施した各年度の調査組織は以下のとおりである。

[平成9年度] 神戸市文化財保護審議会 史跡・考古資料担当

檀上 重光 神戸女子短期大学教授  
工楽 善通 奈良国立文化財研究所 埋蔵文化財センター長  
和田 晴吾 立命館大学文学部教授

神戸市教育委員会事務局

教育長 鞍本昌男 社会教育部長 矢野栄一郎 文化財課長 杉田年章  
社会教育部主幹 奥田哲通 埋蔵文化財係長 渡辺伸行  
文化財課主査 丹治康明・丸山潔・菅本宏明  
事務担当学芸員 安田滋・橋詰清孝・阿部功 保存科学担当学芸員 千種浩・中村大介  
遺物整理担当学芸員 佐伯二郎 調査担当学芸員 石島三和

(財) 神戸市スポーツ教育公社

理事長 福尾重信 専務理事 田村篤雄 常務理事 中野洋二  
事業課主幹 家根康行 文化財調査係長 丹治康明  
事務担当学芸員 黒田恭正 調査担当学芸員 西岡誠司・藤井太郎

[平成12年度] 神戸市文化財保護審議会 史跡・考古資料担当

檀上 重光 元神戸女子短期大学教授  
工楽 善通 ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長  
和田 晴吾 立命館大学文学部教授

神戸市教育委員会事務局

教育長 木村良一 社会教育部長 水田裕次 文化財課長 大勝俊一  
社会教育部主幹 渡辺伸行 埋蔵文化財調査係長 丹治康明  
文化財課主査 宮本郁雄・丸山潔・菅本宏明 事務担当学芸員 山口英正  
保存科学担当学芸員 千種浩・中村大介 遺物整理担当学芸員 谷正俊

(財) 神戸市体育協会

会長 笹山幸俊 副会長 木村良一・鞍本昌男・山田隆・家治川豊  
相談役 加茂川守 常務理事 静観圭一 参事 財田美信  
総務課長 前田豊晴 事業係長 瀬田吉則 事業課主査 丸山潔・菅本宏明  
事務担当学芸員 斎木巖 調査担当学芸員 安田滋・浅谷誠吾

〔平成13年度〕 神戸市文化財保護審議会 史跡・考古資料担当

檀上 重光 元神戸女子短期大学教授

工楽 善通 ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長

和田 晴吾 立命館大学文学部教授

神戸市教育委員会事務局

教育長 木村良一 社会教育部長 岩畔法夫 文化財課長 桑原泰豊

社会教育部主幹 渡辺伸行 埋蔵文化財調査係長 丹治康明

文化財課主査 宮本郁雄・丸山潔・菅本宏明・千種浩 事務担当学芸員 斎木巖

保存科学担当学芸員 中村大介 遺物整理担当学芸員 黒田恭正

(財) 神戸市体育協会

会長 笹山幸俊 副会長 木村良一・鞍本昌男・山田隆・家治川豊

相談役 加茂川守 常務理事 梶井昭武 参事 財田美信

総務課長 前田豊晴 総務係長 松田保 総務課主査 丸山潔・菅本宏明

事務担当学芸員 川上厚志 調査担当学芸員 山本雅和・佐伯二郎

〔平成14年度〕 神戸市文化財保護審議会 史跡・考古資料担当

檀上 重光 元神戸女子短期大学教授

工楽 善通 ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長

和田 晴吾 立命館大学文学部教授

神戸市教育委員会事務局

教育長 西川和機 社会教育部長 岩畔法夫 文化財課長 桑原泰豊

社会教育部主幹 渡辺伸行・宮本郁雄 埋蔵文化財調査係長 丹治康明

文化財課主査 丸山潔・菅本宏明・千種浩 事務担当学芸員 内藤俊哉

保存科学担当学芸員 中村大介 遺物整理担当学芸員 関野豊

調査担当学芸員 山本雅和

(財) 神戸市体育協会

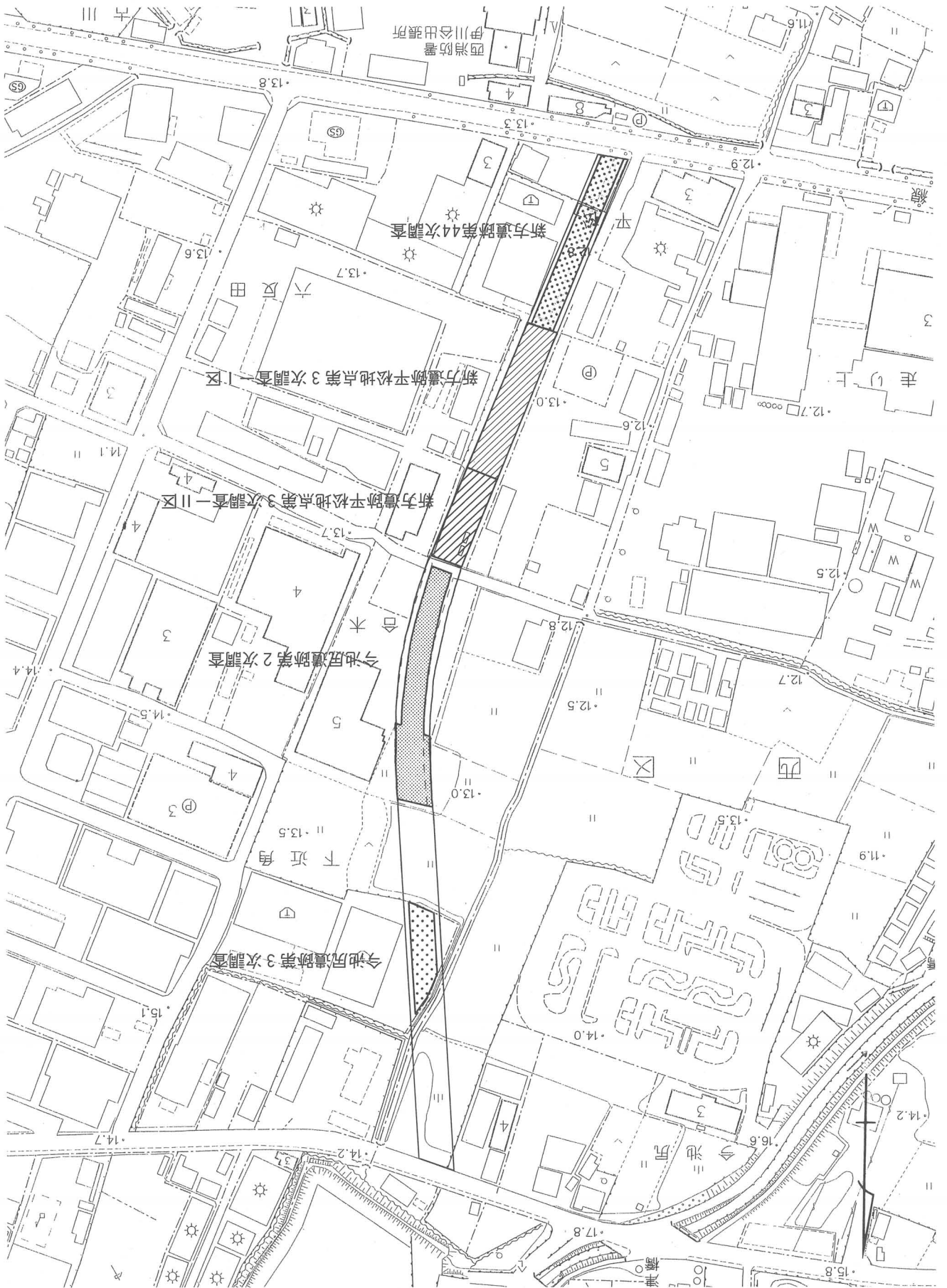
会長 矢田立郎 副会長 鞍本昌男・山田隆・家治川豊・西川和機

常務理事 梶井昭武 相談役 喜旦元和

総務課長 谷川博志 総務係長 松田保 総務課主査 丸山潔・菅本宏明

事務担当学芸員 池田毅 調査担当学芸員 川上厚志

fig.3 出合新方線の路線と調査地区 (1 : 2500)





## 5. 発掘調査の経過

**試掘調査** 出合新方線街路築造予定地を対象とする試掘調査は平成9年3月18日に実施した。対象全線のうち、未買収地が大半であったため、試掘坑はわずか3ヶ所設定できただけであったが、弥生時代・古墳時代・平安時代の遺物包含層が確認された。この結果を受けて、ほぼ全線に及ぶ文化財調査の必要性が明らかとなった。

**現地調査** 平成9年度には対象地区の中央やや南寄りの約1,800㎡について調査を実施することとなった。平成8年度に実施した試掘坑1を設定した部分で、新方遺跡平松地点第3次調査に当たる。調査の実施時期を分けたため、夏季に実施した調査区をⅠ区と称し、冬季に実施した調査区をⅡ区と呼称している。Ⅰ区は約1,050㎡を対象とし、平成9年6月2日～9月13日の間実施した。弥生時代後期の溝・ピットや平安時代の水田址・流路が確認された(第Ⅴ章)。この北側に続くⅡ区は約670㎡を対象として12月10日から平成10年3月31日まで調査を実施したが、Ⅰ区に隣接するにもかかわらず、予想に反して、平安時代中期中頃あるいは平安時代後期初めの遺構・遺物が確認され、多くの成果に恵まれた。中でも平安時代後期初めの鍛冶炉の検出は特筆できる(第Ⅳ章)。

用地買収の関係等で平成10・11年度には調査が実施されなかったが、平成12年度には約1,200㎡を対象として、今池尻遺跡第2次調査を5月30日～10月6日の間実施した。新方遺跡平松地点第3次調査Ⅱ区と道路を隔てた北側の調査区に当たる。同様に遺構・遺物の分布が続くものと予想されたものの、約70mにわたって北側へ鋤溝が連続して確認された後、平安時代後期初めの掘立柱建物が集中して確認された。さらに下層では古墳時代後期の水田址・流路、弥生時代末の流路・落ち込み、弥生時代中期の土坑なども確認された。さらに北側へは遺構・遺物が稀薄となっていく状況であった(第Ⅲ章)。

翌平成13年度は今池尻遺跡第2次調査の成果を受け、再度試掘調査を実施し、遺跡の範囲を明確にした上で、全面調査を実施することとなった。11月8日～19日には試掘調査を実施し、この成果に基づいて今池尻遺跡第3次調査を約403㎡について11月28日～平成14年2月20日まで実施した。弥生時代後期と古墳時代後期の遺構面が確認され、竪穴住居などの遺構・遺物がまとまって確認された(第Ⅱ章)。

さらに、平成14年度は対象区間の南端に当たる新方遺跡第44次調査を、4月15日から10月2日まで実施した。対象面積は約780㎡である。平松地点第1次調査の成果から一部では弥生時代前期の遺物の出土は予想されたものの、この他の時期については遺構・遺物が濃密ではないと予想されていた。しかし、遺構面が最大で5面確認され、弥生時代前期・弥生時代中期～後期～古墳時代前期・古墳時代後期・平安時代中期・鎌倉時代後半の遺構・遺物が確認された。特に弥生時代後期～古墳時代前期では竪穴住居などの遺構の検出が顕著で、明らかに集落域が広がっていることが確認された(第Ⅵ章)。

**遺物整理** 遺物の整理作業は、各調査毎に現地での発掘調査撤収とほぼ同時に、遺物の水洗作業を神戸市埋蔵文化財センターで実施した。しかしながら、これ以上の作業はほとんど未着手で収蔵庫に保管されていた。

平成14年度の調査開始段階で年度内での報告書刊行を計画したことから、急遽各調査地点の遺物の整理作業を並行しながら、埋蔵文化財センターで実施することとなった。しか



fig.4 整理作業

し、その遺物量は各調査ともに予想以上に多く、それぞれを十分に整理し、各担当者が検討できたものとは考えていない。また、合わせて鉾の科学的分析や木製品の樹種同定、花粉分析などの委託業務も実施し、その成果も報告書に掲載できるように努めた。また、報告書掲載遺物の写真撮影も2回に分けて実施している。さらに、このような各作業と並行しながら本報告書の原稿執筆・作成を調査担当者が分担して順次実施していった。

## II. 今池尻遺跡第3次調査

### 1. 試掘調査の概要

試掘調査の対象となった地区は、平成8年度に試掘調査を実施したものの、文化財の状況が十分に把握できていなかった範囲にあたる。第2次調査地点の北端から北側の区間の埋蔵文化財の存在の有無とその範囲を確定するために試掘調査を改めて実施した。調査は工場敷地内の駐車場部分には試掘坑を、その他にはトレンチを適宜設定して、重機を併用して実施した。

**1 トレンチ** 第2次調査地点北端のすぐ北側に隣接する圃場で、各土層はほぼ水平に堆積している。遺物は旧耕土および灰色粘性シルトから磨滅の著しい土師器・須恵器が出土した。また、北半で下層確認のために深掘した部分では、褐色砂礫から土師質の土器小片が2点出土した。遺構は全く確認できなかった。

**2 トレンチ** 現状では盛土が約1.3m施されて高くなっているが、耕土の標高をみると、南端の圃場よりも約0.40m低い地形であったことが判る。遺物は淡灰色シルトや灰色シルトなどから土師器・須恵器が数片出土したのみである。また、南端部分の下層には後述する試掘坑2の遺物包含層と類似した土層が存在するが、試掘坑2に比べて色調が淡く、遺物も出土していない。遺構も全く確認できていない。

**試掘坑1** 土層は1トレンチ部分とほぼ同様の堆積を示す。遺構・遺物は確認できなかった。

**試掘坑2** G.L. -1.48mとG.L. -1.85mで不明瞭ながらピット状の落ち込みを断面で確認した。また、G.L. -2.10mで弥生時代後期の土器を含む淡黒灰色シルトを検出した。

**試掘坑3** 試掘坑1～試掘坑2の間で遺物包含層の拡がりを確認するために追加した試掘坑である。G.L. -1.90mで淡黒灰色シルトの遺物包含層を確認した。また、遺物包含層下でピットと土坑状の遺構も検出した。

以上のような試掘調査結果から、試掘坑2～試掘坑3を中心とする路線敷延長約40mについて遺跡が存在することが判明し、この微高地上には遺構が広がっているものと考えられる。(佐伯)

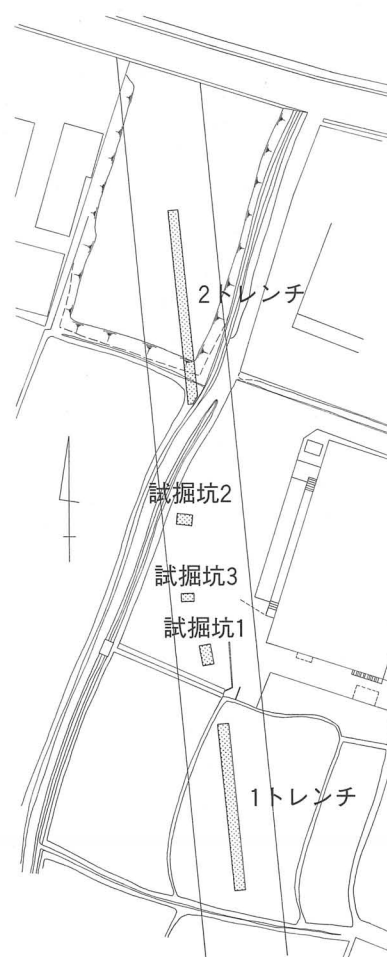


fig.5 試掘調査地区の位置  
(1 : 1,500)

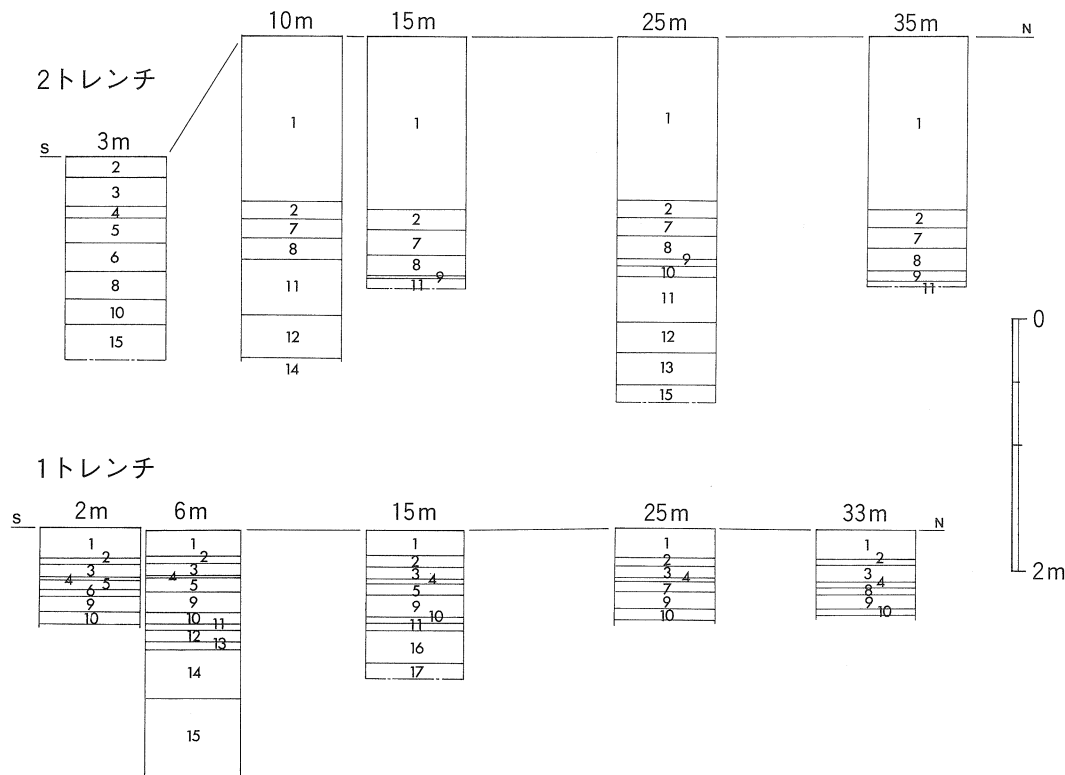


fig.6 試掘調査地区 トレンチの土層断面図

1トレンチ

- 1 盛土 2 耕土 3 褐灰色砂質土 4 淡灰色砂質土 5 淡灰色砂
- 6 淡灰色シルト混白灰色砂 7 淡緑灰色シルト質砂 8 淡灰色シルト 9 淡褐灰色シルト
- 10 灰色シルト 11 青灰色シルト 12 暗灰色粘性シルト 13 灰色粘性シルト
- 14 緑灰色シルト 15 青灰色粘土

2トレンチ

- 1 耕土 2 淡灰色シルト 3 淡灰黄色粘性シルト 4 黄橙色粘性シルト
- 5 淡灰色シルト質細砂 6 乳灰色粘性シルト 7 褐灰色粗砂
- 8 淡褐灰色細砂混シルト 9 淡灰色シルト 10 灰色粘性シルト
- 11 明オリブ灰色シルト 12 淡灰色細砂~粗砂 13 褐灰色細砂
- 14 灰色粘性シルト 15 褐灰色細砂質シルト 16 淡灰色細砂 17 灰色粘性シルト

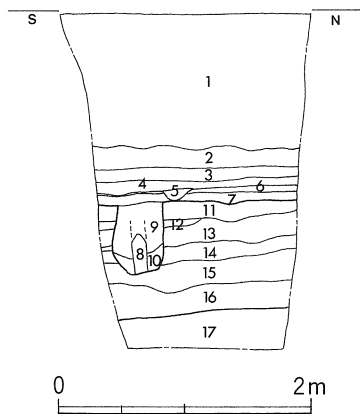


fig.7 試掘坑2 土層断面

- 1 盛土 2 耕土 3 緑灰色細砂質シルト 4 淡緑灰色細砂質シルト
- 5 淡灰色シルト 6 黄褐色粘性シルト 7 淡灰色シルト
- 8 灰色シルト質粘土 9 淡緑灰色粘性シルト 10 緑灰色砂混シルト
- 11 淡緑灰色細砂質シルト 12 淡緑灰色シルト 13 淡青灰色シルト
- 14 緑青色粘質砂 15 灰色粘土 16 淡黒灰色粘性シルト
- 17 淡青灰色シルト質粘土

## 2. 調査の概要

第3次調査は、上述した試掘調査の結果を受けて、計画道路路線幅員16mのうち、歩道設置予定部分を除く幅約11m、総延長約40mについて全面調査を実施した。試掘坑1～3と重複する範囲にあたる。

まず、路線敷の南側に隣接する圃場（試掘調査1トレンチ設定部分）を掘削残土の仮置場とするために現耕土を重機によって横置きした後、調査区の掘削を開始した。調査対象区は隣接する工場の駐車場となっていたために旧地盤から厚く盛土が行われていたため、掘削土量も多く、重機掘削には予想以上の期間を要することとなった。重機掘削完了後は順次人力掘削を実施していった。なお、アスファルトガラおよびコンクリートガラなどは場外で処分し、調査完了後は掘削土でのみ埋め戻しを実施した。

**基本層序** 基本層序は、現地表からアスファルト・盛土層、耕土層、3～4枚の黄灰色系の旧耕土層の順となり、黄色系極細砂層あるいは乳灰色系極細砂層の後、乳灰色シルト質極細砂層の古墳時代後期の遺物包含層に至る。この上面が本来は古墳時代後期末の遺構面を形成していたと考えられるが、後期後半の遺構とともに同一面の黄色シルト質極細砂層上面を第1遺構面として検出してしまっている。この基盤層の下層では一部で無遺物の土壤化層も確認できた。さらに、第1遺構面の下層には弥生時代後期の遺物包含層である暗褐色シルト質極細砂層があり、第2遺構面の基盤層は黄色系のシルト混じり極細砂層となる。これらの下層には青灰色細砂層あるいは砂礫層が厚く堆積し、無遺物の黒色シルト層に至る。なお、調査区の北端および南端は後世の洪水によって削平を受けていたようで、それぞれの遺構面に対応する層序は全く確認できていない。

以上のように、今回の調査区では、弥生時代後期と古墳時代後期の2面の遺構面が確認できた。



fig.8 調査作業

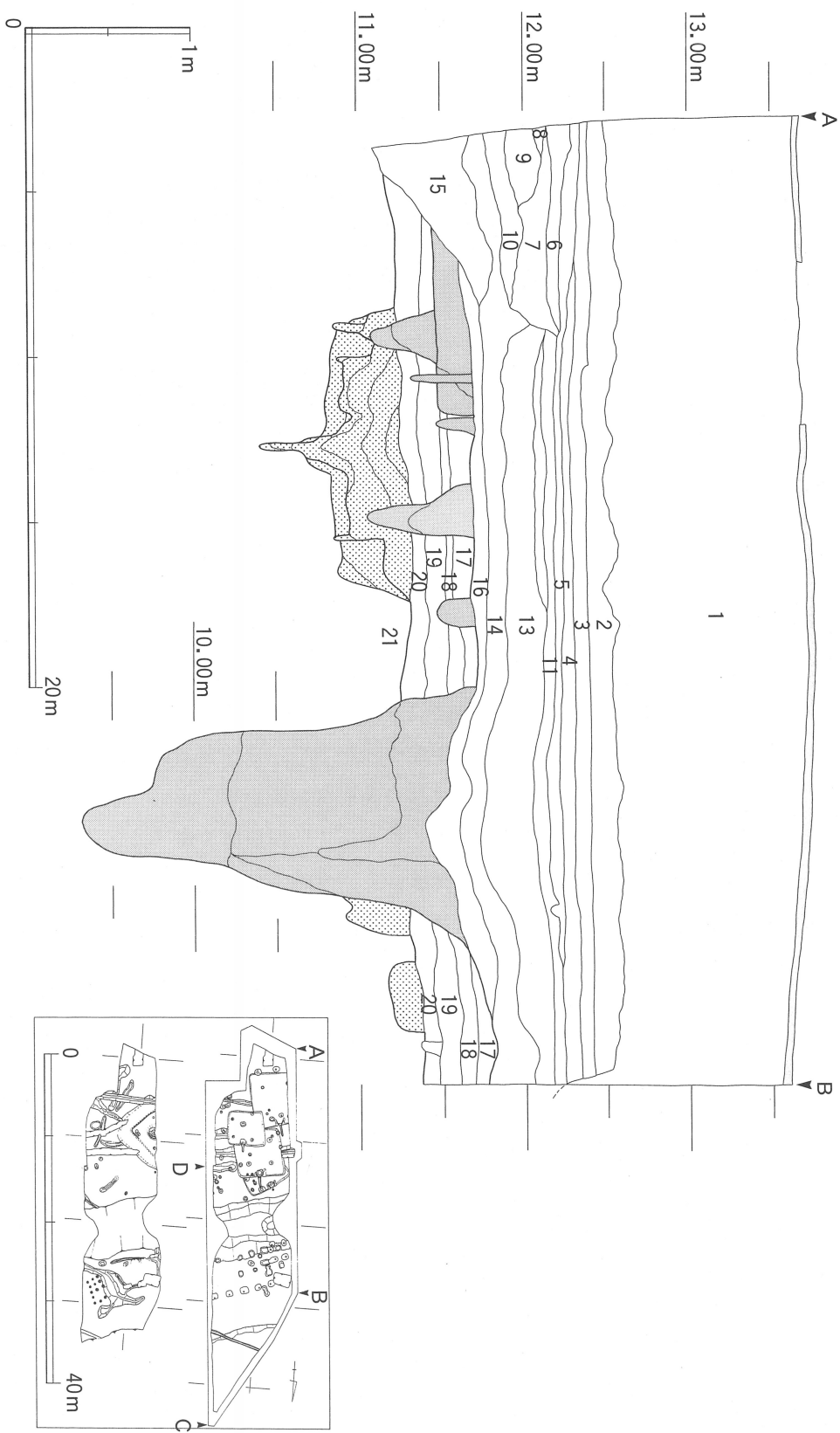


fig. 9 西壁の土層断面

- 1 盛土      2 耕土      3 淡黄灰色シルト質細砂(旧耕土)      4 黄灰色シルト質細砂(旧耕土)      5 淡乳灰色シルト質極細砂～細砂(旧耕土)
- 6 淡乳灰色シルト質極細砂(細礫混じり)      7 乳色細砂～小礫      8 乳灰色シルト質細砂(小礫混じり)      9 淡黄色シルト混極細砂～細砂
- 10 淡乳灰色シルト質極細砂      11 灰色極細砂混シルト      12 乳色粗砂～小礫      13 淡黄色わずかにシルトを含む極細砂
- 14 淡乳灰色極細砂質シルト      15 灰白色極細砂質シルト      16 暗乳色シルト質極細砂(3～5mm大の炭を含む)
- 17 淡乳黄色シルト質極細砂      18 暗乳褐色細砂混シルト(3mm大の炭含む・土壌化)      19 明黄色極細砂混粘土
- 20 暗褐色シルト質極細砂(5mm大の炭含む)      21 淡乳黄色シルト質極細砂

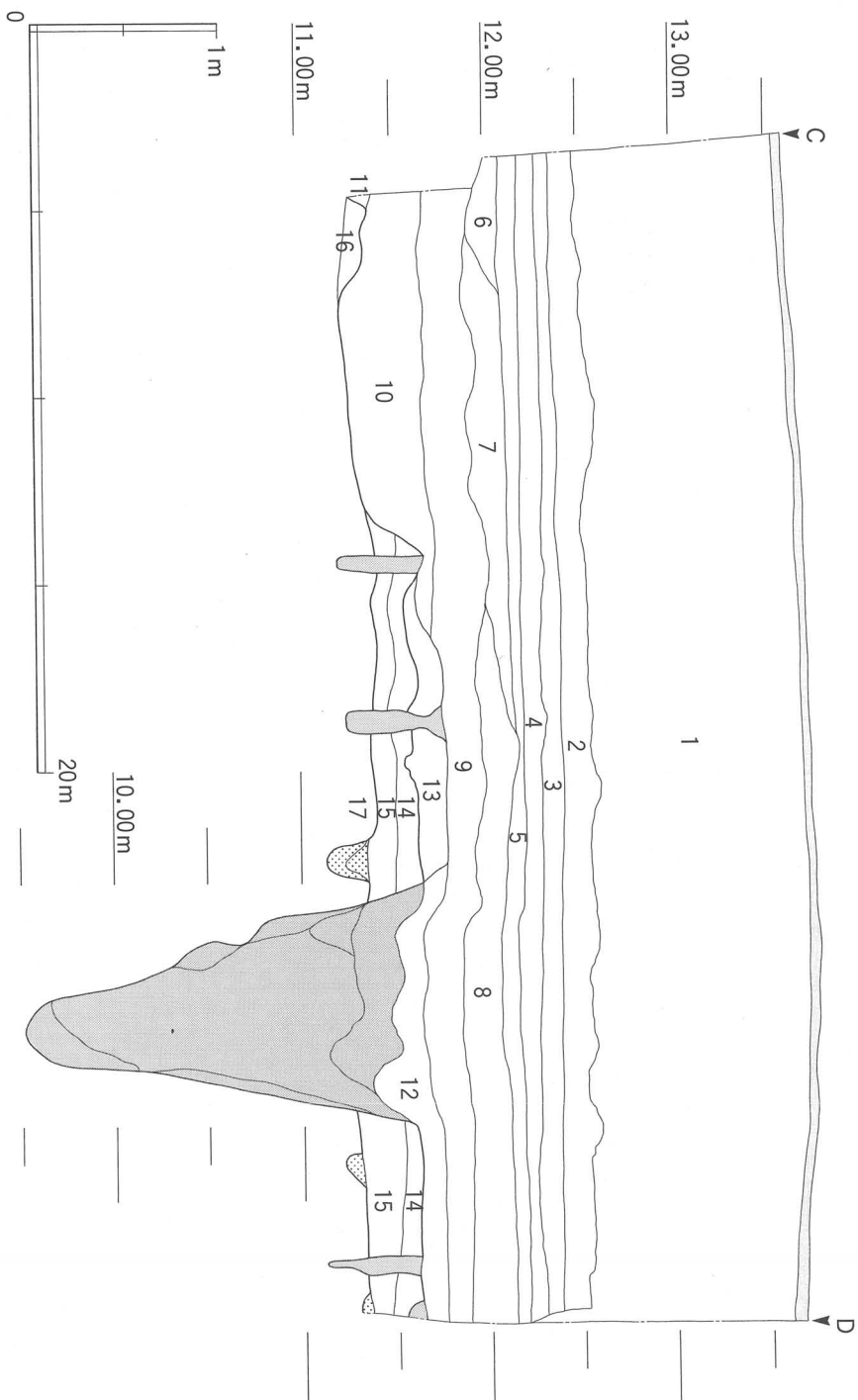


fig.10 東壁の土層断面

- 1 盛土      2 耕土      3 暗黄灰色シルト質細砂(旧耕土)      4 黄灰色シルト質細砂(小礫混じり、旧耕土)      5 淡乳黄色シルト質極細砂(旧耕土)
- 6 淡乳黄灰色シルト質極細砂~細砂      7 淡乳灰白色シルト混極細砂      8 淡乳灰白色極細砂~細砂      9 淡黄色シルト質極細砂
- 10 淡緑灰色極細砂混シルト      11 淡灰白色シルト混極細砂      12 暗乳灰色シルト質極細砂      13 暗乳褐色シルト質細砂~粗砂
- 14 淡乳黄色シルト質極細砂      15 暗乳色シルト質極細砂      16 暗灰色極細砂混シルト      17 明黄色シルト混極細砂

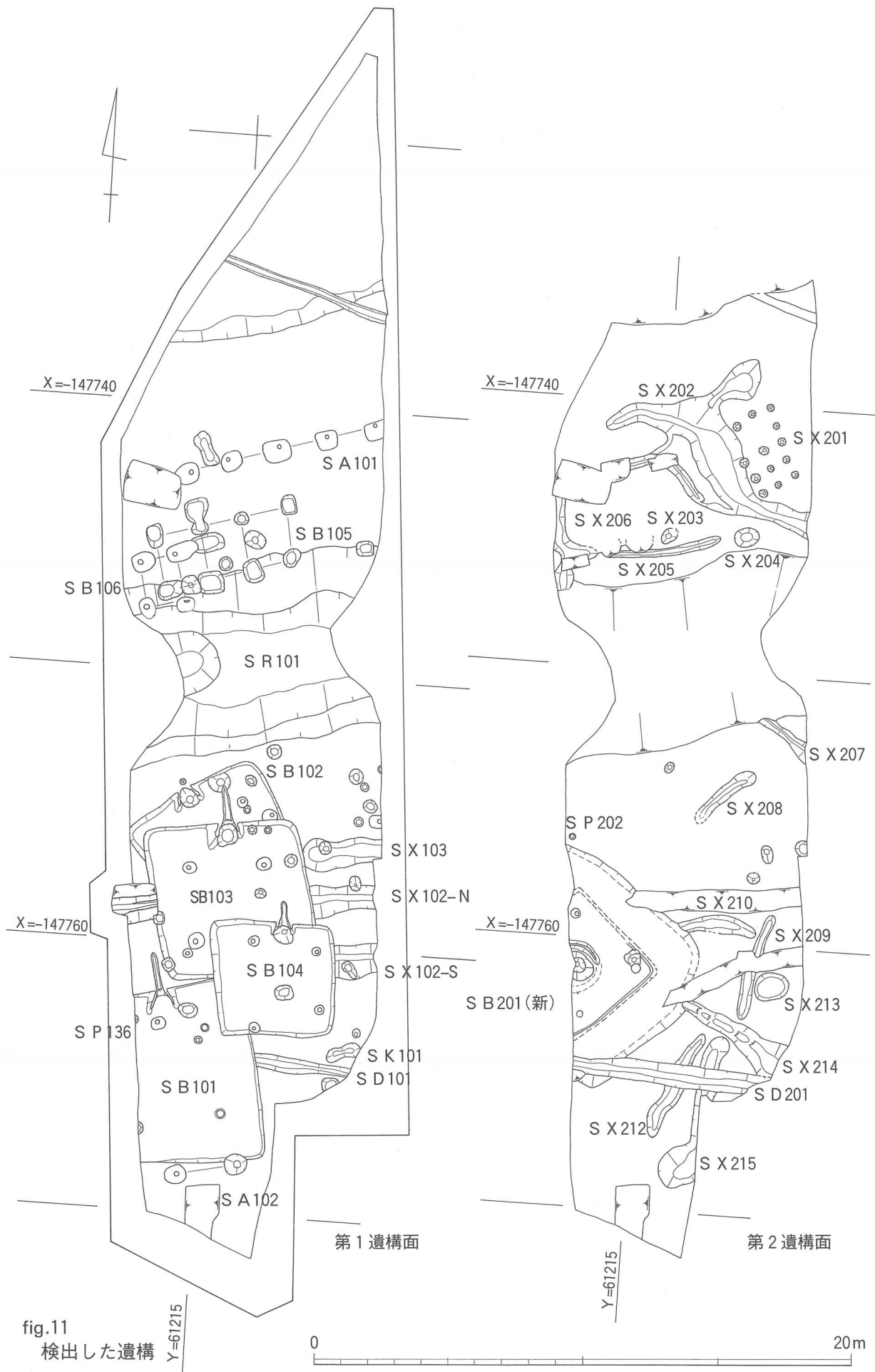


fig.11  
検出した遺構



### 3. 弥生時代後期の遺構と遺物（第2遺構面）

第2遺構面は弥生時代後期の遺構面で、方形竪穴住居1棟、溝2条、土坑1基、溝状落ち込み8基、ピットなどが確認できた。

#### (1) 竪穴住居・掘立柱建物

S B 201 西半が調査区外の西へ延びるため、全容の詳細が明らかではないが、一辺約8mと推定され、平面形がやや丸みをもった方形の竪穴住居で、建て替えが一度行われている。当初の住居を（古）とし、建て替え後の住居を（新）と便宜的に呼称している。

S B 201（古）は緩やかに立ち上がる周壁と4本の支柱をもつと推定できる竪穴住居で、中央土坑は（新）と同位置にあったためか、確認できていない。柱間距離はP1—P2間が3.10m、P2—P3間が2.90mで、床面の標高は10.80mである。P1では直径0.15m、深さ0.38mの柱痕が、P2では直径0.15m、深さ0.32mの柱痕がそれぞれ確認できた。この住居の床面に伴う明確な遺物は確認できていない。なお、東方から延びてくるS X 214に周壁および床面が切られている。

S B 201（新）はS X 214の埋没後S B 201（古）と掘形を同じくして建て替えられたと推定できる住居で、周壁に沿って幅1.5m前後、高さ0.20m前後の盛土によるベッド状遺構と幅0.10m前後の周壁溝で画された貼り床による床面をもち、中央土坑1基と3基の支柱穴が床面で確認できた。本来は4本柱で構成されるものと考えられ、柱間距離はP1—P2間が3.00m、P2—P3間が2.70mである。床面の標高は10.90mで、ベッド状遺構の標高は11.10mである。中央土坑は平面形が円形で、断面形がロート形で、直径1.2m、最大深さ0.54mで、中層以下は炭層が充満しており、埋土の中位で甕の体部下半が出土している。また、土坑上端外側には幅0.20～0.30m、高さ0.05m前後の断面蒲鉾形の周堤が巡っている。支柱穴3基はいずれも直径0.15m、深さ0.35mの暗乳灰色シルトを埋土とする柱痕が確認できる。なお、P1では掘形の底に拳大の河原礫3個で構成される礎盤が確認できた。なお、この住居に伴う遺物には北隅のベッド状遺構上で周壁に接して完形の甕3個体が、床面のP1に接して壺・甕が、P3に接して広口壺と細頸壺各1個体がある。

**出土遺物** 1はベッド状遺構を構成する盛土の下層にあたる周壁に沿って貼り付いていたもので、口径38.6cmの鉢である。口縁部は外上方へ長く延び、端部は大きく上方へつまみ上げられ、凹線が2条巡る。体部外面は2条/cmの平行叩きで仕上げられる。2は同一個体と考えられる肉厚の鉢の底部で、底径8.2cmである。なお、1・2はS B 201（古）に伴う遺物である。

3は口径11.6cm、体部最大径17.7cm、器高23.4cmの広口壺。体部は無花果形で、口縁部はやや内湾しながら長く延びた後、緩やかに「く」字形に外反する。口縁端部はわずかに下方に拡張されるが、平坦な端面をもつ。体部外面下半は8条/cmの刷毛の後ヘラ磨き調整で、上半は3条/cmの平行叩きの後ヘラ磨き調整である。4は口径15.0cm、体部最大径23.3cm、器高24.6cmの広口壺で、やや下膨れの体部から内湾しながら延びた後大きく「く」字形に外反する口縁部をもつ。口縁端部はわずかに上下に拡張される。体部外面下半はヘラ磨き調整で、上半は10条/cmの刷毛の後ヘラ磨き調整である。内面下半は8条/cmの刷毛調整である。体部外面下半には煤の付着が顕著である。5は口径7.4cm、体部最大径17.0

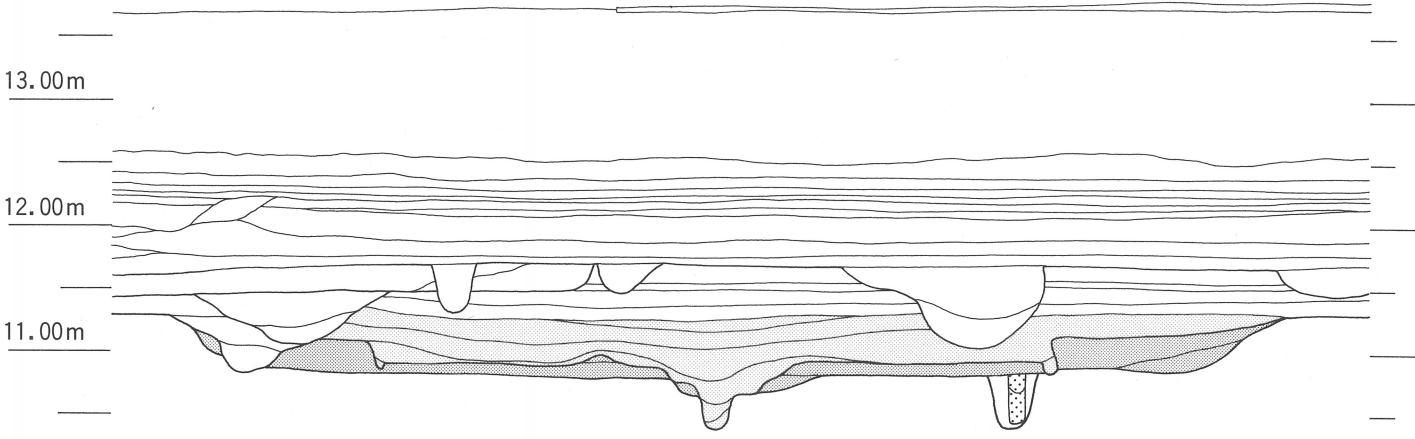
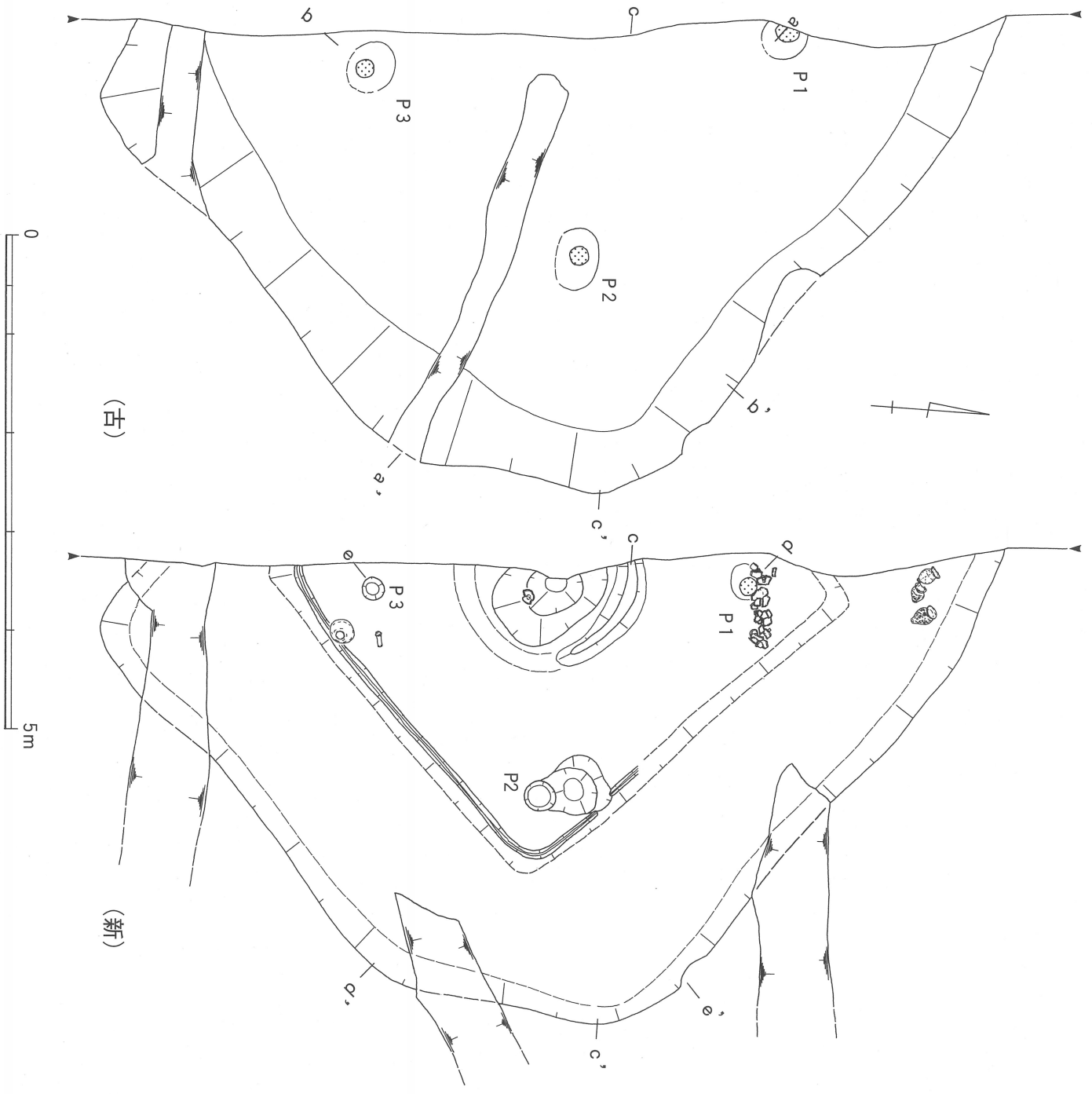


fig.12 S B 201



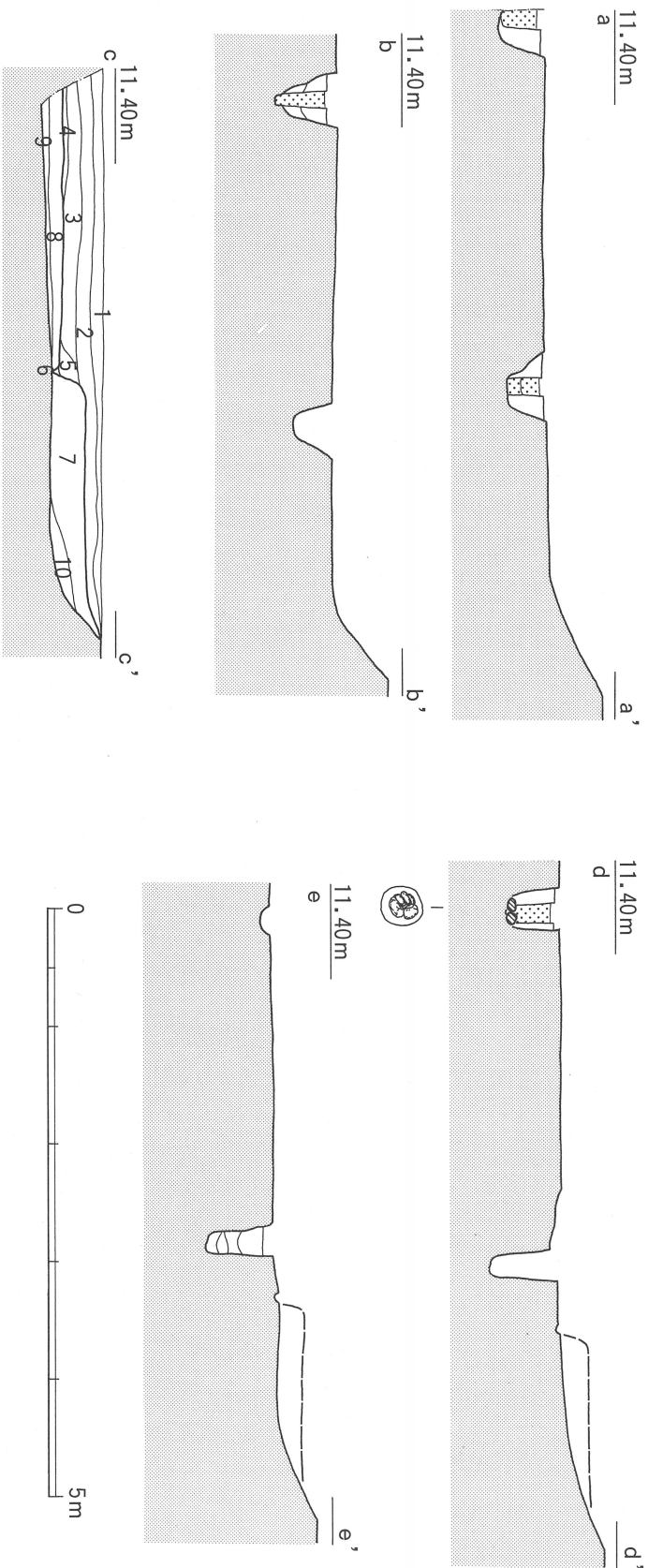


fig. 13 S B 201 断面

- 1 淡乳灰色シルト質極細砂 (炭の微粒を多く含む)
- 2 暗緑灰色シルト質極細砂 (わずかに細礫含む、5~10mm大の炭を含む)
- 3 暗灰色シルト質極細砂 (10mm大の炭を多く含む)
- 4 黒色炭層
- 5 暗緑灰色シルト質極細砂
- 6 暗灰色極細砂質シルト
- 7 淡緑灰色シルト混極細砂~細砂 (堅緻、5mm前後の炭・土器片含む)
- 8 暗緑灰色シルト混極細砂~細砂 (堅緻、5mm前後の炭・土器片含む)
- 9 淡黒灰色シルト混極細砂~細砂
- 10 淡緑灰色シルト質細砂

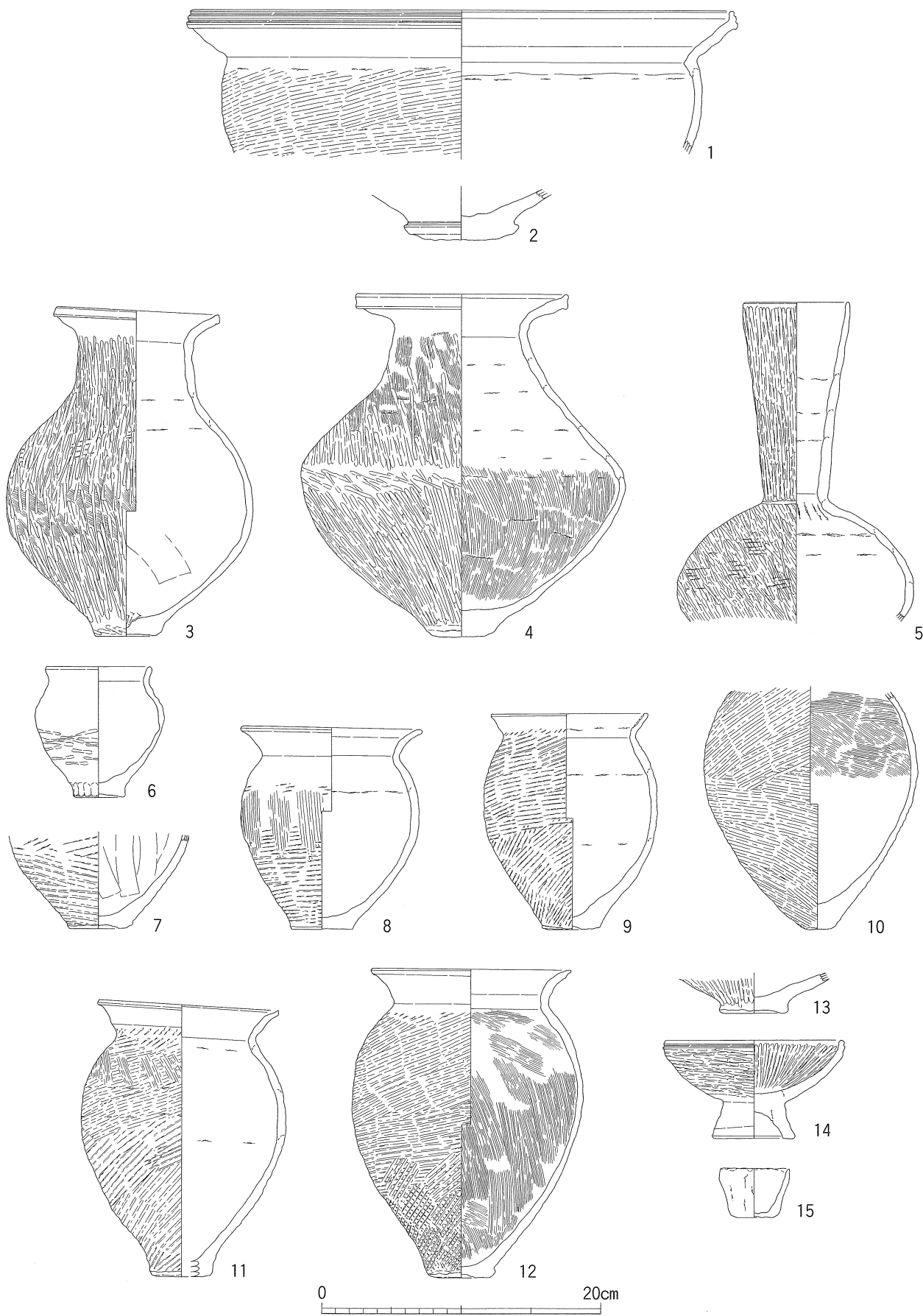


fig.14 S B 201出土の土器

cm、残存高22.4cmの細頸壺で体部下半～底部を欠損する。体部はやや扁平な球形と考えられ、口縁部は長く延び、わずかに端部で内傾する。体部の調整は3条/cmの平行叩きの後ヘラ磨きで、口縁部は縦方向の密なヘラ磨きである。6は口径7.4cm、体部最大径9.3cm、器高9.4cmの無頸壺で、体部下半の一部にヘラ磨き調整が施される。7～9は小型の甕で、10～12は中型の甕である。7はS B 201（新）中央土坑出土の小型甕の体部下半である。底径4.7cmで、外面は1.5条/cmの平行叩き調整で、内面は板ナデ調整である。8は口径12.8cm、体部最大径12.7cm、器高14.6cmの小型甕で、体部外面は3条/cmの平行叩き調整で、上半は6条/cmの刷毛あるいはナデでスリ消す。9は口径11.2cm、体部最大径12.4cm、器高15.5cmの小型甕で、外面にはほぼ全面に煤の付着が認められる。調整は体部外面が3条/cmの平行叩きで、中位での分割成形が顕著である。10は口縁部を欠損する中型の甕で、体部最大径15.4cm、器高17.1cmで、底部は小さな平坦面をもつ程度のものである。外面は下半が2条/cmの左上がりの平行叩きで、上半が右上がりの平行叩きである。中位付近には煤の付着が顕著である。11は口径12.7cm、体部最大径14.7cm、器高19.5cmの中型甕で、口縁部は「く」字形に外反した後端部がさらに強いヨコナデによって内湾気味につまみあげられる。体部外面は2条/cmの平行叩きの後上半は6条/cmの刷毛で部分的にスリ消されている。中位から上位にかけて分割成形が顕著である。口縁部と体部下半の外面には煤の付着が顕著である。12も口径14.0cm、体部最大径16.6cm、器高22.1cmの中型甕で、口縁部は「く」字形に外反した後端部はさらに強いヨコナデによって外上方へつまみあげられる。体部外面は2.5条/cmの平行叩きで分割成形されるが、最下位は左上がりの叩きを施した後右上がりの叩きを施している。体部内面は8条/cmの縦刷毛調整である。体部下半の外面には煤の付着が顕著である。13は中型の鉢の底部で、底径4.8cmである。外面はヘラ磨き調整である。P 3の掘形から出土している。14は外下方に踏ん張る短い脚台をもつ小型鉢で、口径12.6cm、底径5.6cm、器高7.1cmである。口縁端部外面には凹線1条が顕著であるが、さらに下位にはヘラ磨きでつぶれた凹線が2条観察できる。内面は放射状に施されたヘラ磨き調整である。15はミニチュアの鉢で、口径4.9cm、器高3.6cmで、ナデあるいは指頭圧痕で仕上げられる。以上の3～15はS B 201（新）に伴う。

以上の出土遺物から、S B 201（古）は弥生時代後期前半に、S B 201（新）は弥生時代後期中頃に比定できるものと考えている。

- S X 201 主に暗乳褐色シルト質極細砂を埋土とする直径0.25～0.30m、深さ約0.10mの平面円形のピットが2×4間分で並ぶ遺構である。北から2列目のピット2基は欠如しており、整然とは並んでいない。なお、P 9はS X 202の東肩部を切っている。柱間距離はピットが欠如する部分を除けば、最小0.62mから最大0.88mの範囲となり、0.75～0.80m間隔のものが多く、わずかに南北方向の柱間距離の方が短いことが判る。建物を構成するには柱配置も一定でなく、各ピットも浅い。出土遺物には弥生土器小片があるが、その性格は不明である。

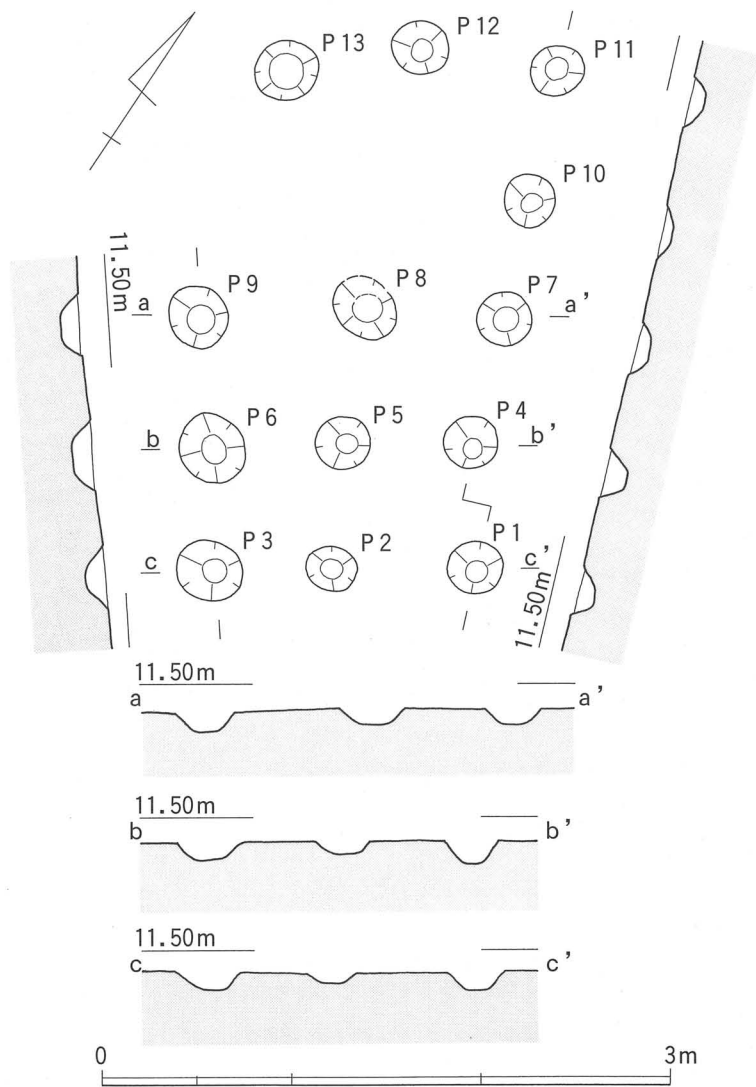


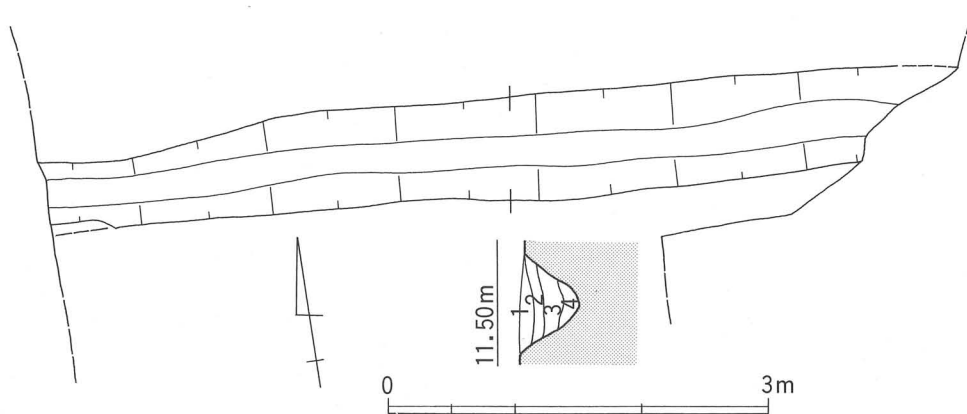
fig.15 S X 201

(2) 溝

S D 201 東西方向に走り、S B 201 (新)・S X 212・S X 215を切る溝状遺構である。最大幅0.90m、最大深さ0.45mで、溝底の標高が概ね東から西に向かって低くなっている。埋土からの出土遺物には弥生土器の小片がある程度で、詳細な時期は不明である。第2遺構面で確認できた遺構のうちでは、最も時期の降る遺構と考えている。

fig.16 S D 201

- 1 淡乳灰色シルト質極細砂～細砂
- 2 乳灰色極細砂質シルト
- 3 淡緑灰色極細砂+乳灰色シルト
- 4 淡乳灰色シルト



S X 214 S B 201 (古) を切り、S B 201 (新) 中央土坑およびS D 201に切られる溝状遺構である。東端では最大幅1.5m、深さ0.18mで、S X 209・215に挟まれた最深部では、大型の土器片が出土し、この部分での深さは0.73mである。溝底の標高は概して東から西へ傾斜することから、当初S B 201の排水溝かとも考えていたが、S B 201とは全く別の遺構と考えている。埋土は最下層が炭を多く含む暗灰色極細砂混じりシルトで、中層は緑灰色系シルト質極細砂で、上層は淡乳灰色シルト質極細砂である。

出土遺物 16は口縁端部を欠く細頸壺の口頸部で、17は最大径25.5cmの体部と考えられる。両者ともに外面のヘラ磨き調整が顕著である。18は小型の甕の口縁部で、口径10.5cmである。外面は3条/cmの平行叩きの後10条/cmの刷毛でスリ消す。19・20は有孔鉢の底部である。19では外面は縦位の3条/cmの平行叩きの後スリ消し、内面は6条/cmの刷毛調整が施される。20では2条/cmの平行叩き仕上げである。21は口径24.6cmの鉢で、口縁端部はわずかにつまみあげられる。内外面ともにヘラ磨き調整で丁寧に仕上げられる。22・23はミニチュア土器で、22では外面に8条/cmの刷毛調整が施される。

fig.17 S X 214

- 1 淡乳灰色シルト質極細砂
- 2 緑灰色シルト質極細砂
- 3 淡緑灰色シルト質極細砂
- 4 暗灰色極細砂混シルト  
(3mm大の炭含む)

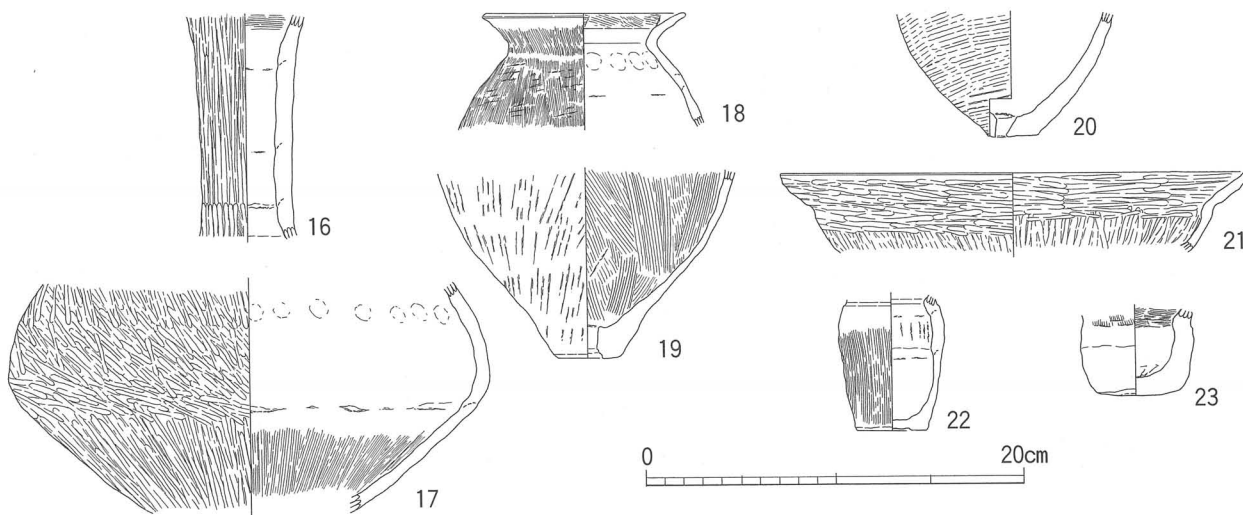
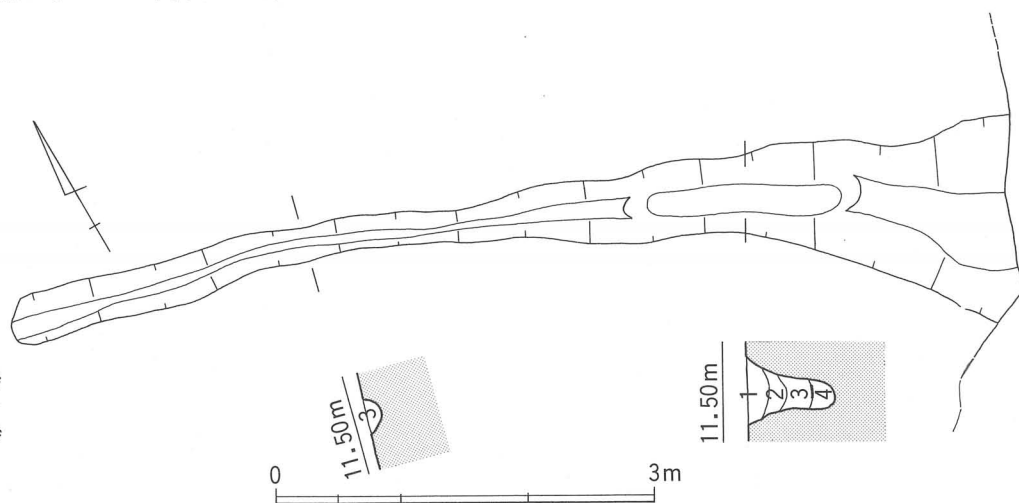


fig.18 S X 214出土の土器

(3) 土坑・落ち込み

S X 202 最大幅2.75m、深さ0.32mの大型の落ち込みから不整方向に溝が延びる落ち込みである。南東へ延びる溝状部分では遺物が比較的集中して出土しているものの、遺構の規模に比して概して遺物量は少なく、中央部の埋土下層（3層）からは遺物が出土していない。

出土遺物 24は中型の甕の口縁部で、口径14.2cm。「く」字形に外反する口縁部の端面には凹線が1条巡る。体部外面は3条/cmの平行叩きの後ナデによる半スリ消し。25は平底の甕の底部で、外面は3条/cmの縦位の平行叩きで仕上げられる。煤の付着が顕著で、底部外面は被熱のため器表が剥離している。26は倒卵形の鉢で、口径11.2cm、器高10.5cmである。外面は3条/cmの平行叩き仕上げで、その他はナデ仕上げである。

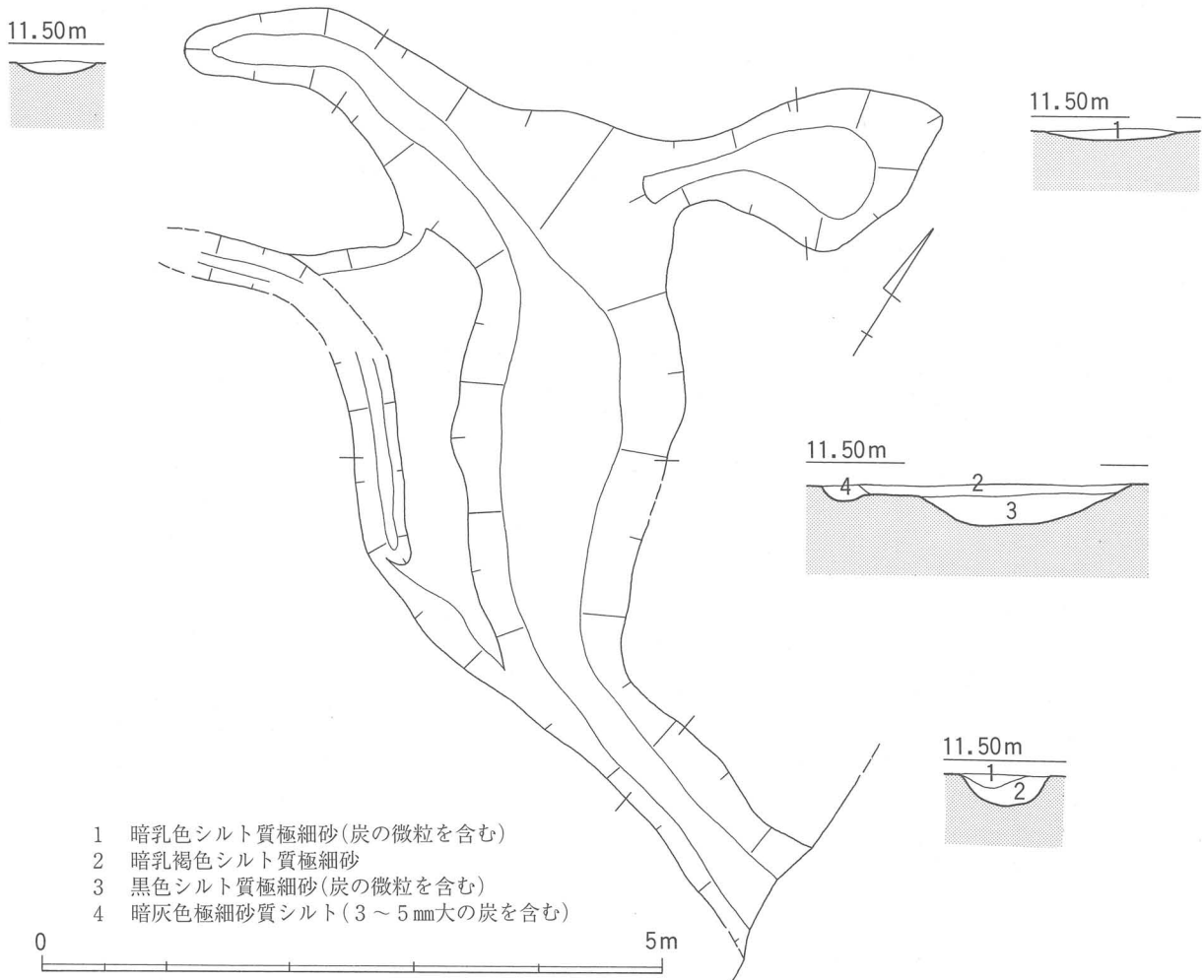


fig.19 S X 202

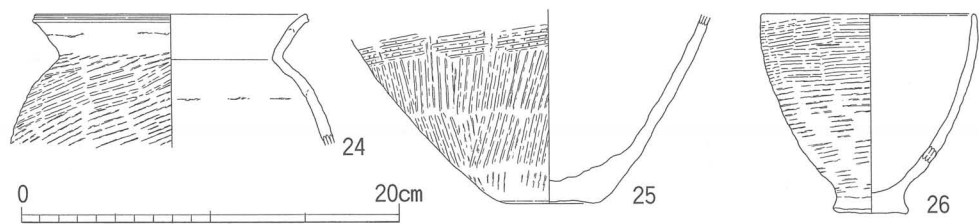


fig.20 S X 202出土の土器



S X 203 長径0.72m、短径0.47m、深さ0.12mのやや歪な楕円形の土坑で、埋土は炭粒を多く含む暗乳褐色シルト質極細砂と暗青灰色シルト質極細砂である。出土遺物には弥生土器の小片がある。

S X 204 長径0.95m、短径0.69m、深さ0.09mの楕円形の土坑で、埋土は炭粒を含む暗乳色シルト質極細砂である。出土遺物には弥生土器の小片がある。

S X 205 最大幅0.35m、最大深さ0.06m、総延長4.28mの溝状遺構である。埋土は炭粒を含む暗乳色シルト質極細砂で、出土遺物には弥生土器の小片がある。上層遺構によって削平されており、S X 206に続く遺構とも考えられる。

S X 206 西側は調査区外に延び、南と北を削平されているため、全容は窺えない。蛇行する溝状遺構かもしれない。最大幅0.71mで、最大深さ0.32mで、埋土は暗乳灰色シルト質極細砂である。

27は口径19.4cmの鉢の口縁部で、内面に6条/cmの刷毛調整が施される。

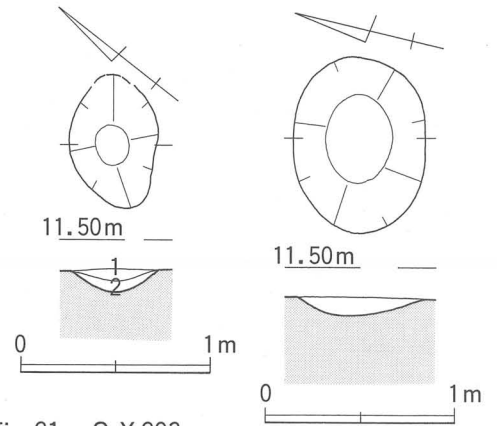


fig.21 S X 203

- 1 暗乳褐色シルト質極細砂 (5mm大の炭を含む)
- 2 暗青灰色シルト質極細砂 (炭の微粒を含む)

fig.22 S X 204

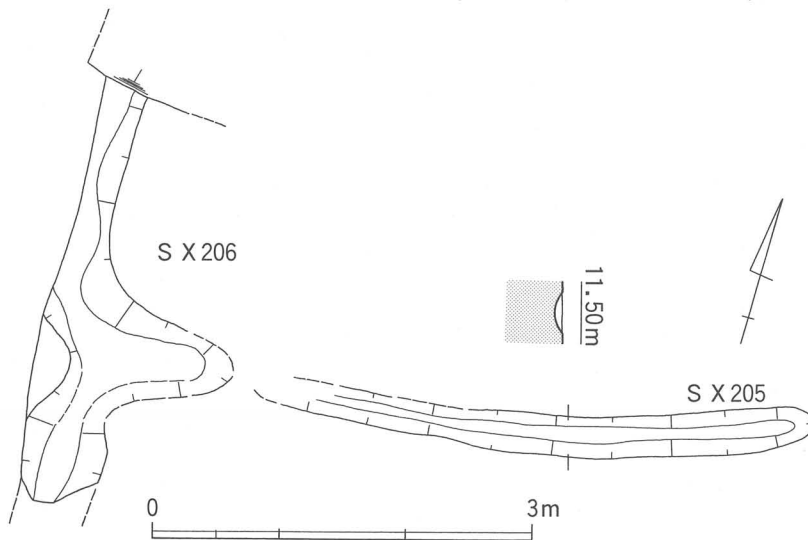


fig.23 S X 205・206

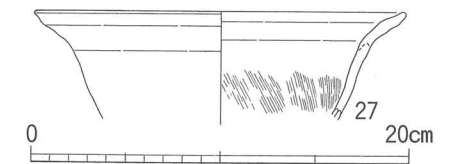


fig.24 S X 206出土の土器

S X 208 最大幅0.55m、長さ2.45m以上、最大深さ0.22mの船底形の土坑で、西端は上層遺構のため、削平されている。埋土は乳灰色系のシルト質極細砂で、東半部の上層から完形の高坏を含む壺・甕がまとまって出土している。図化した8個体の土器以外には約1/8残存し、口縁端部外面に沈線が1条巡る高坏の口縁部が1点存在するのみで、この他に別個体の破片は一切存在しない。

出土遺物 28は丸みをもった扁球形の体部から短く外反してたちあがる口縁部をもつ広口壺で、口径14.7cm、体部最大径24.3cm、残存高20.2cmで、底部は欠損する。口縁端面は丸みをもった平坦面、無紋である。体部外面は縦方向のヘラ磨き調整で、口縁部の内面は横方向のヘラ磨き調整が施される。体部内面には粘土紐の接合痕が明瞭である。29は中型の甕で、

口径16.0cm、体部最大径16.8cm、器高24.0cmである。口縁部は緩やかに外反しながら延び、端部でさらに内傾して折り曲げたようにつまみあげられる。体部外面は3条/cmの平行叩きで、分割成形が顕著である。また、下半には煤の付着が顕著である。30は小型の甕で、口径12.8cm、体部最大径14.6cm、器高18.8cmで、口縁部は斜上外方へまっすぐ延びた後端部を内湾気味につまみあげる特異な形態である。体部は3条/cmの平行叩きの後10条/cmの刷毛調整でスリ消す。内面は丁寧なナデ仕上げである。最大径付近の上下位に煤の付着が顕著である。31は口径14.2cm、体部最大径15.3cm、器高16.4cmの小型甕である。口縁端部内面は強いヨコナデによって凹状を呈している。体部外面は2条/cmの平行叩き仕上げで、

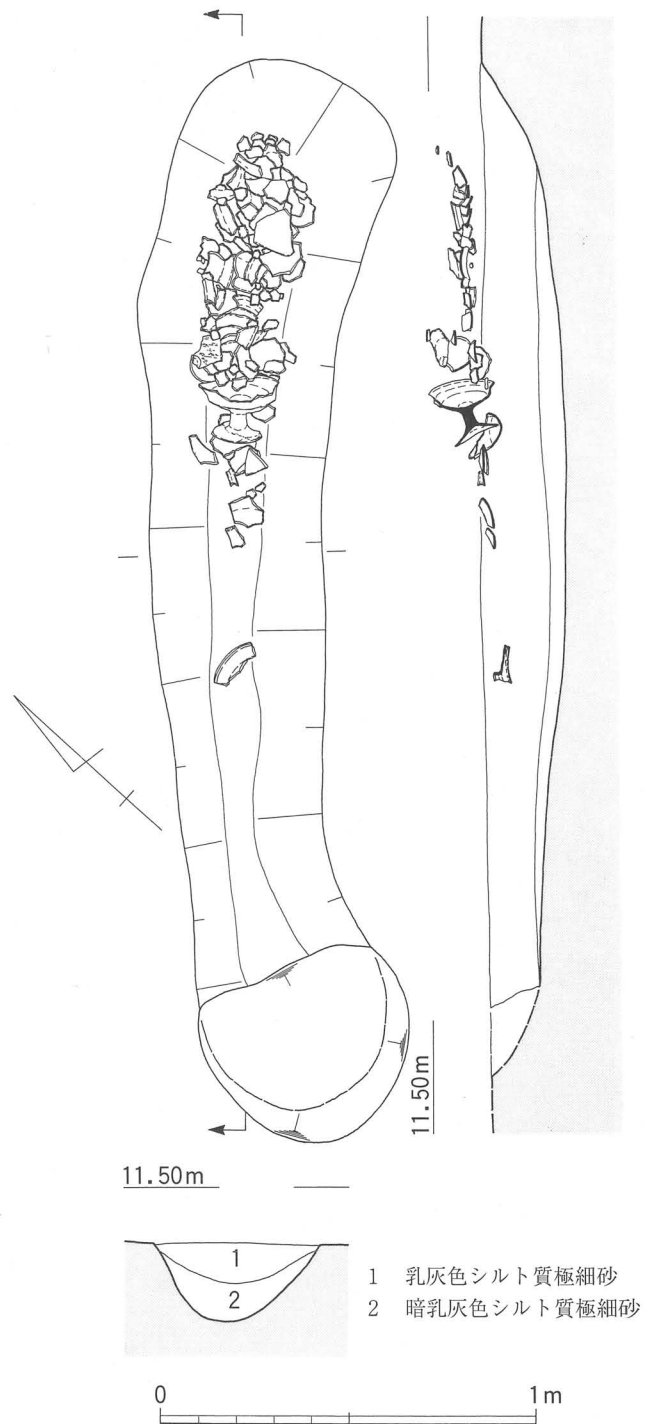


fig.25 S X 208

分割成形が顕著である。内面の調整は板ナデを主体とする。底部外面には木葉痕が認められる。32は口径15.6cm、体部最大径14.3cm、器高16.7cmの小型甕である。口縁部は斜上方へ延び、外面に端面をもつように内傾気味に上方へつまみあげられる。体部外面は3条/cmの平行叩きが施され、上半では板ナデによってスリ消されている。内面上半は4条あるいは8条の刷毛調整である。体部下半にはわずかに煤が付着している。33は口径14.6cm、体部最大径14.9cm、器高16.0cmの小型甕である。体部から緩やかに内湾しながら延び、端部を大きく上方に拡張する。口縁端面には擬凹線が3～4条巡る。体部の調整は外面が2条/cmの平行叩きで、分割成形が顕著である。内面下半は4条/cmの刷毛の後一部をナデによってスリ消す。体部外面上半に煤の付着が認められる。34は粗製の小型甕で、口径11.4cm、体部最大径11.4cmで、図上復元した器高は15.0cmとなる。外面は3条/cmの平行叩きをナデでスリ消している。内面は粘土紐の接合痕が明瞭で、ナデで仕上げる。口縁部の外面にわずかに煤が付着する。35は口径20.8cm、底径13.6cm、器高19.6cmの高坏である。坏

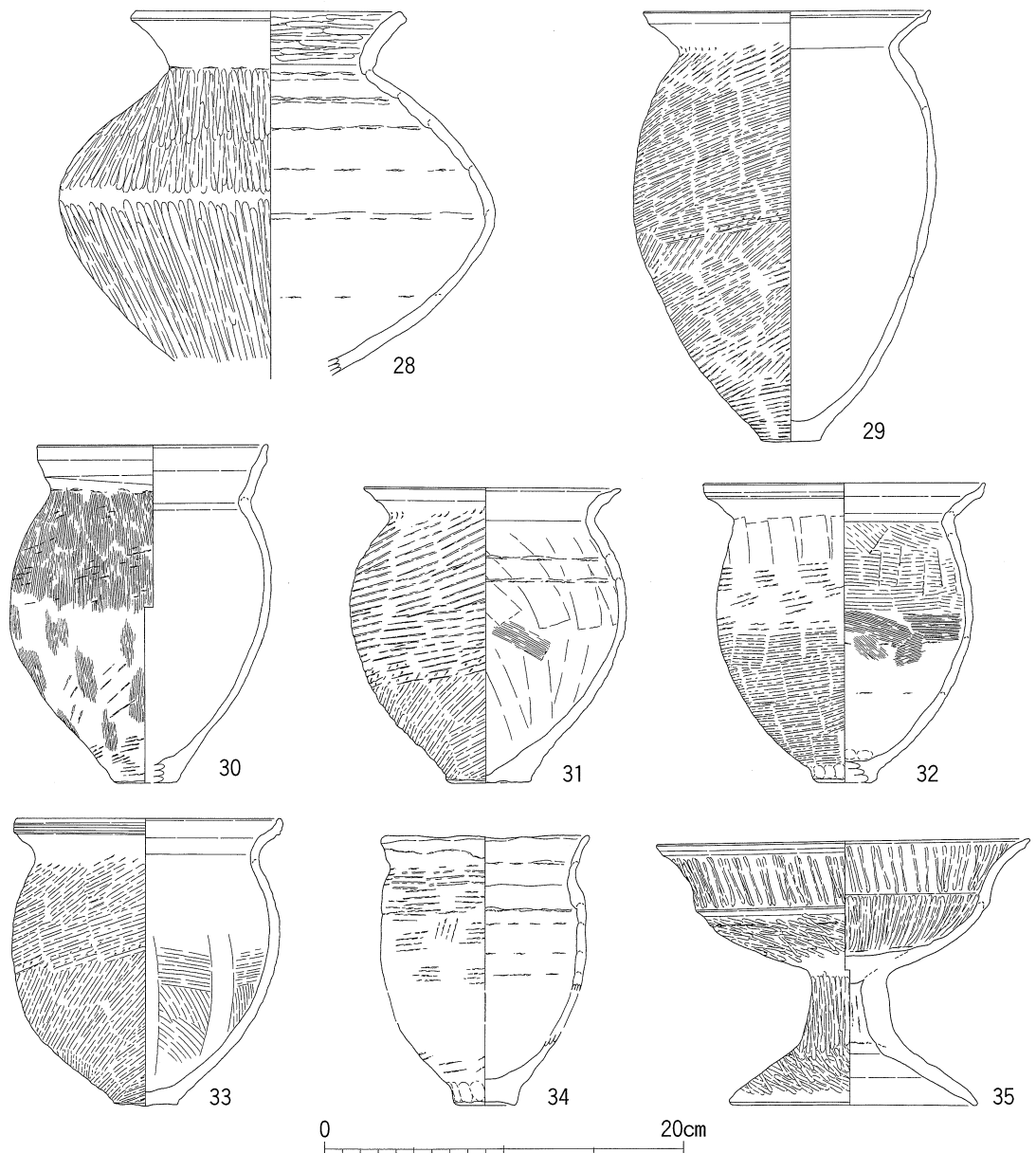


fig.26  
S X 208出  
土の土器

部の底体部は深く、やや丸みをもち、稜を有した後、内湾して立ちあがる長い口縁部をもつ。口縁端部は外方へつままれ、平坦面をもつ。脚部は肉厚で、裾部が屈曲して開くものである。調整は概して外面がヘラ磨きで、坏部内面もヘラ磨きである。坏部と脚部の接合は円盤充填による。

S X 209 南北方向に主軸をもつ溝状の落ち込みで、中央部をS X 102-Sに切られている。最大長4.12m、最大幅0.47m、南端で最大深さ0.18mで、断面は「U」字形である。埋土は3mm大前後の炭粒を多く含む暗乳灰色シルト質極細砂である。弥生土器の小片が出土している。

S X 210 やや円弧を描いて東西方向に延びる楕円形の土坑状遺構で、西端はS B 201に切られている。東西長2.88m、最大幅0.68m、最大深さ0.17mで、埋土は3～5mm大前後の炭粒を含む暗乳灰色シルト質極細砂である。弥生土器の小片が出土している。

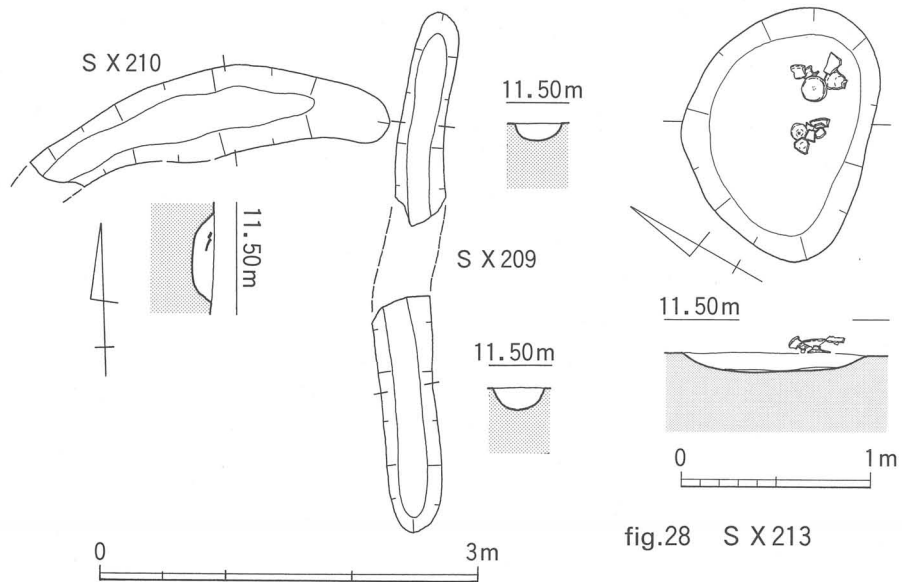


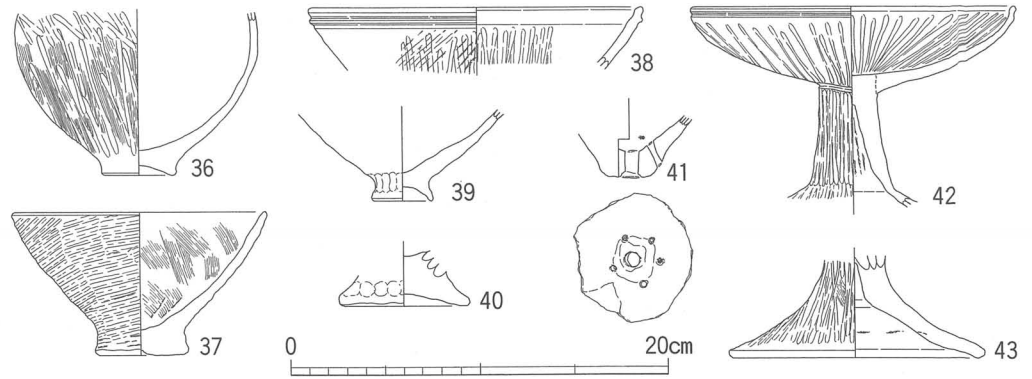
fig.27 S X 209・210

fig.28 S X 213

S X 213 長径1.35m、短径0.98m、深さ0.11mの楕円形の土坑状遺構である。完形に復元できる鉢をはじめとして、ややまとまった量の弥生土器が確認された。埋土は炭を多く含む淡乳色シルト質極細砂である。

出土遺物 36は底径4.0cm、体部最大径12.9cm、残存高8.6cmの壺の体部で、口頸部を欠く。外面は6～8条/cmの縦刷毛の後ヘラ磨き調整が施される。37は口径13.3cm、器高7.6cmの鉢で、外面は3条/cmの平行叩き、内面は8条/cmの刷毛調整である。38は口径17.3cmに復元できた鉢の口縁部で、小片を図化したため、口径はもう少し大きくなると考えられる。口縁端部は丸く収め、外面直下には2条の凹線が巡る。調整は外面が2条/cmの平行叩きの後ヘラ磨き、内面はヘラ磨きである。39・40も鉢と考えられる。41は多孔の有孔鉢の底部で、中央に直径0.7cmの円孔を置き、周囲に直径0.3cmの円孔を5方向に配している。42は皿形の坏部をもつ高坏で、脚裾部を欠く。口径17.0cm、残存高10.6cm。坏部の口縁端部外面には凹線が1条巡る。脚基部には沈線が1条巡る。調整は外面と坏部内面がヘラ磨きで、脚内面にはナデと絞り目が観察できる。43は鉢あるいは高坏の脚部と考えられる。底径13.0cmである。外面はヘラ磨き調整が施される。

fig.29 S X 213  
出土の土器



S X 212 S D 201に中央部を切られる南北方向の溝状の落ち込みで、最大長4.29m、最大幅0.73m、最大深さ0.15mで、断面は「U」字形である。埋土は3mm大前後の炭粒を含む淡乳灰色シルト質極細砂である。中央部より南よりで弥生土器がまとも出土している。

出土遺物 44は口径16.0cm、体部最大径19.0cm、残存高15.0cmの中型の甕で、口縁部は体部から緩やかに内湾しながら延び、わずかに下方に肥厚して丸く収める。体部外面は3条/cmの平行叩き、内面は左上がりのヘラ削り調整である。45は小型甕の底部で、底径4.4cmである。ナデで仕上げられる。46は基部から大きく開く底径17.8cmの高坏脚部で、坏部を欠く。脚端面は凹状に仕上げられ、直上には凹線が1条巡る。脚部のスカシは4方向の円孔である。調整は外面のヘラ磨きが顕著である。47は口径20.3cmの器台の口縁部で、端面には太い凹線が2条巡る。内面はヘラ磨き調整で、外面は摩滅している。

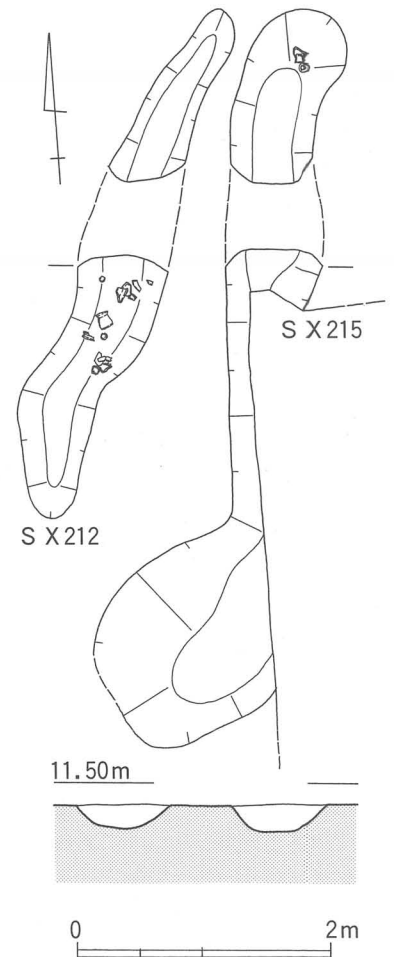


fig.30 S X 212・215

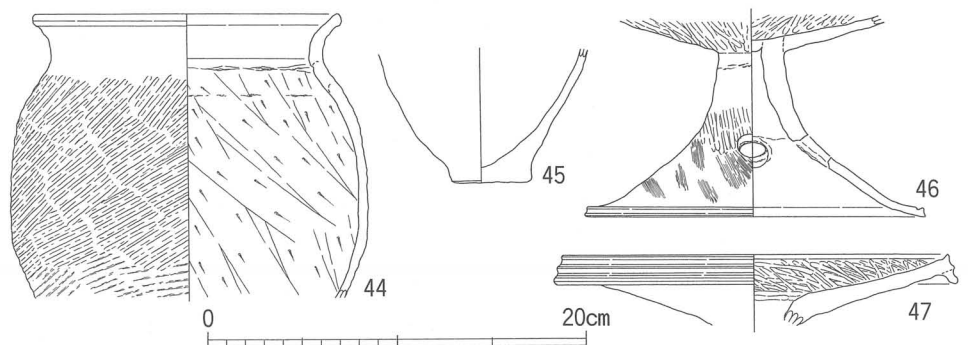


fig.31 S X 212出土の土器

S X 215 S D 201に中央やや北側を切られる南北方向の溝状の落ち込みで、南端が土坑状に拡がる。最大長6.02m、北半の最大幅0.73m、南端での最大幅1.43m、最大深さ0.26mで、断面は「U」字形である。埋土は3mm大前後の炭粒を含む淡乳灰色シルト質極細砂である。

出土遺物 48~52はいずれも北端部で出土した粗製鉢で、胎土・色調から当初同一個体かと思っていたが、調整の違いから5個体を図化した。いずれも体部が内湾しながらちあがるもので、口縁端部は概して丸く収め、口径は26~28cmで揃っている。調整は外面が刷毛あるいはヘラ磨きで、特に粘土紐の接合痕が顕著である。内面は刷毛あるいは板ナデ、ナデ調整である。53は胎土や色調からこれらの脚台かと考えられるが、底径8.8cmと小型であることから別器種の可能性がある。

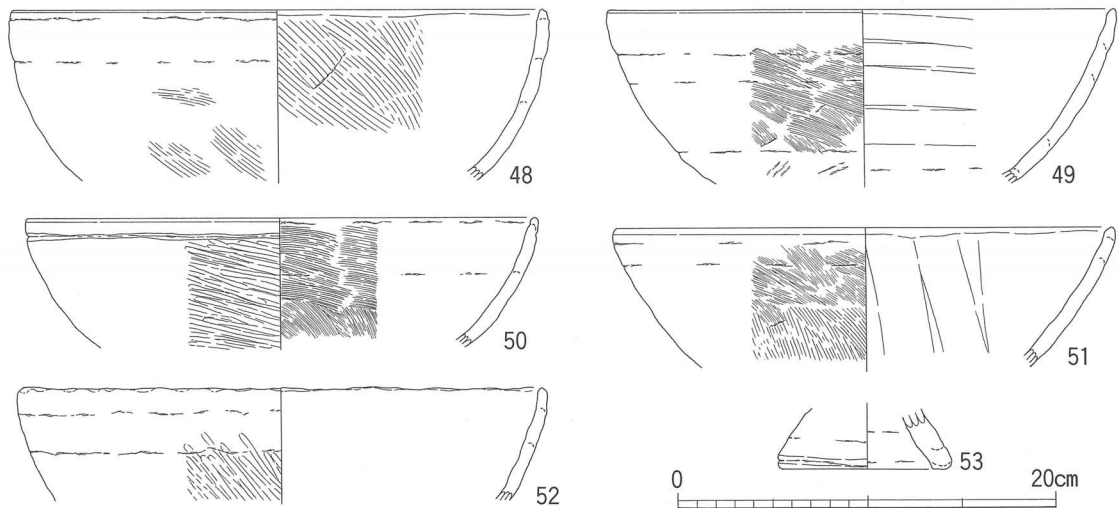


fig.32 S X 215出土の土器

(4) ピット

S P 202 S B 201の北側で確認したピットである。直径0.20m、深さ0.34mで、埋土は暗乳褐色シルト質極細砂である。

出土遺物 54・55は頸部から口縁部までの形態は不明であるが、胎土・色調から同一個体と考えられる壺の破片で、口径14.8cm。口縁端面には浅い凹線2条と「O」字形の刻み目が施され、ヘラ磨き調整が施される。頸基部には「D」字形の刻み目をもつ断面三角形突帯が1条巡り、外面と頸部内面はヘラ磨き調整で、体部内面は8条/cmの刷毛調整である。

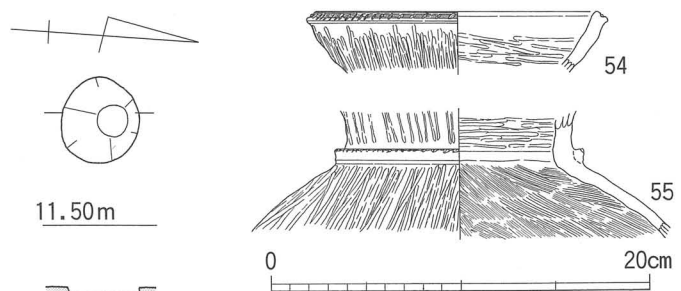


fig.34 S P 202出土の土器

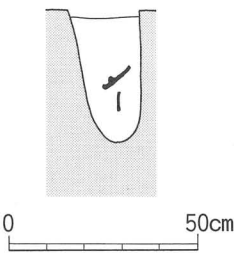


fig.33 S P 202

4. 古墳時代後期の遺構と遺物（第1遺構面）

第1遺構面は古墳時代後期後半から後期末の遺構面で、方形竪穴住居4棟、掘立柱建物2棟、柵列2条、流路1条のほか、土坑、ピットなどが確認できた。

(1) 柵列

**S A 101** 総延長8.0mで、4間分が確認できた柵列で、柱間距離は1.7~1.8mで、N74° Eを指向する。いずれの柱穴も約0.8×1.0mの規模で、平面形は隅円長方形で、深さは概して0.40~0.50mである。柱痕は掘形内でいずれも北に偏して確認され、遺存する柱痕は直径0.10~0.15m前後で、掘形に比して柱痕が小規模な点が特徴的である。掘形埋土は一様ではないが、概して上層は乳灰色系シルト質極細砂、下層は暗灰色系極細砂質シルトである。

なお、上述した試掘坑2の西壁でも柱穴が確認されていたことから、少なくとももう1間分は西へ延びていたものと考えられ、総延長で5間分約10mの柵列が存在したこととなる。竪穴住居あるいは掘立柱建物で構成される集落域の北側を画する機能をもった柵列と推定される。また、S A 101以北には遺構が稀薄なこともこれを傍証するものと考えられる。

**出土遺物** 56はP 2掘形・P 3掘形出土の須恵器坏蓋で、口径14.9cmである。稜は甘く、丸く収める口縁端部の内面はわずかに凹状を呈している。57はP 1掘形出土の須恵器坏蓋で、口径13.6cmである。口縁端部は丸く収め、内面は凹状である。58はP 2掘形出土の須恵器坏蓋で、口径11.0cm、器高4.3cmで、焼き歪みが著しい。口縁部は長く斜下方に延び、端部は尖り気味で、内面に平坦面をつくる。天井部は丸みを持って高く、外面2/3は回転ヘラ削り調整である。

59はP 4の柱痕として遺存していた柱材で、長さ43.4cm、直径6.3cmのコウヤマキ材である。柱痕の直径に比してかなりやせてしまったものと考えられ、加工痕も明確ではない。また、P 1の柱材もコウヤマキ材で、劣化が著しいため図化できていない。

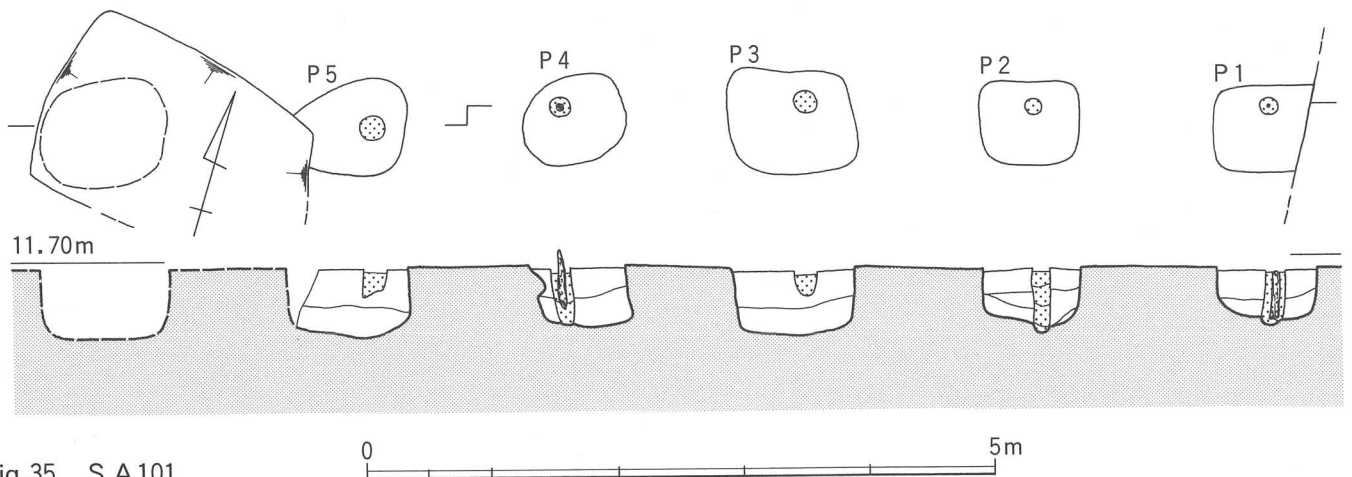


fig.35 S A 101

fig.36 S A 101出土の土器

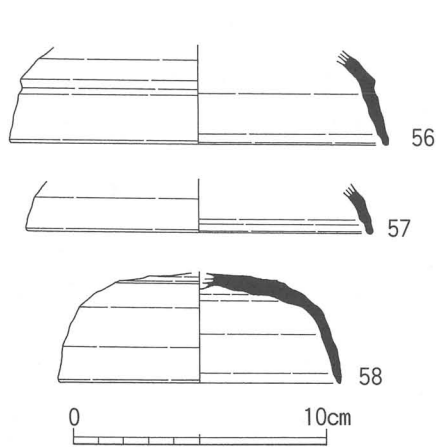
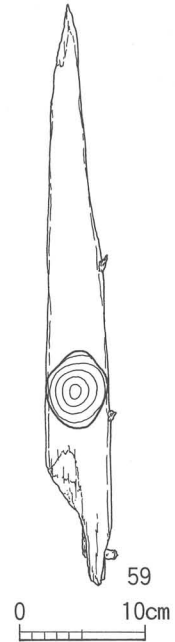


fig.37 S A 101-P 4の柱材



S A 102 (S P 130・141)

2基ともにS B 101の南周壁を切る柱穴で、柱間距離は2.2mとなり、S A 101と比較してやや柱間距離が長く、N76° Eを指向する点で若干規格が相違する。各柱穴は約0.7×0.8mの規模で、平面形が楕円形に近い隅円長方形で、深さ0.55mである。S P 141では針葉樹材の柱材が遺存しており、S P 135では柱痕は確認できていない。先のS A 101と同様に柵列を構成していたものと考えられ、集落域の南限を画していたものと推定している。

60はS P 141出土の柱材で、長さ67.8cm、直径8.4cmのコウヤマキ材である。先端部は杭状に加工が施されている。

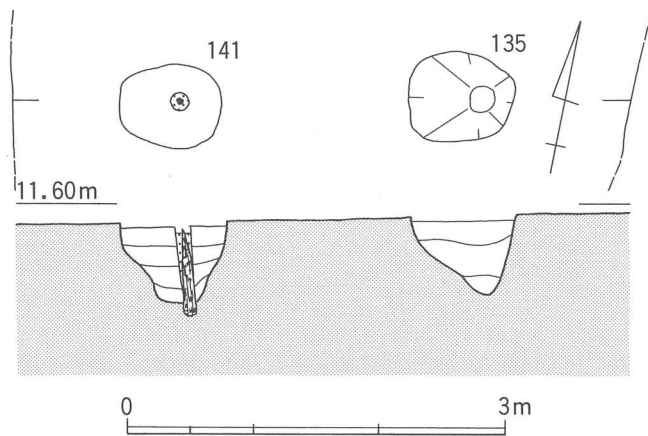


fig.38 S A 102

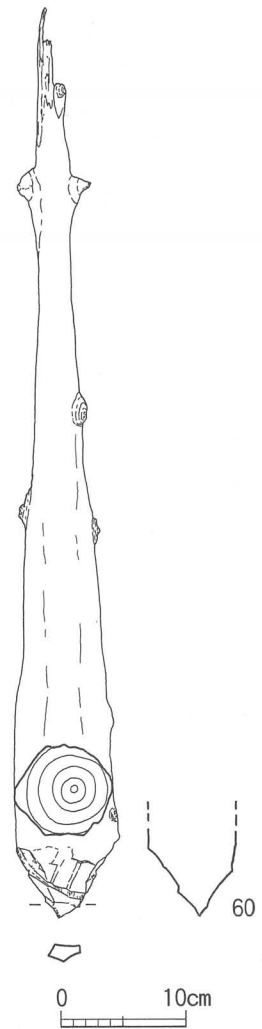


fig.39 S P 141出土の柱材



(2) 竪穴住居・掘立柱建物

S B 101 西辺が調査区外にあり、北東隅をS B 104によって切られているほか、南周壁もS A 102に切られるなどいくつかの遺構との切り合いがあるものの、ほぼ全容が窺える方形竪穴住居である。南北6.8m、東西4.8m以上で、最大壁高0.17mで、床面の標高は11.45~11.50mで、わずかに南へ向かって傾斜している。周壁溝は存在しない。主柱穴は3基確認できたが、西側のもう1基は調査区外に存在するものと考えられ、本来4本柱であったと推定される。柱穴は直径0.25mで、直径0.15m、深さ0.60~0.75mの灰色極細砂質シルトあるいは暗灰色シルトを埋土とする柱痕が確認できる。P 1-P 2の柱間距離は3.30mで、P 2-P 3の柱間距離は3.20mである。

カマド 周壁北辺の中央付近には遺存状況が良好なカマドが造り付けられる。袖部は周壁から「八」字形に住居内へ0.85m延び、袖部前面にあたる焚口基部の幅は1.10mである。また、

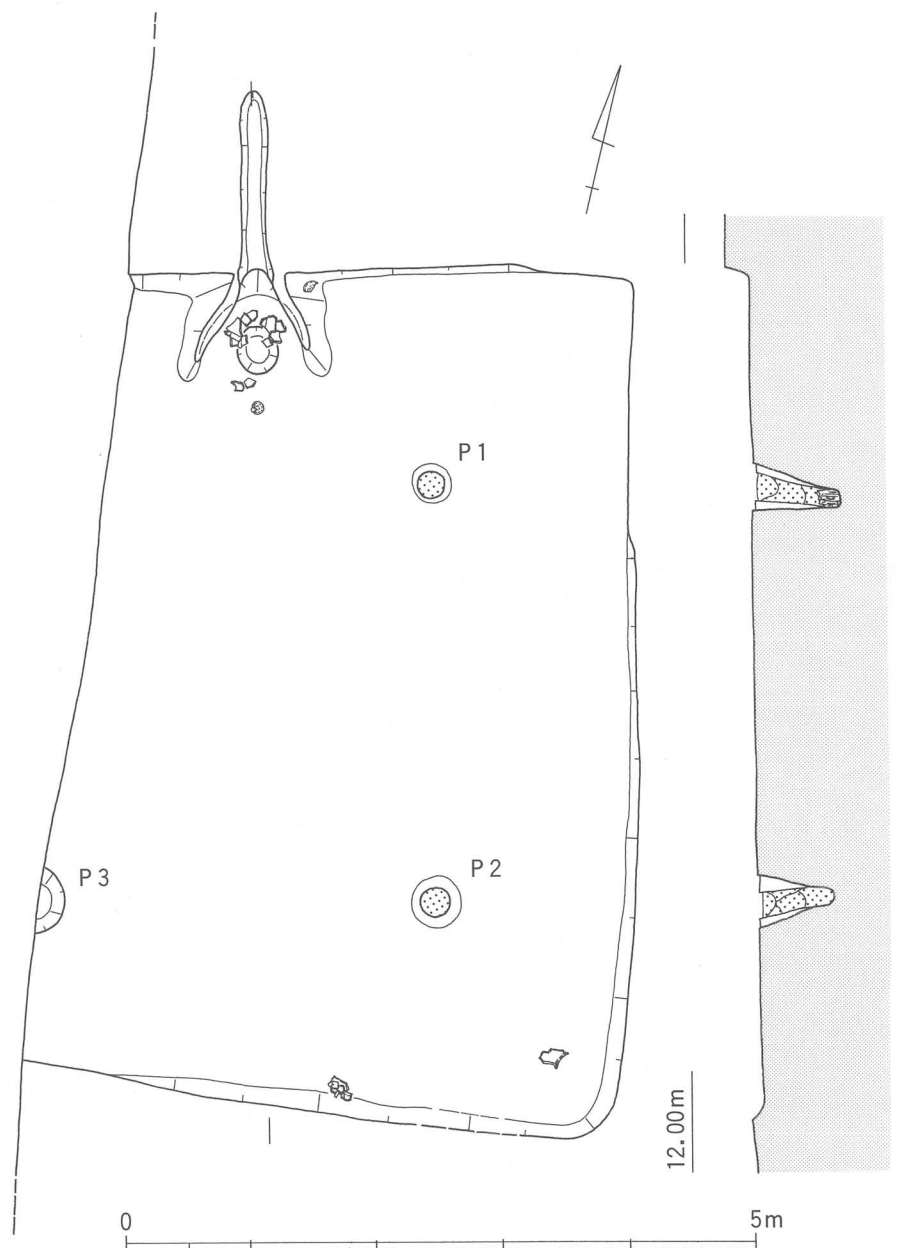
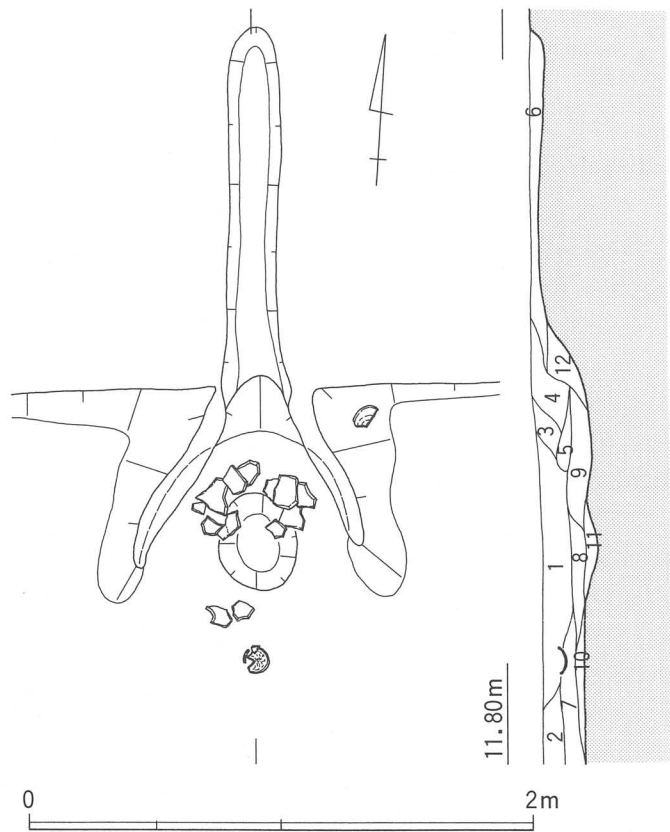


fig.40 S B 101

fig.41 S B 101 カマド

- 1 暗青灰色シルト混極細砂(炭・焦土含む)
- 2 暗乳灰色シルト混極細砂
- 3 淡青灰色シルト混極細砂(指頭大の焦土塊多く含む)
- 4 淡青灰色シルト質極細砂
- 5 焦土塊
- 6 乳黄灰色シルト混極細砂(指頭大の焼土含む)
- 7 暗乳灰色シルト質極細砂(炭混じり)
- 8 明黄白色シルト(灰層?)
- 9 暗青灰色粘土(焼土塊を含む)
- 10 黒灰色シルト(炭層)
- 11 暗褐色シルト質極細砂(焦土層)
- 12 暗褐色シルト質極細砂(焦土層)



床面での袖部の最大幅は1.27mである。燃烧部の袖の内壁は袋状を呈し、基部最大幅0.82mで、ほぼ中央には長径0.40m、短径0.29m、深さ0.04mの規模で、暗褐色シルト質極細砂の焦土の詰まったピットがある。底面から浮いた状態で土師器甕の大型の破片(65)がまとまって出土している。本来カマドに掛かっていたものであろうか。なお、燃烧部で支脚は確認できていない。袖部の構築土は図示できていないが、指頭大の焦土塊を含む淡青黄色シルト質極細砂で、基盤層と酷似する。また、カマドの前面では完形に近い土師器坏(61)も出土している。

また、周壁外へは最大幅0.20m、深さ0.05~0.07m、断面「U」字形で、埋土が指頭大の焼土塊を含む乳黄灰色シルト混極細砂からなる煙道が1.4m北へ延びる。中央より南よりの溝底が若干浅くなっており、北端が最も深くなっている。

**出土遺物** 61は土師器坏で、口径10.6cm、器高4.2cmである。底部は丸みをもった平底で、外面はナデを含む指頭圧痕で仕上げられ、内面には放射状の暗文が施される。口縁端部はわずかに外湾し、端部内面は内傾する平坦面を呈し、ヨコナデ調整である。胎土は1mm以下のチャート粒をわずかに含む程度の精良なもので、色調は淡乳色~淡乳橙色である。62は土師器小型甕の口縁部で、口径13.0cmである。体部から「く」字形に鈍く外傾して延びる口縁部で、端部には擬凹線が1条巡る。調整は体部外面が10条/cmの縦刷毛で、内面は指頭圧痕を含む板ナデあるいはナデで、口縁部内面は横方向の10条/cmの刷毛である。63は土師器中型甕の口縁部で、口径19.4cmである。口縁部は全体に肉厚で、端部は丸く収める。内面は6条/cmの横刷毛調整である。63は全容が窺える土師器甕で、口径26.2cm、体部最大径28.6cm、底径8.8cm、残存高27.9cmである。平底に近い丸底の底部から球形の体部が

続き、強く内湾して延びる口縁部をもつ。口縁端部は丸く収める。調整は体部外面が10条/cmの縦刷毛で、最上位には横刷毛を加える。口縁部外面にも縦刷毛調整が一部認められる。内面は下半が板ナデを含む乱方向のナデ、上半は水平～左上がりのナデ調整である。64は土師器甕の体部下半で、底部中央と体部上半から口縁部を欠く。最大径は24.9cmである。体部外面は6～8条/cmの縦刷毛調整で、内面は右上がりのヘラ削り調整である。65は須恵器坏蓋で、口径10.7cm、残存高3.4cmで、天井部中央は欠損する。口縁部は内湾気味に短く垂下し、天井部外面3/4が回転ヘラ切り未調整のほかは回転ナデ調整である。

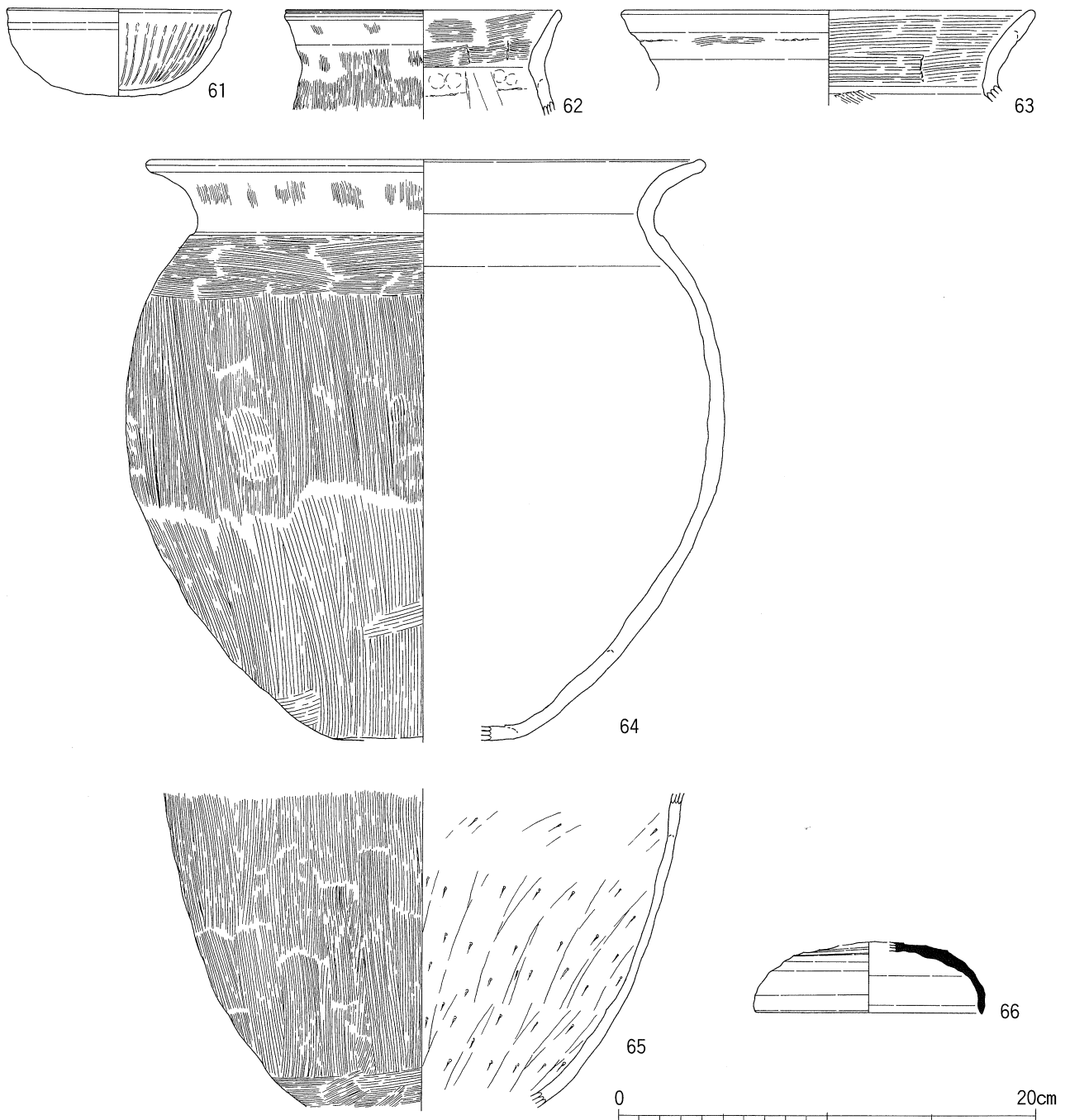


fig.42 S B 101出土の土器

S B 102 南半部をS B 103に切られており、北西辺の周壁とこれに沿った床面が確認できたにすぎない。東西5.5mの方形竪穴住居と考えられ、床面の標高は11.55m前後である。支柱穴はP 1の1基を確認できたのみで、直径0.20m、深さ0.28mの乳灰色シルト質極細砂・淡黒灰色シルトを埋土とする柱痕が確認できているものの、この他の支柱穴は確認できていない。

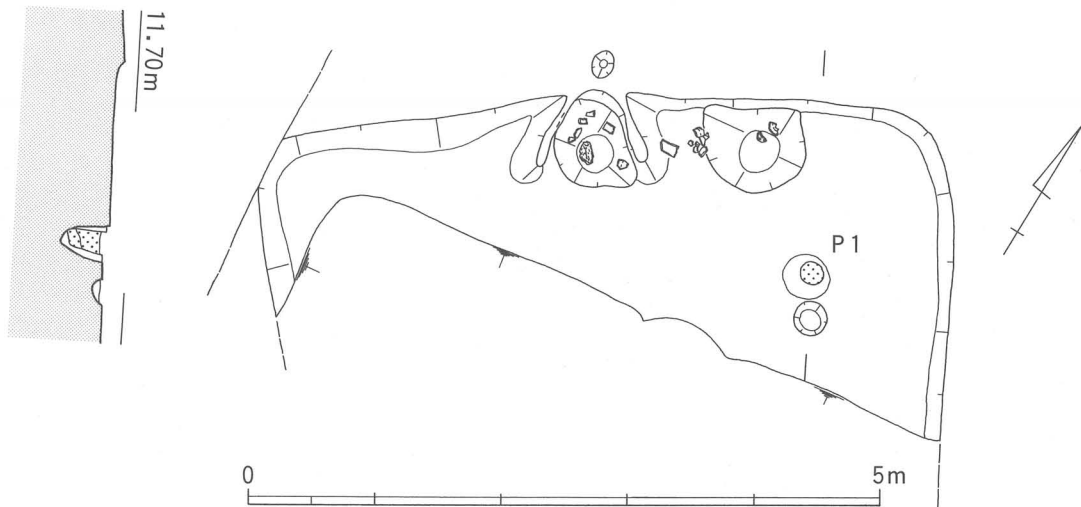


fig.43  
S B 102

カマド 北西辺の中央にはカマドが造り付けられる。遺存状態は悪く、袖部は周壁から住居内へ「ハ」字形に最大0.80m延びる。袖部前面の焚口基部の最大幅は0.88mである。床面での袖部の最大幅は1.27mである。燃焼部の袖の内壁は袋状を呈し、基部最大幅0.69mで、ほぼ中央には長径0.68m、短径0.55m、深さ0.05mの規模で、暗褐色シルト質極細砂の焦土の詰まった土坑状の落ち込みがある。なお、この落ち込みの下層にはさらに深さ0.24mの乳黄色シルト質極細砂を埋土とする土坑があるが、その性格は明らかにできない。燃焼部の底面から浮いた状態で土師器小型甕の大型の破片(68)と0.12×0.21mの粘土塊が出土

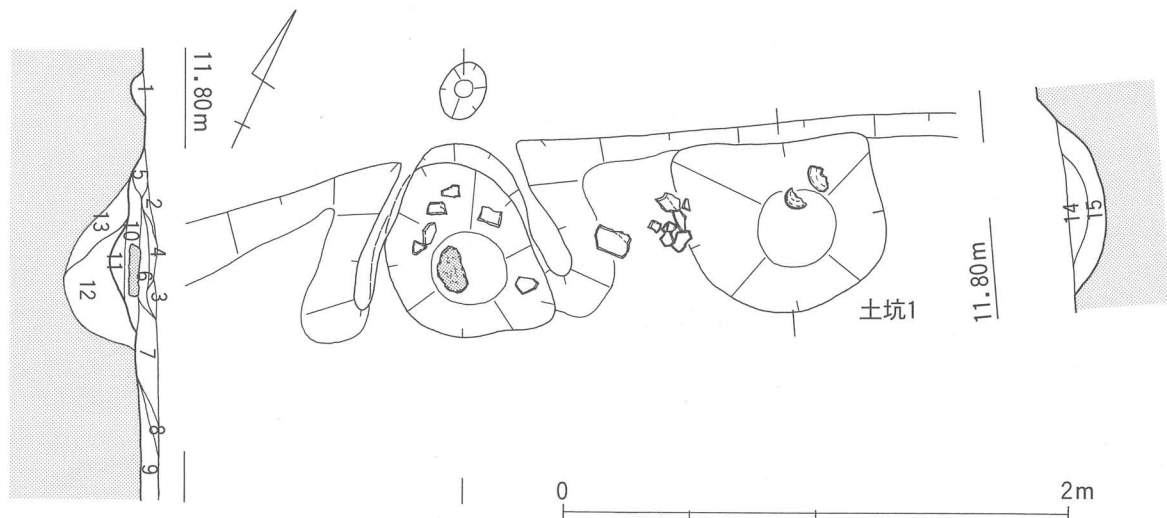


fig.44 S B 102 カマド・土坑 1

- 1 淡緑灰色シルト混極細砂(焦土含む)    2 暗青灰色シルト質極細砂    3 乳白色粘土(焼土層)
- 4 乳褐色シルト質極細砂(焼土の微粒多し)    5 暗灰色極細砂質シルト    6 明黄色粘土(天井部?)
- 7 暗青灰色シルト質極細砂    8 暗灰色シルト粘土(灰層?)    9 暗乳灰色シルト質極細砂
- 10 暗褐色極細砂(焦土層)    11 暗褐色シルト質極細砂(焦土層)    12 淡乳黄色シルト質極細砂
- 13 暗乳色シルト質極細砂    14 暗乳灰色極細砂質シルト(10mm大の炭・焼土を含む)
- 15 淡乳灰色シルト質極細砂(炭の微粒を含む)

している。本来カマドに掛かっていた土器と掛口を構成していたものであろうか。なお、燃焼部で支脚は確認できていない。袖部の構築土は図示できていないが、指頭大の焦土塊を含む暗灰黄色シルト質極細砂で、基盤層と酷似する。

また、煙出の一部と考えられ、埋土が淡緑灰色シルト混極細砂である直径0.20m、深さ0.06mのピットが周壁外で確認できている。

**土坑1** また、カマドの東側で周壁に取り付くようにして、長径0.82m、短径0.68m、深さ0.20mの不整円形の土坑1基が確認できた。埋土は2層に分けられ、坑底より浮いた状態で須恵器坏蓋(72)と高坏坏部(73)が出土している。

**出土遺物** 67は体部から緩やかに外反する土師器甕の口縁部で、口径22.1cm。口縁部中位が肉厚で、端部は外方へつまみ出され、端面は凹状である。体部外面は10条/cmの刷毛調整、口縁部内面は横方向の8条/cmの刷毛調整。口縁部内面には「×」のヘラ記号がある。68は土師器小型甕で、口径13.4cm、体部最大径14.1cm、器高12.3cm。やや下膨れの半球形の体部と外形してたちあがる口縁部をもつ。口縁端部は外方へ拡張し、水平な端面をもつ。調整は体部外面が10条/cmの刷毛、内面の下半はナデ、上半は粗いヘラ削り、口縁部内面は10条/cmの横刷毛調整である。外面には2次焼成が顕著に認められる。69はカマドと土坑1の間の床面で出土した粗製の甕で、口径13.2cm、体部最大径17.2cm、器高15.4cmに図上復元したものである。口縁部をヨコナデ調整するほかは概してナデ調整。70は土師器碗で、口径13.9cm、残存高5.4cm。外面は2次焼成のため、摩滅が顕著である。内面は中位に板ナデが施される。71は片口をもつ口径19.2cmの鉢。口縁部はわずかに内湾しながら延び、端部でさらに小さく外反して丸く収め、内面には平坦面をもつ。外面は6条/cmの刷毛調整。

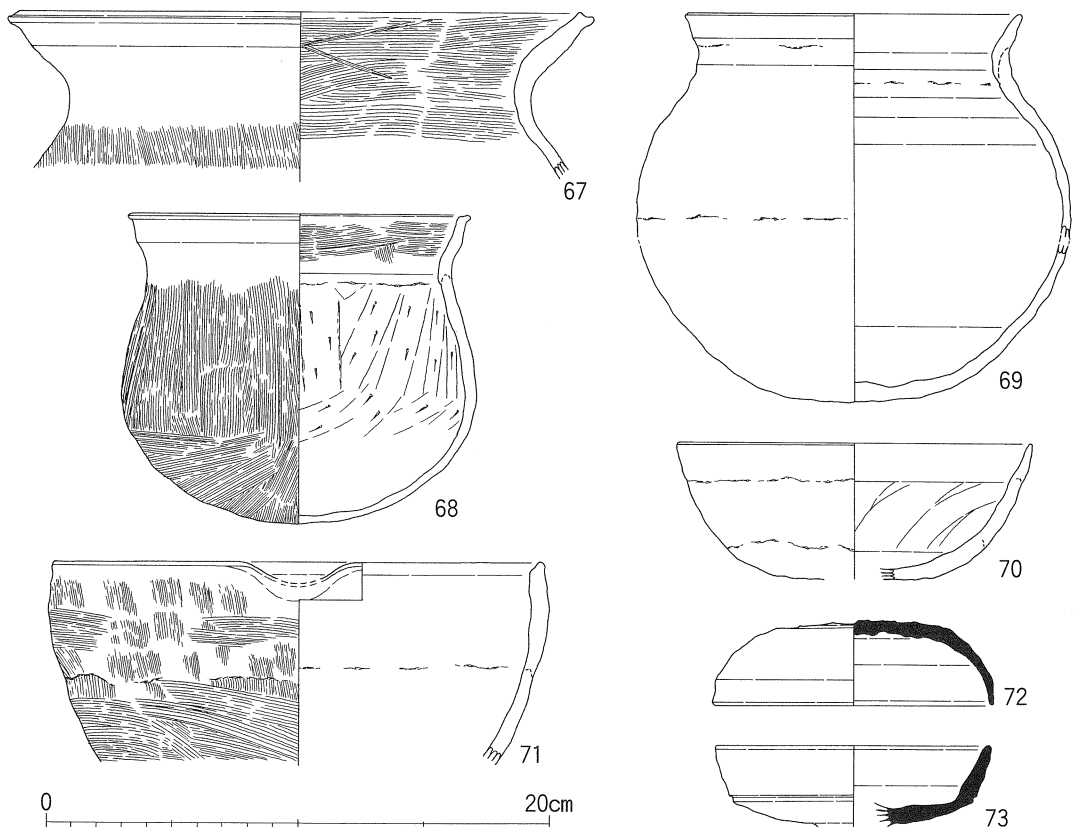


fig.45  
S B 102出土  
の土器

72は須恵器坏蓋で、口径11.0cm、器高3.4cm。口縁部は短く下垂し、端部は丸く収める。天井部外面1/2は回転ヘラ切り未調整で、この他は回転ナデ調整。73は無蓋高坏の坏部で、脚部は欠損する。口径10.8cm、残存高3.4cmで、口縁部は肉厚で、坏底部との境に鈍い沈線を巡らせる。黒緑色の自然釉を厚くかぶる。

**S B103** 南東隅をS B104に、西周壁をピットに切られ、S X102・103を切る、やや菱形に歪んだ平面形をもつ方形の竪穴住居で、東西5.85m、南北5.85m、最大壁高0.19mで、床面の標高は11.45m前後である。床面では支柱穴が4基確認でき、いずれも直径0.30~0.58mの掘形に0.15~0.20mの柱痕が確認できる。柱間距離はP1-P2間が3.34m、P2-P3間が3.32m、P3-P4間が3.22m、P1-P4間が2.82mと一定ではない。周壁溝は存在しない。

**カマド** 北辺中央からやや東に偏してカマドを造り付ける。比較的遺存状態は良好で、袖部は西側が長く、周壁から0.98m延びる。袖部前面にあたる焚口基部の幅は1.22mである。また、床面での袖部の最大幅は1.57mである。燃烧部の袖の内壁は袋状を呈し、基部最大幅0.77

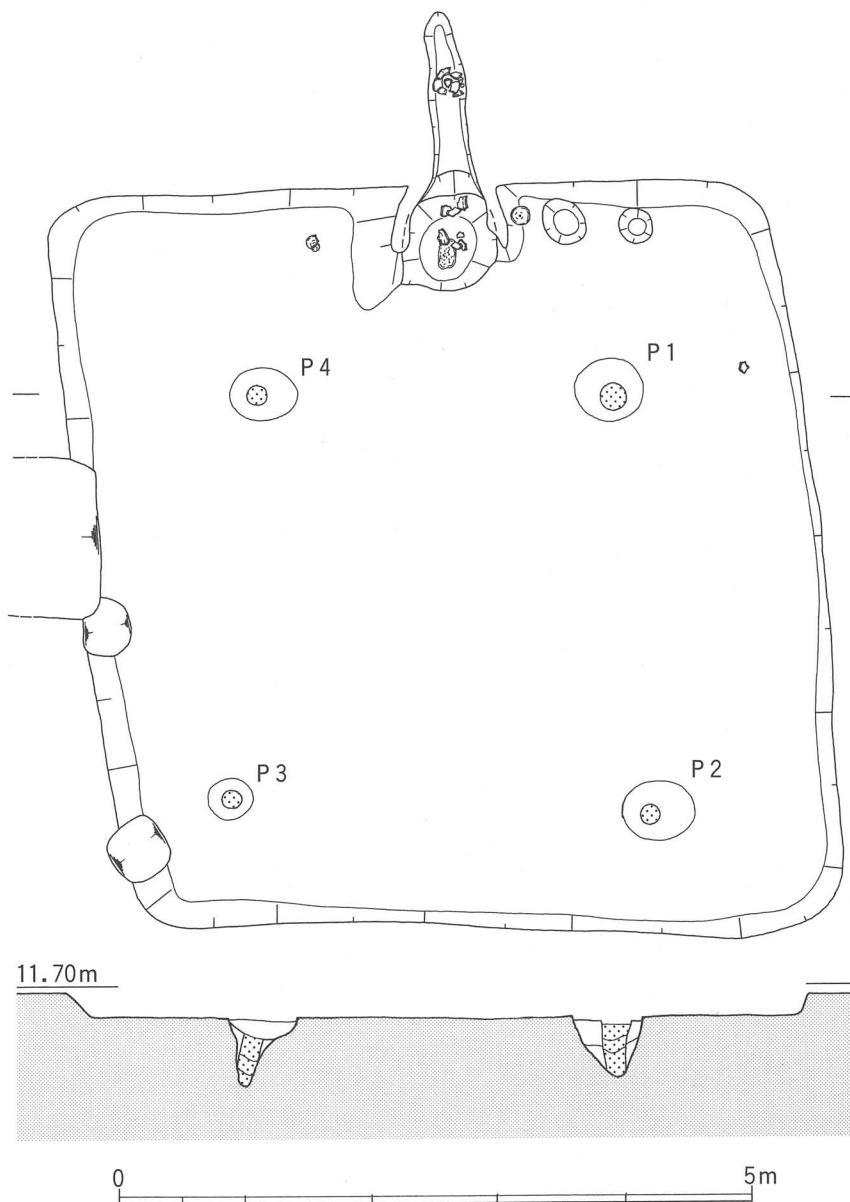


fig.46 S B103

mである。また、燃焼部の床面は深さ0.08mでくぼんでおり、暗褐色シルト質極細砂の焦土が堆積している。底面から浮いた状態で0.15×0.30mの粘土塊と土師器小型甕の破片(74)がまとまって出土している。カマドの天井を構成した粘土と本来カマドに掛かっていた土器であろう。なお、燃焼部で支脚は確認できていない。袖部の構築土は図示できていないが、指頭大の焦土塊を含む淡灰黄色シルト質極細砂で、基盤層と酷似する。

周壁外へは最大幅0.25mの煙道が北へ1.35m延びる。埋土は暗褐色シルト混極細砂である。底面はほぼ水平で、中央付近の溝底から0.10m浮いて甕の体部片(75)が出土している。

カマドの東側には直径0.25~0.33mのピットが2基確認され、焼土・焦土の塊を多く含む灰層と考えられるシルトを埋土とするため、灰ピットと呼んでいる。

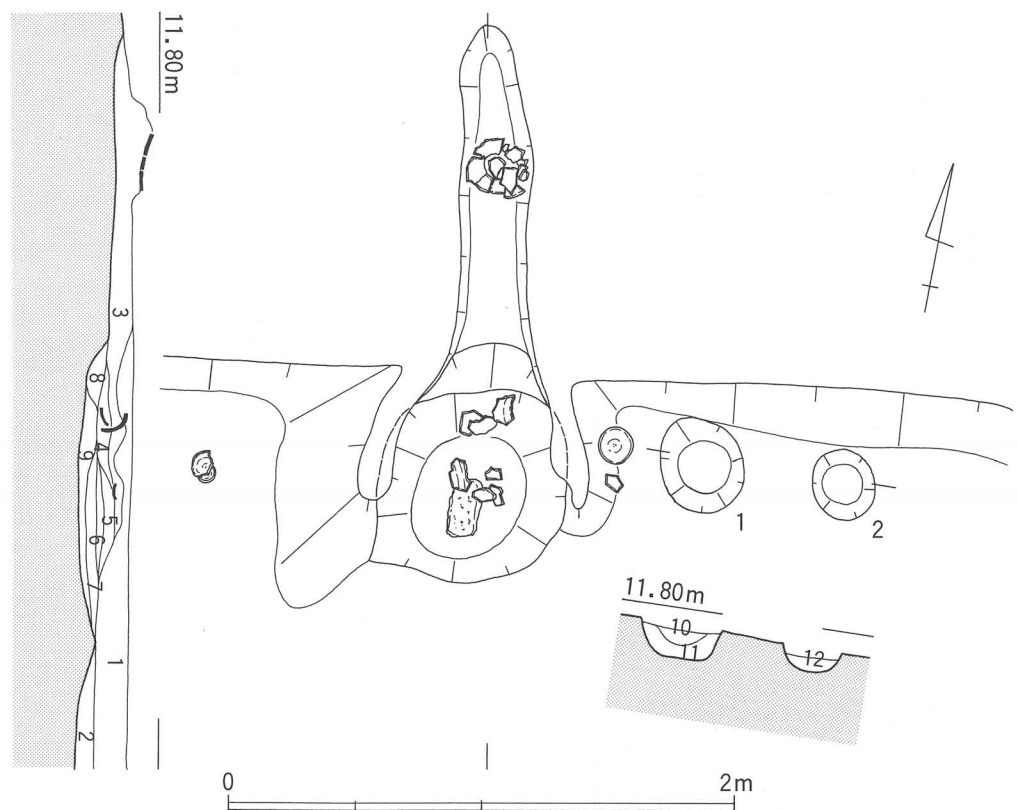


fig.47 S B 103 カマド・灰ピット

- 1 淡乳灰色シルト混極細砂(5mm前後の炭・指頭大の焼土塊含む)
- 2 乳黄色シルト質極細砂(黄色粘土塊・炭を多く含む)
- 3 暗褐色シルト混極細砂
- 4 暗褐色シルト(焼土塊多し)
- 5 明黄色極細砂(天井?)
- 6 灰色粘土(灰層?)
- 7 明黄色粘土(堅緻)
- 8 暗灰色極細砂質シルト
- 9 暗褐色シルト質極細砂(焦土層)
- 10 明乳色極細砂(焦土・焼土塊含む)
- 11 明乳色シルト質極細砂
- 12 淡乳灰色シルト混極細砂

**出土遺物** 74は土師器小型甕で、口径14.4cm、体部最大径16.0cm、器高14.3cmで、薄手の口縁部は体部から外傾して斜上方に延び、端部は丸く収める。体部外面と口縁部内面は8条/cmの刷毛調整である。75は口縁部と底部を欠く土師器甕の体部で、最大径25.8cm、残存高21.9cmである。外面は8条/cmの刷毛調整で、内面は一部に布目圧痕が残るほかはナデを主体とする。76は底部を欠く土師器の鉢で、製塩土器と考えられる。口径12.2cmで、ナデおよ

び指頭圧痕で仕上げられる。2次焼成が著しい。77は土師器高坏の坏部で、口径16.8cm、残存高4.5cmである。浅い坏部は外面に稜をもち、口縁部は長く内反してたちあがり、端部を丸く収める。内面は放射状のやや粗いヘラ磨き調整である。78は須恵器坏身で、口径10.2cm、受部径12.0cm、器高3.3cm、たちあがり高0.4cmである。底体部外面は回転ヘラ切り後ナデ仕上げである。内面には乳白色～暗褐色の自然釉をかぶる。79は須恵器無蓋高坏で、口径10.9cm、底径6.7cm、器高6.5cmである。短脚に坏蓋を返して接合した形態を採るものである。

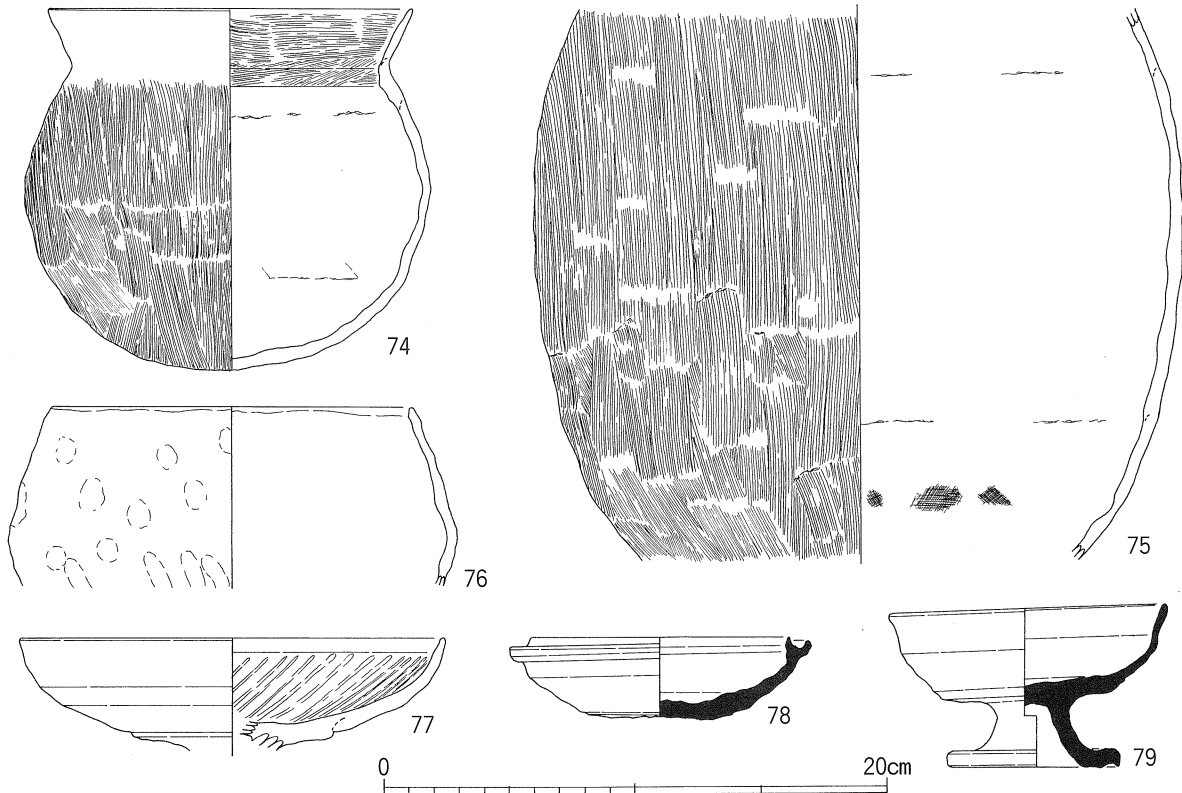


fig.48 S B103出土の土器

**S B104** 第1遺構面で確認できた竪穴住居のうち、切り合い関係から最も新しいと判断できる。やや歪な方形の竪穴住居で、東西4.55m、南北4.36mで、壁高は最大0.10mである。床面の標高は11.50mである。支柱穴は周壁に対して整然とは配置されていないが、直径0.40mの掘形に直径0.15m前後の柱痕が確認できる4本柱で構成される。柱間距離はP1-P2間が2.20m、P2-P3間が2.57m、P3-P4間が3.30m、P1-P4間が2.40mと一定ではない。周壁溝は存在しない。

**カマド** 北辺の中央やや東に偏してカマドを造り付ける。カマドはやや遺存状況が悪く、袖部は短く、周壁から住居内へ0.47m延びる。袖部前面の最大幅は0.74mで、焚口まで袖部が遺存していないものと考えられる。両袖部間の暗褐色シルト質極細砂の焦土の詰まった直径0.75m、深さ0.05mの土坑状の落ちが燃焼部に相当するものと考えられ、前面で土師器甕の破片(83)がまとまって出土している付近が焚口であったと考えられる。

周壁外へは最大幅0.30mの煙道が北へ0.75m延び、北端部の溝底に接して土師器甕底部(82)が据えられている。煙を引くためか、溝底は徐々に北へ高くなっている。



また、床面の中央やや南寄りには炭と焦土を多く含む平面形が隅円方形の浅い土坑（P5）もある。

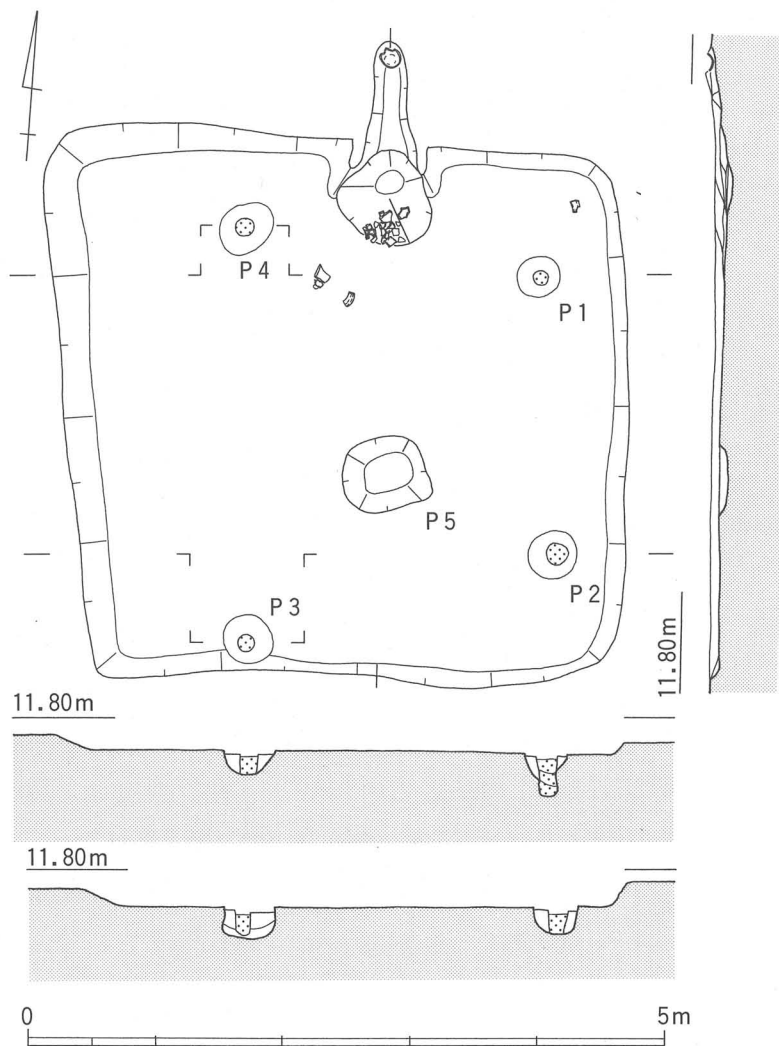
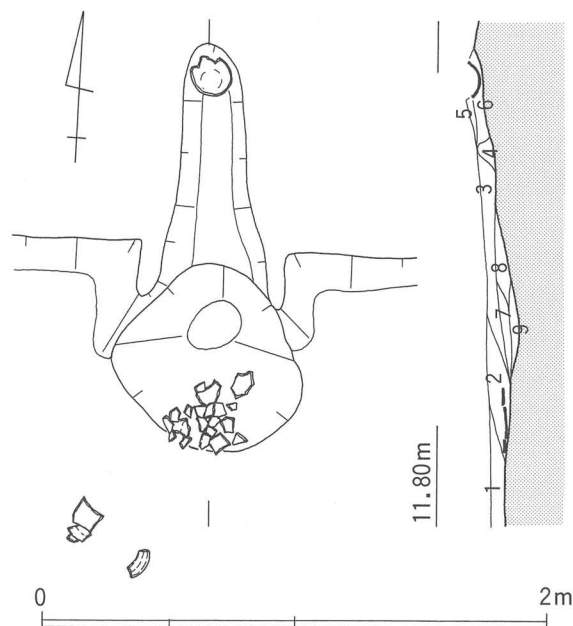


fig.49 S B104

fig.50 S B104 カマド

- 1 淡黄色シルト混極細砂(5mm前後の炭・焼土塊含む)
- 2 暗乳灰色シルト混極細砂(10mm大の炭含む)
- 3 暗褐色灰色シルト質極細砂
- 4 乳黄灰色シルト質極細砂
- 5 乳白色シルト質極細砂
- 6 淡黒褐色極細砂(焦土層?)
- 7 乳白色極細砂混粘土(灰層?)
- 8 暗灰色シルト(炭・焦土の微粒含む)
- 9 暗褐色シルト質極細砂(焦土層)



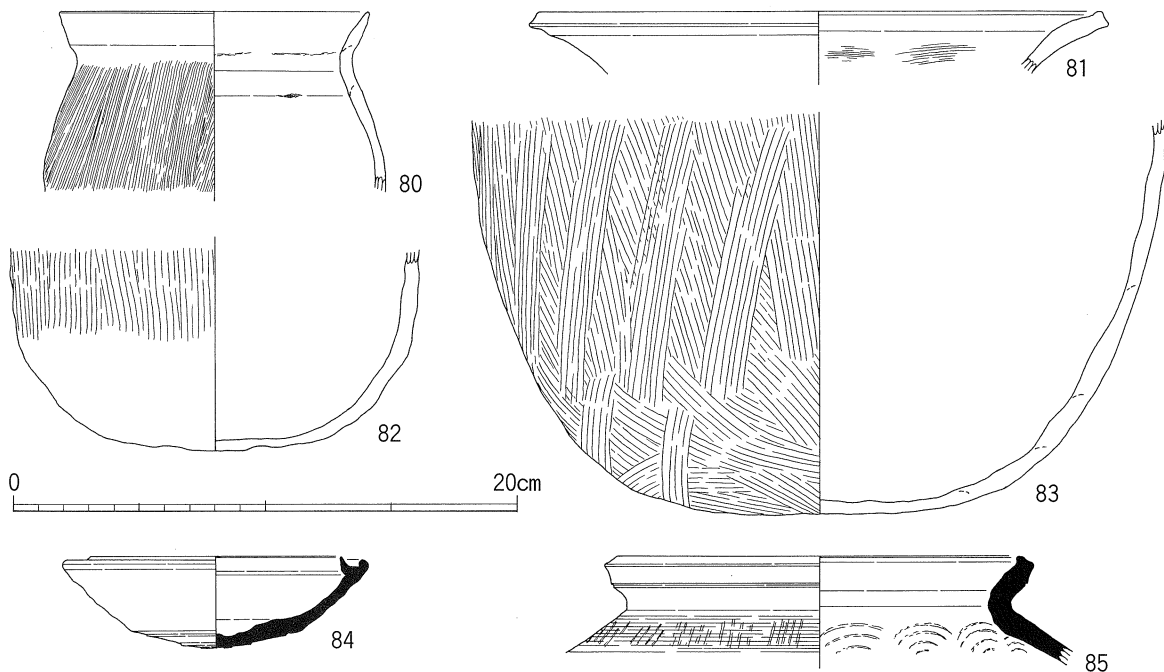


fig.51 S B 104出土の土器

**出土遺物** 80は土師器小型甕の上半部で、口径12.2cmである。口縁端部を上方へ小さくつまみあげる。外面は8条/cmの刷毛調整である。81は土師器甕の口縁部片で、口径22.2cmに復元できる。口縁端部はわずかに上下に拡張され、鈍い凹状の端面をもつ。82は煙道で確認された土師器小型甕の体部下半で、最大径16.2cm、残存高8.0cmである。外面は3条/cmの刷毛調整、内面は右上がりのナデ調整である。83はカマド焚口付近で確認された土師器甕の体部下半で、最大径17.4cm、残存高15.7cmである。外面には3条/cmの刷毛調整が施され、煤の付着が顕著である。内面には右上がりのナデ調整が施される。

84は口径9.9cm、受部径12.1cm、器高3.6cm、たちあがり高0.4cmの須恵器坏身である。底部外面1/3は回転ヘラ切り未調整である。85は口径15.6cmの須恵器小型甕の口縁部である。体部から短く内湾してたちあがり、沈線1条の後さらに内傾して延び、内上方へつまみあげられる。体部外面は3条/cmの平行叩きの後カキ目調整が施され、内面は円弧状叩きのアテ具痕が顕著である。

**S B 105** 南北1間(1.8m)×東西3間(5.2m)の東西方向を桁行とする掘立柱建物で、S R 101の北肩部を切る。柱穴掘形の規模は0.6~0.8×0.8~0.9mで、深さは0.30~0.52mで、平面形が隅円長方形のもので、柱間距離は1.6~1.8mである。柱材はいずれも抜き取られたためか、確認できなかった。埋土は概して上層が乳灰色シルト質極細砂で、下層は暗灰色シルト質極細砂である。桁行方位はN72° Eで、S A 101とはやや異なる方位を指向している。

86は土師器甕の口縁部で、口径21.2cmである。外面は4条/cmの縦刷毛調整、内面は一部に横刷毛が施されるが、概してヨコナデ調整である。

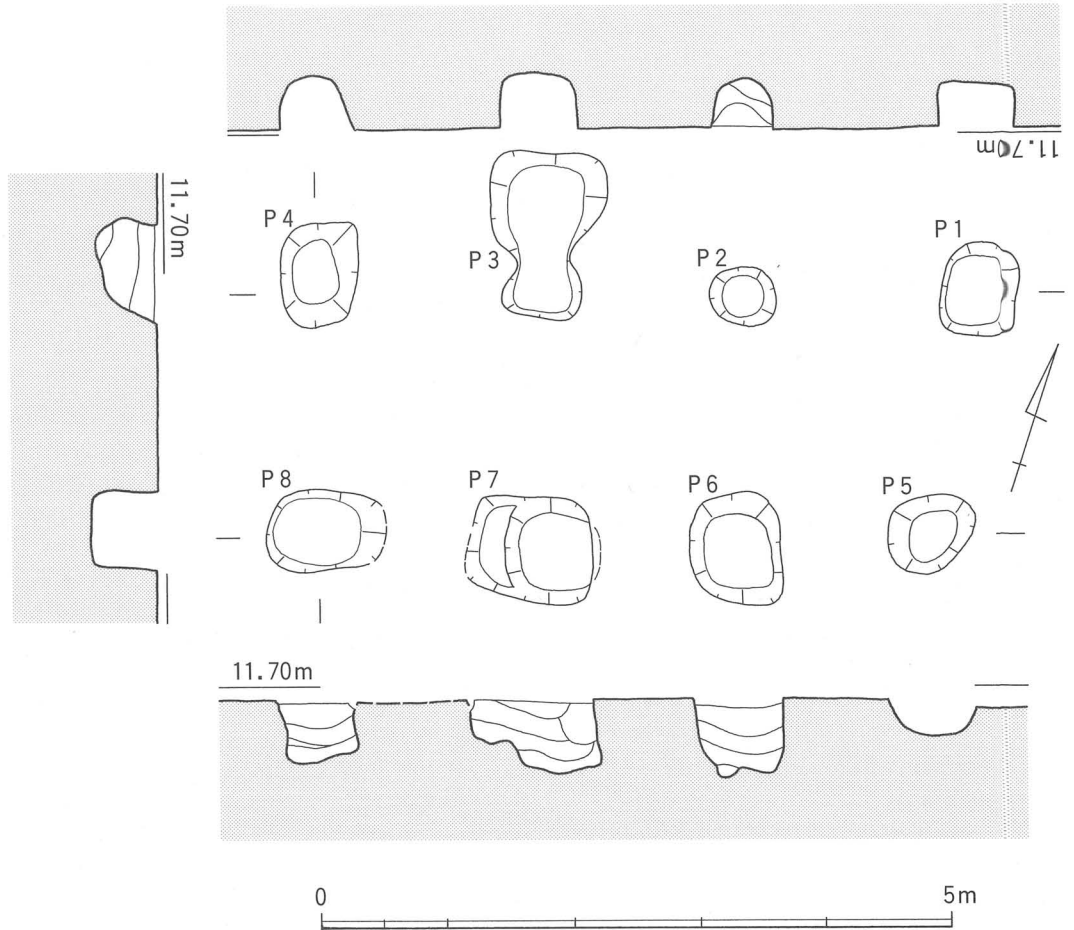


fig.52  
S B 105

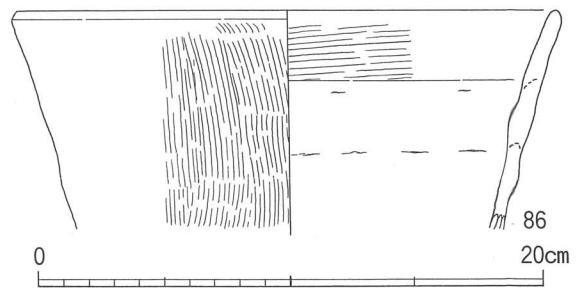


fig.53 S B 105-P 7 出土の土器

S B 106 S B 105と同様に、S R 101の北肩部を切る南北1間 (1.75m) ×東西1間 (1.50m) の掘立柱建物で、さらに西側の調査区外へ延びるものと想定される。いずれの柱穴も掘形は0.54~0.65×0.74~0.88mの平面形が隅円方形のもので、深さは0.55m前後である。

P 4では直径0.15mの柱材 (87) が確認でき、P 1・3では埋土が灰色シルト質極細砂の直径0.20mの柱痕が確認できた。桁行方位はS B 105よりも東へわずかに振るN 74° Eで、S A 101は同一方位を指向している。

87はP 4の掘形から出土した須恵器坏身で、口径10.8cm、受部径13.4cm、残存高2.1cm、たちあがり高0.7cmである。

88はP 4出土の柱材で、長さ67.4cm、直径11.8cmのコウヤマキ材で、基部付近には面取りが施される。

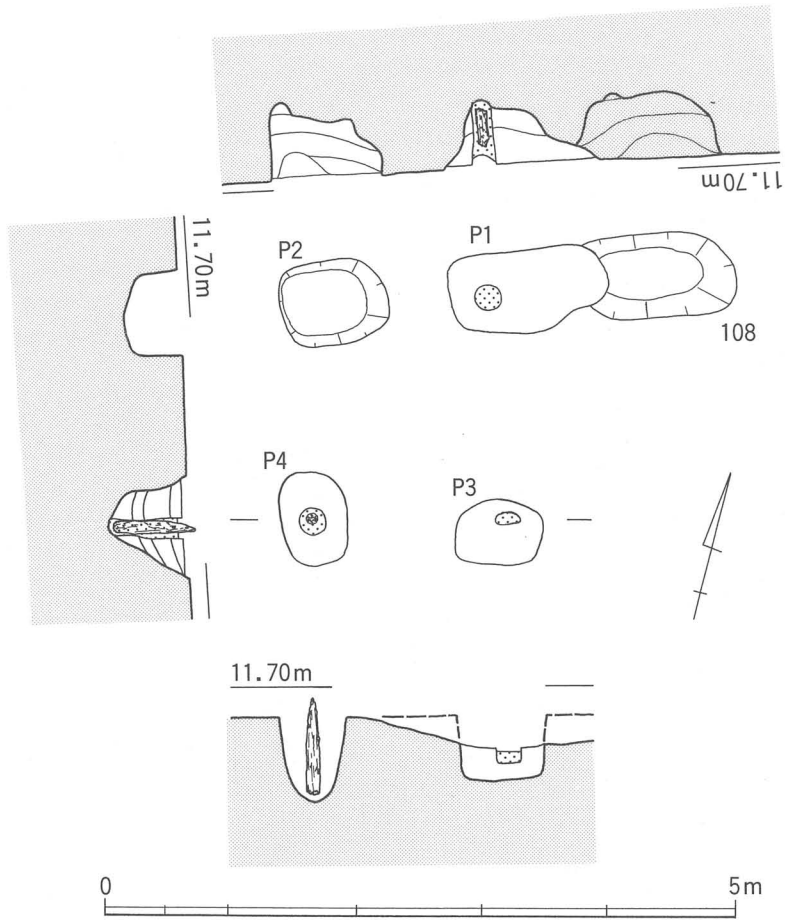


fig.54 S B 106

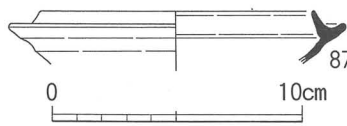


fig.55 S B 106-P 4 出土の土器

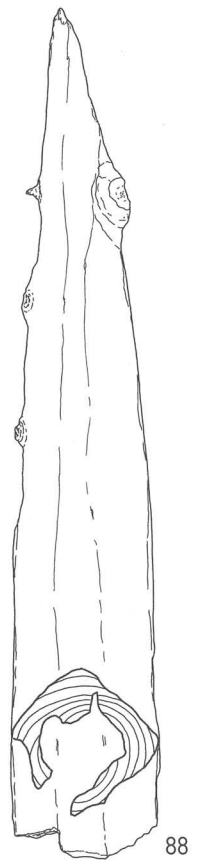
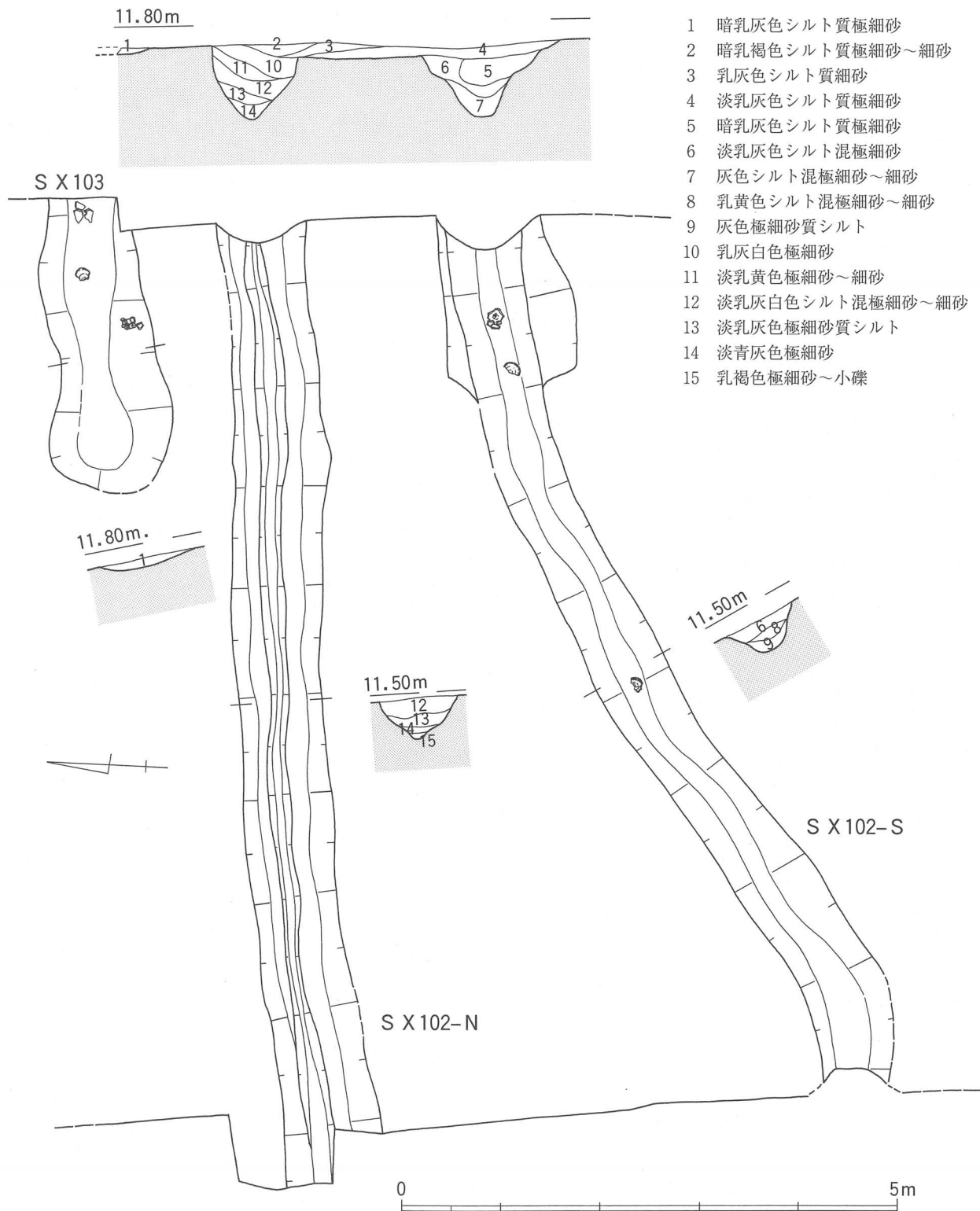


fig.56 S B 106-P 4 出土の柱材

(3) 溝

S X 102-N S B 103に切られた東西方向に走る溝状遺構である。最大幅1.00m、最大深さ0.76mで、断面形はV字形である。埋土は最下層にラミナの顕著な極細砂～小礫が堆積するが、これより上層は淡乳灰色シルト質極細砂あるいは乳灰色シルト混じり極細砂で構成される。出土遺物には弥生土器・土師器の小片があるが、出土量は概して少ない。



- 1 暗乳灰色シルト質極細砂
- 2 暗乳褐色シルト質極細砂～細砂
- 3 乳灰色シルト質細砂
- 4 淡乳灰色シルト質極細砂
- 5 暗乳灰色シルト質極細砂
- 6 淡乳灰色シルト混極細砂
- 7 灰色シルト混極細砂～細砂
- 8 乳黄色シルト混極細砂～細砂
- 9 灰色極細砂質シルト
- 10 乳灰白色極細砂
- 11 淡乳黄色極細砂～細砂
- 12 淡乳灰白色シルト混極細砂～細砂
- 13 淡乳灰色極細砂質シルト
- 14 淡青灰色極細砂
- 15 乳褐色極細砂～小礫

fig.57 S X 102-S・S X 102-N・S X 103

S X 102-S S B 101・104に切られ、北東から南西方向へ走る溝状遺構である。最大幅1.1m、最大深さ0.62mで、断面形はU字形である。埋土は下半層が灰色極細砂質シルトで、上半層は淡乳灰色シルト質極細砂である。出土遺物には完形の土師器甕・須恵器蓋坏などがある。

**出土遺物** 89は土師器甕で、口径17.5cm、体部最大径23.6cm、器高27.3cmで、下膨れのやや長胴の球形の体部と緩やかに外反する口縁部をもち、端部は丸く収める。体部外面は8条/cmの縦刷毛調整で、内面下半は単位の不明瞭なヘラ削り調整で、上半は粘土紐接合痕が顕著なナデ調整である。体部外面の中位に煤が付着する。90は口径20.0cm、体部最大径21.9cm、器高37.0cmで、砲弾形の長胴の体部と強く外反して、端部がわずかに内湾して丸く終わる土師器甕である。体部外面は6条/cmの縦刷毛調整で、内面はナデ仕上げである。体部外面下半には煤の付着が認められる。91は須恵器坏蓋で、口径15.6cm、器高5.4cm。口縁部は斜下方へ内湾気味に延び、端部は丸く、内面は鋭い段をもつ。稜はやや甘く、沈線を伴

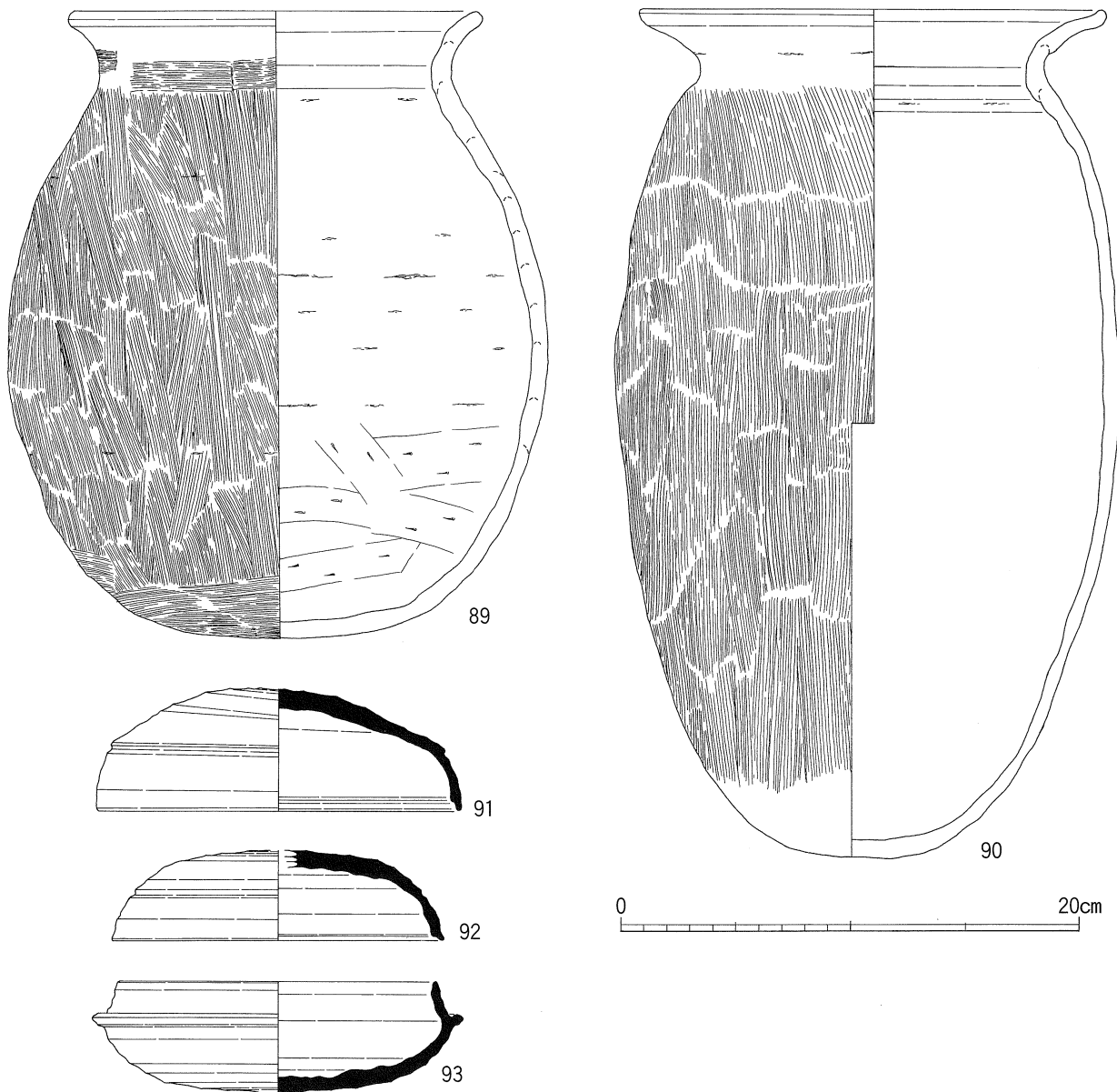


fig.58 S X 102-S 出土の土器

う。天井部は高く、やや丸みをもつ。天井部外面2/3に回転ヘラ削り調整を施すほかは回転ナデ調整である。天井部外面には淡乳灰白色の自然釉をかぶる。92も須恵器坏蓋で、口径14.4cm、残存高3.5cmで、天井部を一部欠く。口縁部は斜下方にまっすぐ延び、端部は内傾する凹状である。稜は甘く、沈線を伴う。天井部は低く、平らに近い。天井部外面2/3に回転ヘラ削り調整を施すほかは回転ナデ調整である。93は須恵器坏身で、口径13.8cm、受部径16.2cm、器高4.9cm、たちあがり高1.5cm。たちあがりは内湾しながら斜上方へ延び、端部は丸く収める。受部は鈍く外方へ突出する。底体部はやや浅く、平らに近い。底体部外面2/3に回転ヘラ削り調整を施すほか、内面中央に仕上げナデを、この他は回転ナデ調整である。底体部外面には暗乳褐灰色の自然釉をかぶる。

S X 103 西端をS B 103に切られ、西半では北肩部をピットに切られ、東は調査区外へ延びる溝状遺構で、最大幅1.19m、最大長2.95m、深さは0.10mである。埋土は淡乳黄色シルト混極細砂で、製塩土器と須恵器坏蓋・甕底部が出土している。

出土遺物 94は薄手無文で丸底椀形の製塩土器で、口径12.4cm、器高8.8cmで、口縁部一部に焼き歪みがあり、端部は小さな内傾する平坦面をもつ。外面には粘土紐接合痕が目立つ程度で、内面は上半に板ナデ調整が施される。95も同形の製塩土器と考えられ、口径13.2cm、残存高7.3cm。外面には粘土紐接合痕が目立つ程度で、内面にはナデ調整が施される。96は須恵器坏蓋で、口径14.5cm、器高5.0cmである。口縁端部は鋭く仕上げ、内面に段をもつ。

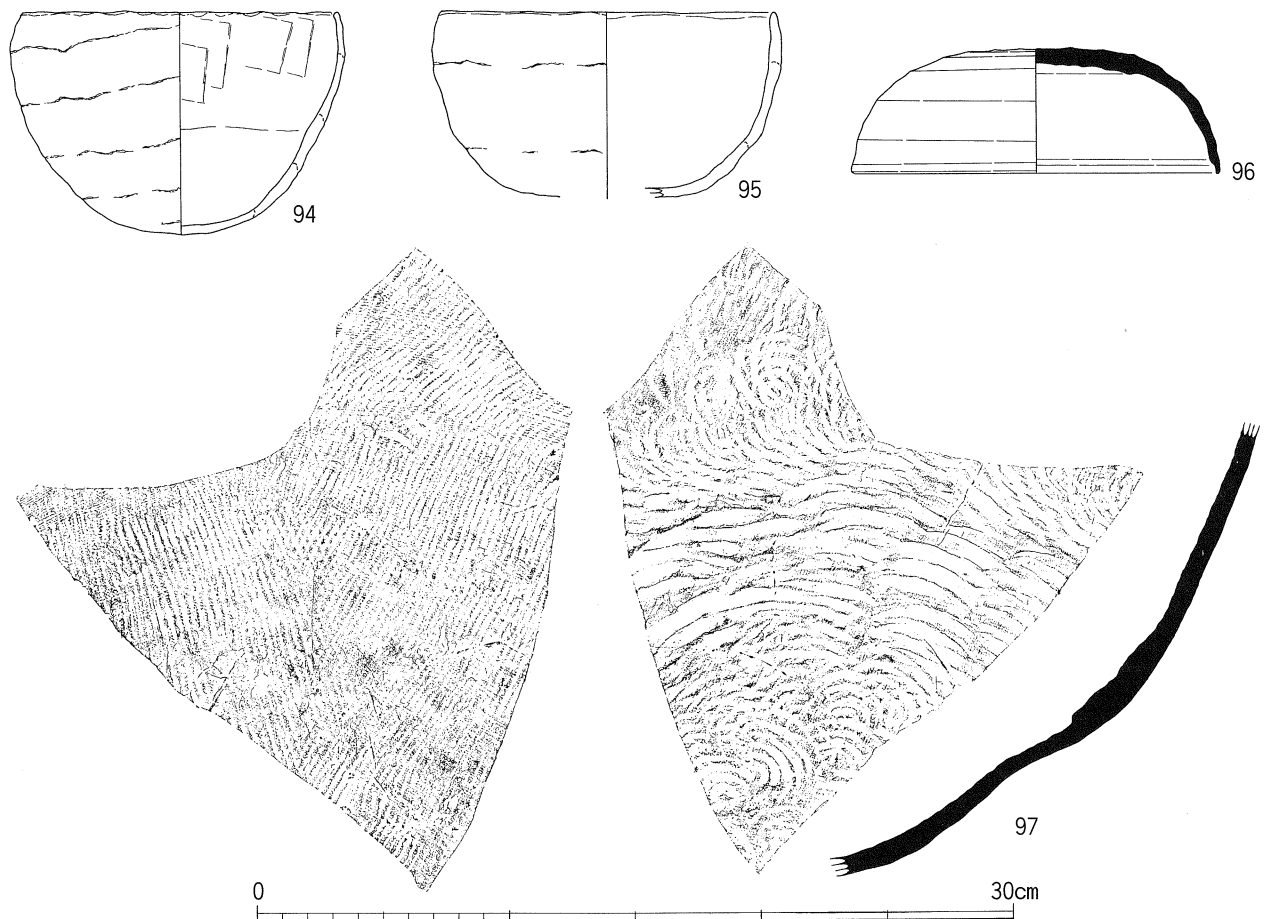


fig.59 S X 103出土の土器

天井部外面 2/3 に回転ヘラ削り調整を施し、内面は回転ナデの後円弧状アテ具痕が観察できる。97は須恵器甕底部片である。外面は4条/cmの格子風叩きの後一部カキ目調整で、内面は同心円文あるいは円弧状叩きのアテ具痕が明瞭である。また、外面には口径22.0cmに復元できる別個体の熔着痕がある。

(4) 土坑

S K 101 長径1.40m以上、短径0.55mで、平面形が瓢箪形の土坑で、深さは最大で0.15mである。埋土は暗灰色極細砂質シルトで、北肩部でやや浮いた状態で、完形の須恵器坏身1点が出土しているほか、土師器の小片が出土している。

98は口径9.3cm、器高3.1cmで、底部部外面 1/2 は回転ヘラ切り未調整である。底部外面には乳白色の自然釉をかぶる。

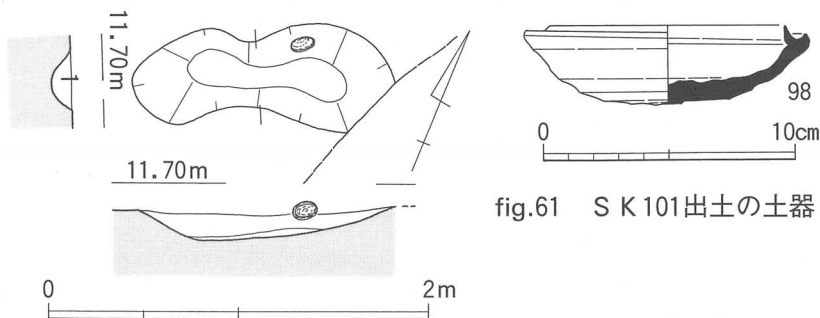


fig.60 S K 101  
1 暗灰色極細砂質シルト

fig.61 S K 101出土の土器

(5) ピット

S P 136 S B 101のカマド焚口の西側で確認したピットで、S B 101の埋土・床面を切る。直径0.35m、深さ0.41mの平面円形で、西半は調査区外にある。埋土は直径3mm大の炭粒を含む淡乳灰色シルト混極細砂である。

99は口径23.1cmの須恵器甕の口縁部で、内湾しながら斜上方に延びる口縁部の端部は折り曲げて幅広の面をもつ。体部の外面は4条/cmの平行叩きの後カキ目調整、内面は同心円文叩きのアテ具痕が明瞭である。

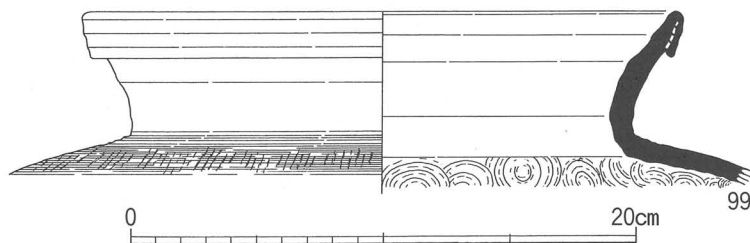


fig.62 S P 136出土の土器

(6) 流路

S R 101 調査区のほぼ中央を西方向へ流れたと推定される流路で、最大幅7.05m、最大深さ2.50mである。最終埋没の堆積と考えられる乳灰色シルト混極細砂をS B 105・106の柱穴が北肩部を切っていることや、南肩部ではこの極細砂層の下層にあたる暗乳色シルト質極細砂から古墳時代後期後半の土師器・須恵器が比較的まとまって出土していることから、竪穴住居や柵が営まれた古墳時代後期末以前にはほぼ埋没していたものと推定できる。埋土の大半を占めるのは灰色系の砂礫で、弥生時代中期から古墳時代後期後半の土器とともに、自然木を含む棒材や板材などの木製品が出土している。



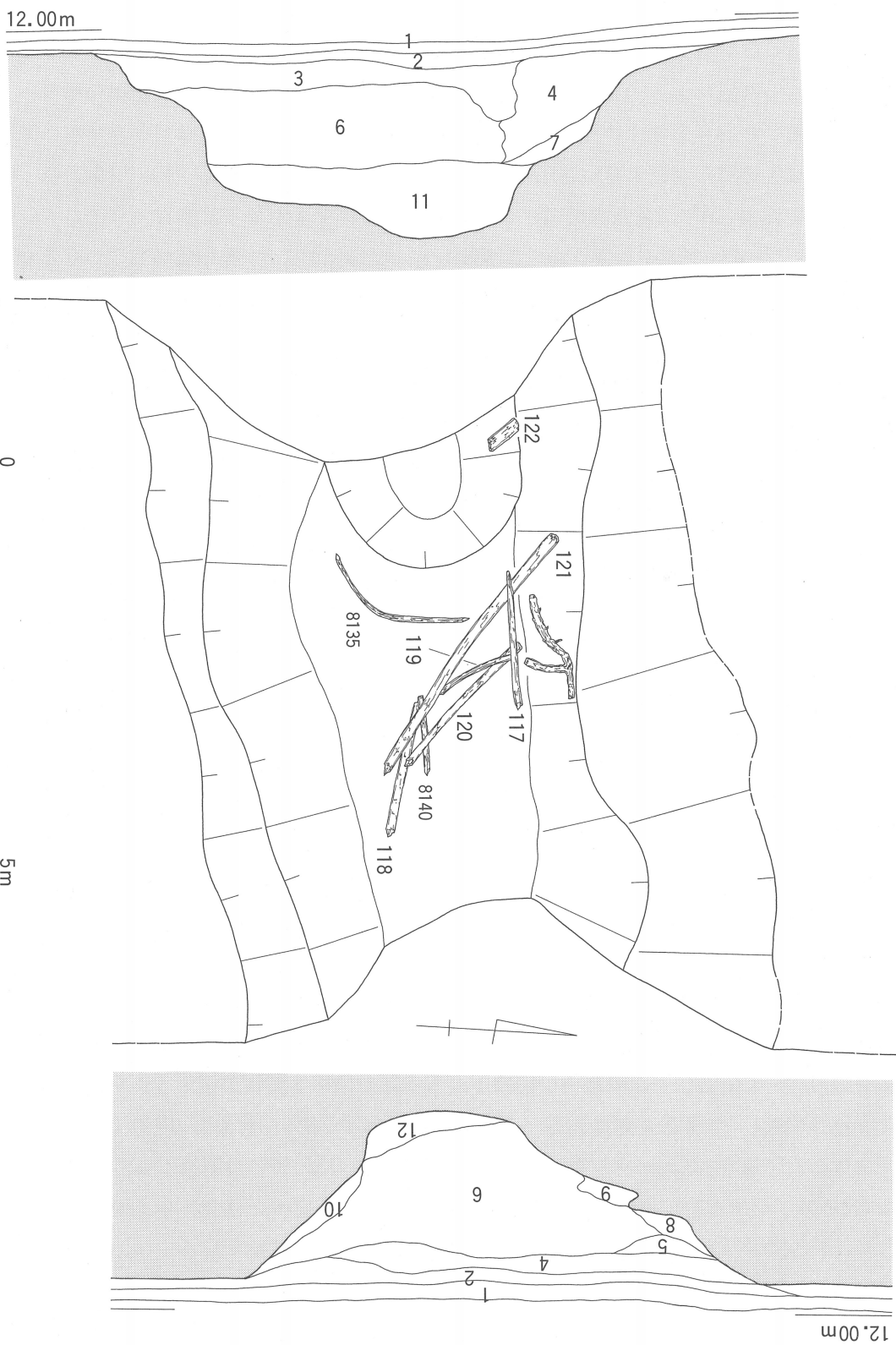


fig.63 S R 101

- 1 淡乳灰色極細砂質シルト
- 2 暗乳色シルト質極細砂
- 3 淡乳灰色わずかにシルトを含む極細砂～細砂
- 4 淡緑灰色シルト混極細砂
- 5 暗青灰色シルト混極細砂～細砂
- 6 灰白色極細砂～中礫
- 7 暗灰色極細砂混シルト(10mm大の炭・細礫混じり)
- 8 灰色シルト質極細砂～細砂
- 9 淡黒色細砂質シルト
- 10 黒色細砂質シルト
- 11 灰色極細砂～中礫
- 12 暗青灰色細砂～中礫

出土遺物 100は球形の体部をもつと考えられる二重口縁の壺の口頸部で、口径19.3cm。内外面ともにヘラ磨き調整で丁寧に仕上げられる。101は口径17.0cmの直口形態の壺の口縁部で、粗い縦刷毛調整の後幅広のヘラ磨き調整を加える。102は口縁端部をわずかに欠損する以外は完形の土師器の小型丸底壺で、口径約8.0cm、体部最大径8.8cm、器高9.3cm。口縁部外面に縦方向のヘラ磨き調整が施され、内面は板状工具の小口痕が認められる。103は口縁端部を欠損する土師器の小型壺で、体部最大径8.7cm、残存高8.4cmである。104は弥生土器甕の底部で、底径4.1cm、残存高7.0cmで、外面は2条/cmの平行叩き仕上げである。105は口径10.0cm、残存高9.3cmの土師器の小型甕で、摩滅が顕著である。106は長胴球形の体部から「く」字形に外反する口縁部をもつ土師器の中型甕で、口径16.6cm、体部最大径20.6cm、器高23.3cmである。体部外面は3条/cmの縦刷毛調整、内面は右上がりを中心とするヘラ削り調整である。107は体部に比して口縁部が大型の土師器甕で、口径18.4cmである。内・外面ともに刷毛調整を施す。108は土師器高坏坏部で、口径14.8cmで、内・外面には8条/cmの刷毛調整を施す。脚部との接合は円盤充填法による。109は土師器の椀形高坏の坏部で、口径13.2cmで、口縁部をヨコナデで仕上げるほかは、ナデ調整である。110は高坏脚部で、底径12.4cmである。脚端部は刷毛調整が顕著である。111も土師器の高坏脚部で、底径9.0cmである。外面はヘラ磨き調整で、脚柱部内面は時計回りのヘラ削り調整である。

112は口径12.4cmの須恵器坏蓋で、天井部を欠く。口縁部は垂直に下り、端部でわずかに外湾し、丸く収め、内面には鋭い段をもつ。稜は断面三角形で鋭く突出する。天井部外面の5/6は回転ヘラ削り調整か。113も坏蓋で、口径12.8cm、器高3.7cmである。口縁端部は内傾する凹状に仕上げられる。稜は甘い断面三角形で、天井部は低く、平らに近い。天井部外面の2/3は回転ヘラ削り調整で、内面中央は一定方向のナデ調整である。114も坏蓋で、口径15.0cm、器高4.9cmである。口縁部は短く外湾して延び、端部は内傾するわずかに凹状を呈する。凹線を下位に伴う稜は丸みをもつ。高い天井部は丸みをもつ。天井部外面の2/3は回転ヘラ削り調整で、淡白灰色の自然釉をかぶる。115は須恵器坏身で、口径9.4cmで、底部を欠く。たちあがりは斜上方へ延び、端部は内傾する凹面を呈する。底体部は深く、丸みをもつ。底体部外面の3/4は回転ヘラ削り調整である。116も坏身で、内湾しながら延びるたちあがりの端部は内傾するわずかな凹状を呈する。底体部は深く、丸みをもつ。底体部外面1/2は回転ヘラ削り調整で、ヘラ記号が認められる。117は須恵器ハソウで、口縁端部を欠損する以外は完形である。口頸基部径6.2cm、体部最大径10.9cm、残存高13.5cm。太い口頸部上半は見かけで右→左方向へ施文された22条1帯の櫛描波状文で飾られる。体部は扁平な球形で、中位に1.6cmの円孔が1個穿たれる。体部上半は7～8条の櫛描列点文で飾られ、中位付近には凹線が1条巡り、下半は回転ヘラ削り調整が施される。底部外面中央は摩滅が顕著である。外面には黒灰色～乳灰色の自然釉をかぶる。

なお、105・106・114・117は南肩部の最上層にあたる暗乳色シルト質極細砂層からまよって出土しており、古墳時代後期後半の一括資料と言える。

木製品は加工痕の明瞭なもののみ図化した。118は長さ173.6cm、最大径6.4cmの丸棒材

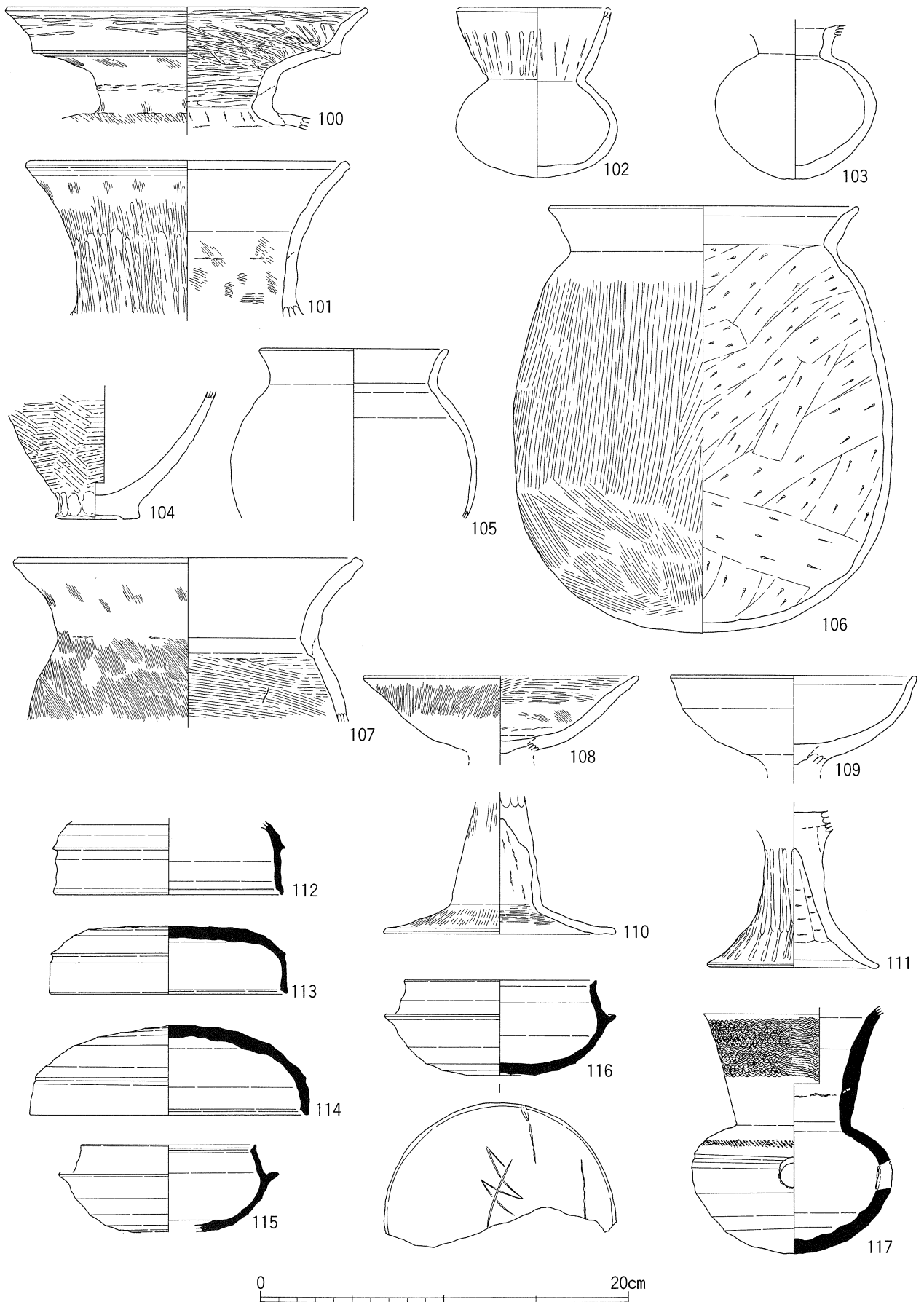


fig.64 S R 101出土の土器



fig.65 S R 101出土の木製品

さである。先端部を杭状に尖らせており、他端は切り出しの際の加工が認められる以外には、顕著な加工は認められない。119は両端を欠くが、長さ165.0cm、最大径7.0cmの丸棒材である。先端部に加工痕がわずかに遺存しており、118と同様に尖っていたものと考えられる。120は長さ160.0cm、最大径5.0cmの丸棒材で、先端部を杭状に尖らせている以外には、明瞭な加工痕は認められない。121は両端を欠くが、長さ150.4cm、最大径4.0cmの丸棒材である。先端部には加工痕が遺存しており、杭状に尖っていたものと考えられる。122はほぼ全容を窺える丸棒材で、長さ316.8cm、最大径7.0cmである。上端は明瞭な加工痕が確認できないものの、断面三角形に尖っている。また、下端は柄様の加工が施されており、建築部材を構成するものであろうか。123は割板材で、長さ47.8cm、幅13.9cm、厚さ4.0cmである。

## 5. 小結

今池尻遺跡第3次調査地点では、2時期の遺構面が確認でき、竪穴住居をはじめとする多くの遺構が確認でき、まとまった量の遺物も出土した。2時期にわたる集落域を確認できたこととなる。ここでは遺物の検討を通じて各遺構の時期を詳らかにしていきたい。

### 弥生時代後期

第2遺構面として確認した弥生時代後期では、まず同じ占地で同規模に建て替えられた竪穴住居（S B 201）がある。（古）段階は口縁部に凹線文が残存する大型鉢の特徴から後期前半でも古相のものと考えられ、これを切るS X 214がこれに続く時期と考えられる。そして、遺構の切り合いから（新）段階の資料が続くものと考えている。（新）段階の資料は広口壺（3）の形態や甕の形態特徴や分割成形技法などの特徴から後期中頃に比定できるものと考えている。なお、（4）は口頸部の形態が讃岐系のものに類似している点が指摘できる。また、S X 208の資料も（新）段階の資料と同時期のものと考えている。後期後半には住居そのものを放棄して、別の場所に移動したものと考えている。

また、短い溝状遺構あるいは船底形の長い土坑がまとめて確認されている。方向性に統一性は認められないが、完形の土器のみを含むS X 208や鉢に限られた器種しか出土していないS X 215が含まれることは、何らかの遺構の性格を具現しているものと考えられるが、現状では明らかにはできない。

なお、図化した弥生土器はいずれも胎土に直径1～2mm大チャート粒を含むもので、クサリレキの粒径と量には個別に差異が認められる。色調は概して乳色系のものがほとんどで、在地で製作されたものと考えている。

最後に、北半区の遺物包含層からの出土ではあるが、近江系とされる受口状の口縁部片（124）が確認できている。口径13.3cmで、口縁端面は平坦面を呈し、端部外面には4点1帯の櫛描列点文を施すもので、外面には煤の付着が顕著である。なお、胎土の特徴から在地の土器と分類できるほどの差異は見出せない。

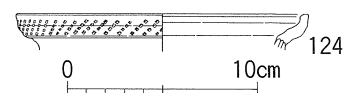


fig.66 北半区包含層出土の近江系土器

古墳時代後期 第1遺構面では古墳時代後期後半～末の竪穴住居をはじめとする多くの遺構・遺物が確認できた。まず、後期後半では溝・流路以外の顕著な遺構には恵まれていない。S X102－S・S R101の肩部の資料がT K10型式（新）に、S X103がT K43型式に比定でき、6世紀後半段階の資料として位置づけできる。また、S R101からまとまって出土した建築部材を想定できる木製品を含む遺物の存在から考えると、隣接して立地する潤和遺跡内に当該期の集落が営まれているものと推定できる。

後期末では、竪穴住居の時期変遷が次のように考えられる。S B102→（須恵器坏蓋の口径縮小）→S B101→（遺構の切りあい・須恵器坏蓋の口径縮小）→S B103→（遺構の切りあい）→S B104の時期変遷が窺える。S B102・101はT K217型式（古相）に、S B103・S B104はT K217型式（新相）に比定できよう。実年代で7世紀第1四半期～第2四半期にかけての時期と考えられる。短期間の内に限られた場所で規模を縮小しながら建て替えが頻繁に行われたことを物語る一方、いずれの竪穴住居も4本柱で、カマドをもつという共通性をもつ。遺物の少ない掘立柱建物S B105・S B106については一部で重複があり、S B105のすべての柱材が抜き取られている点からS B105→S B106の変遷を考えている。また、柵列S A101・S A102でも柱材が遺存することから、柱材が遺存したS B106と近接する時期と考えている。これらの遺構とS B103・S B104が併存する柵列に囲まれた集落の景観が復元できるものと推定できる。さらに、S R101が埋没した後竪穴住居・掘立柱建物が営まれたと考えられることから、6世紀後半段階の集落域が移動あるいは拡大したものと考えられる。

## 6. 今池尻遺跡第3次調査における樹種同定

株式会社 古環境研究所

## (1) はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から属レベル程度の同定が可能である。また、木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

## (2) 試料

試料は、今池尻遺跡第3次調査において出土した古墳時代後期を主とする割材、丸材、丸杭、柱材などの木材16点である。

## (3) 方法

カミソリを用いて新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、生物顕微鏡によって60～600倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

## (4) 結果

fig. 67に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科

fig. 68-1

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質より、マツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属には、クロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する。常緑高木である。材は水湿によく耐え、広く用いられる。

コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc. コウヤマキ科

fig. 68-2

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで、晩材部の幅はきわめて狭い。

放射断面：放射柔細胞の、分野壁孔は窓状である。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～15細胞高であるが多くは10細胞高以下である。

以上の形質よりコウヤマキと同定される。コウヤマキは福島県以南の本州、四国、九州に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ30m、径80cmに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靱、耐朽、耐湿性も高い。特に耐水湿材として用いられる。

ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* Schottky ブナ科

fig. 68-3

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が、やや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射組織は、単列のものと集合放射組織が存在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなり、同性放射組織型である。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと集合放射組織が存在する。

以上の形質よりツブラジイに同定される。ツブラジイは関東以南の本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽性、保存性低く、建築材などに用いられる。

コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科

fig. 69-4

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靱で弾力に富み、建築材などに用いられる。

コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科

fig. 69-5

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が、単独でおおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強靱で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

(5) 所見

同定の結果、今池尻遺跡第3次調査の古墳時代後期を主とする木材は、マツ属複維管束亜属4点、コウヤマキ7点、ツブラジイ1点、コナラ属コナラ節1点、コナラ属クヌギ節3点であった。

柱材などの建築材は九州北部、瀬戸内沿岸、近畿中央部、東海西部にかけては、古墳時代ないし律令期以降はヒノキが多用され、コウヤマキがやや混じる。柱材がコウヤマキばかりである本遺跡は、地域的な特徴である可能性がある。丸材はマツ属複維管束亜属、ツブラジイ、コナラ属コナラ節、コナラ属クヌギ節と多様である。いずれも二次林や乾燥したところを好む樹種であり、周囲の植生を反映していると考えられる。

参考文献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.

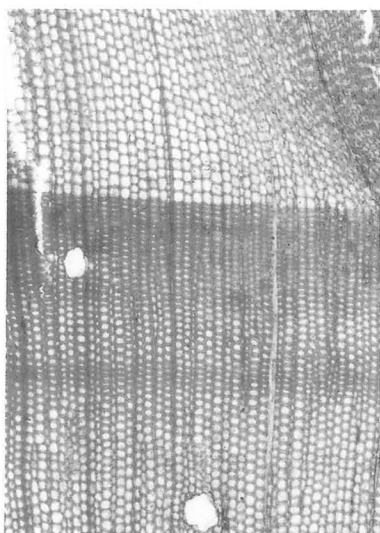
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，296p.

金原正明（1995）近畿地方における弥生古墳時代の木材利用と画期．古墳文化とその伝統，勉誠社，p.553-562.

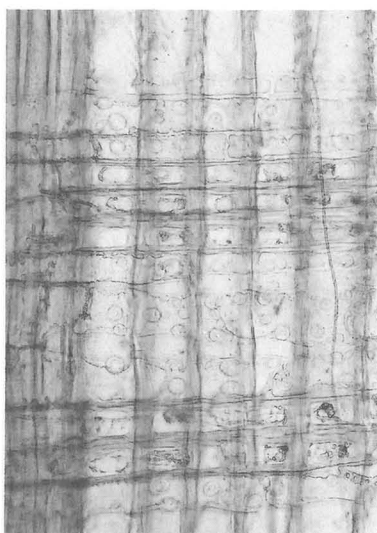


fig. 67 今池尻遺跡第3次調査における樹種同定結果

遺物No	遺物名	出土層位	時期	結果 (和名/学名)	W-No
	木片	S B 201 (古) - P 1	弥生時代後期	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyton</i>	R-264
	柱材	S A 101-P 1	古墳時代後期末	コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.	8143
59	柱材	S A 101-P 4	古墳時代後期末	コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.	8144
60	柱材	S P 141柱根	古墳時代後期末	コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.	8147
	柱材	S B 106-P 1 柱根	古墳時代後期末	コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.	8146
88	柱材	S B 106-P 4 柱根	古墳時代後期末	コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.	8145
118	丸杭	S R 101-③	古墳時代後期後半	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyton</i>	8136
119	丸杭	S R 101-⑧	古墳時代後期後半	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyton</i>	8141
120	丸杭	S R 101-⑤	古墳時代後期後半	マツ属複維管束亜属 <i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	8138
121	丸杭	S R 101-⑥	古墳時代後期後半	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyton</i>	8139
122	先端加工丸材	S R 101-④	古墳時代後期後半	コナラ属コナラ節 <i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	8137
123	割材	S R 101-①	古墳時代後期後半	コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.	8134
	丸材	S R 101-②	古墳時代後期後半	コナラ属クヌギ節 <i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	8135
	丸材	S R 101-⑦	古墳時代後期後半	コナラ属クヌギ節 <i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	8140
	丸材	S R 101	古墳時代後期後半	コナラ属クヌギ節 <i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	8142
	自然木	S X 101	古墳時代後期以降	コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.	R-033



横断面 : 0.5mm

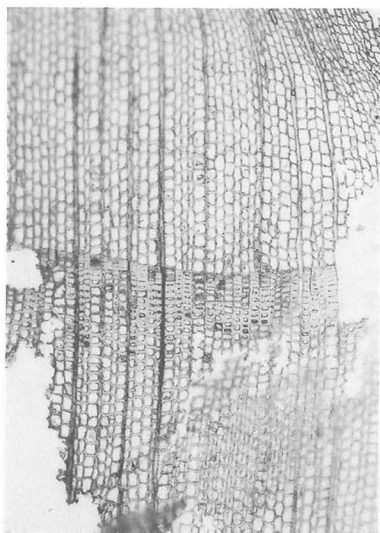


放射断面 : 0.1mm

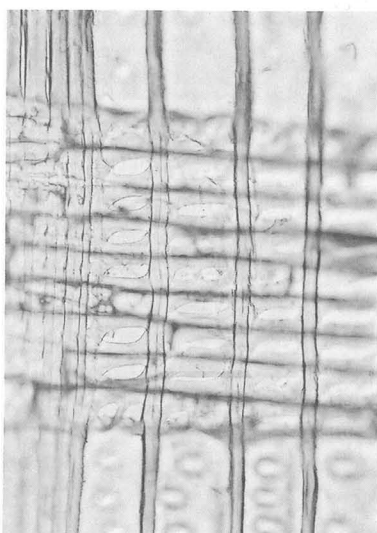


接線断面 : 0.2mm

1 121 丸杭 マツ属複維管束亜属



横断面 : 0.5mm

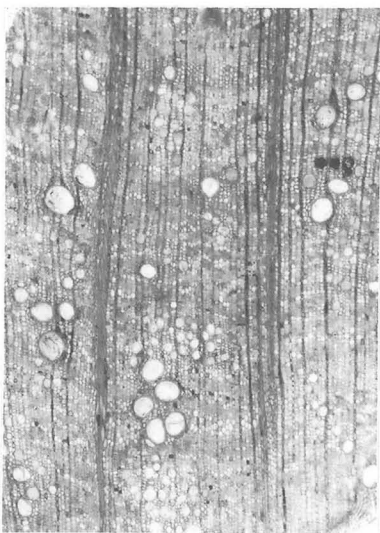


放射断面 : 0.1mm



接線断面 : 0.2mm

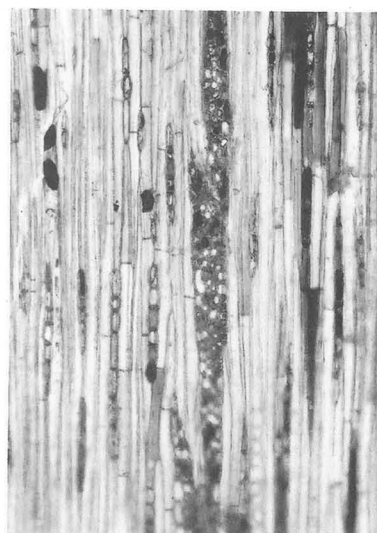
2 123 割材 コウヤマキ



横断面 : 0.5mm



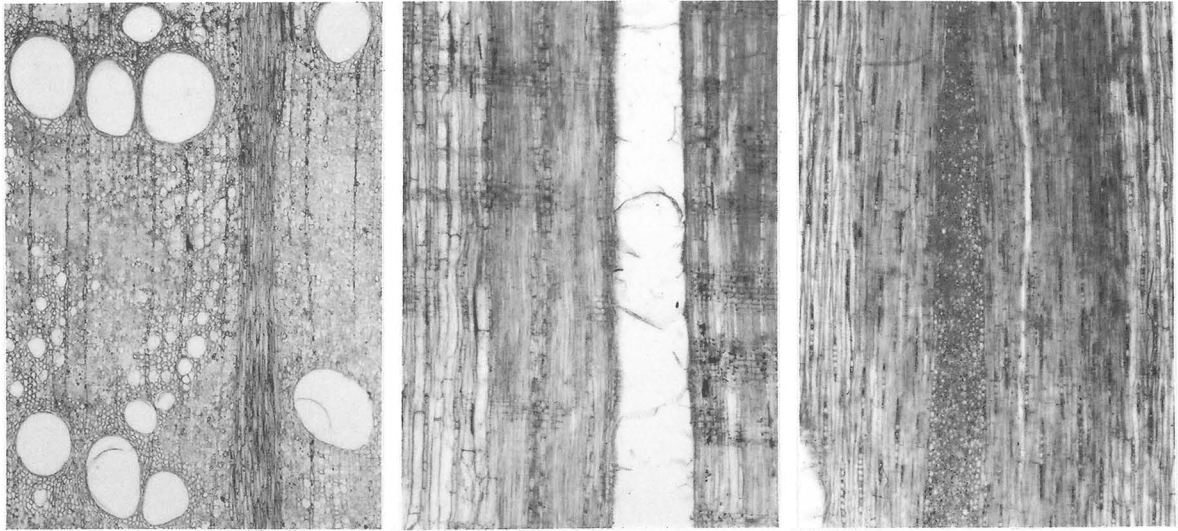
放射断面 : 0.1mm



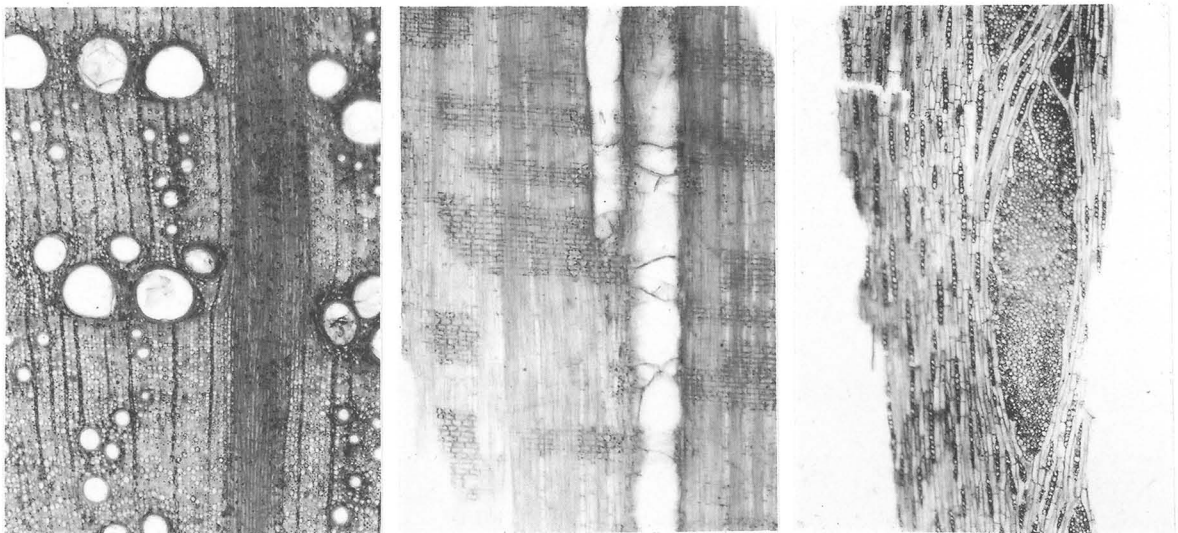
接線断面 : 0.2mm

3 120 丸杭 ツブラジイ

fig.68 今池尻遺跡第3次調査の木材(1)



横断面 : 0.5mm 放射断面 : 0.1mm 接線断面 : 0.2mm  
4 122 先端加工丸材 コナラ属コナラ節



横断面 : 0.5mm 放射断面 : 0.1mm 接線断面 : 0.2mm  
5 No.8135 丸材 コナラ属クヌギ節

fig.69 今池尻遺跡第3次調査の木材(2)



### Ⅲ. 今池尻遺跡第2次調査

#### 1. はじめに

##### (1) 調査区の設定

今池尻遺跡第2次調査の調査範囲は、全長約110mの内、南側約75mは車道部分約9m幅で、北側約35mは道路全幅の約12m幅で調査を実施した。調査区内は、南側75mを先行し、南側が終了後反転して北側35mの調査を行った。

調査区内では、調査区北端の  $X = -147822.843$ ・ $Y = 61227.728$  を0ポイントとし、調査区南端の、 $X = -147931.475$ ・ $Y = 61210.433$  を11ポイントとした。この2点を結ぶラインを基準線とし、0ポイントから10m毎に区切って、北から1区～11区とした。

##### (2) 基本層序

調査区内の現地表面の標高は、北半部では12.50m付近、南半部では、70～90cmの現代の盛土層が存在するため、13.30m付近である。

南半部は盛土層を除けば現代の耕土層が存在し、北半部の地表面とほぼ同じとなる。現代の耕土層は約20cmの厚さがあり、その下に中世後期から近世にかけての旧耕土層である明灰黄褐色細砂層が20～50cm存在する。その下に平安時代後期の遺物包含層である淡灰色シルト層および灰色シルト層が厚さ約10～20cmで存在する。北半部では、その下の灰色砂礫層ないしは黄褐灰色シルト層が、南半部では黄褐灰色細砂層が、平安時代後期の第1遺構面である。北半部ではその下層は古墳時代～飛鳥時代の流路の最終堆積層となる。南半部では第1遺構面以下、流路の溢流堆積層と考えられるシルト～細砂層が約50cm堆積している。その下の、弥生時代後期末の遺物包含層である黒褐色粘土層が第2遺構面の基盤層である。この層下にある弥生時代中期の遺物包含層でもある濁青灰色極細砂層が、第3遺構面の基盤層になる。この下層に存在する黒灰色粘土層が、弥生時代中期の第4遺構面の基盤層となる。

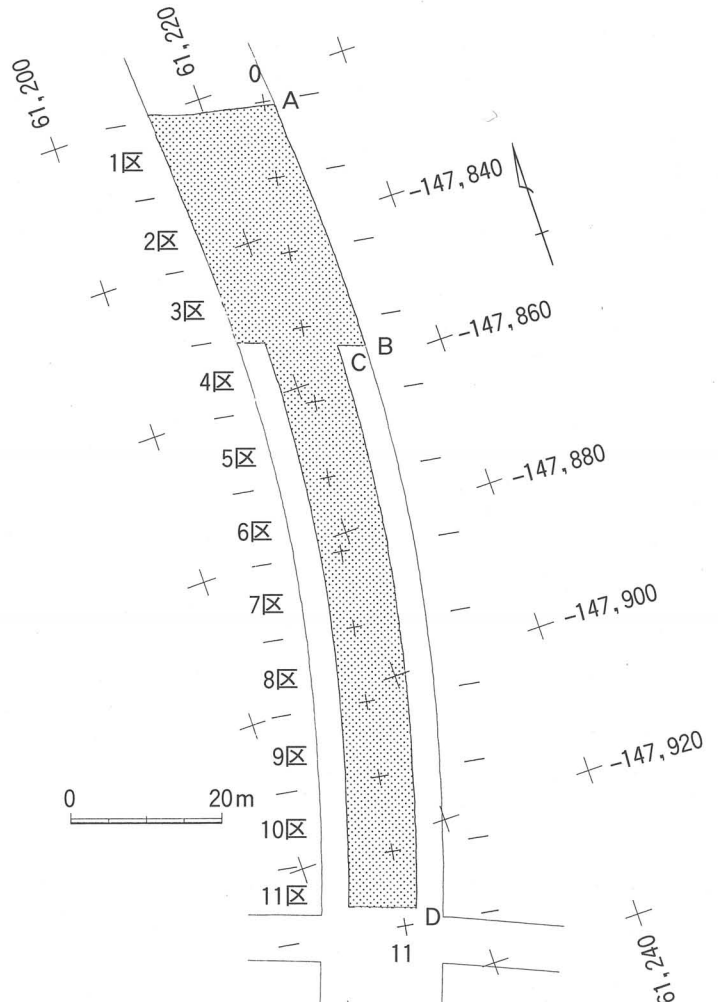


fig.70 調査区の設定 (1/1,000)



fig. 71 調査区東壁土層

## 2. 縄文時代の遺物

今回の調査地内では、縄文時代の遺構面は確認されなかったが、後世の流路や遺構などから、遺物が少量出土している。

201は後述する古墳時代後期の流路202から出土した縄文時代晩期の突帯紋土器である。内外面共に貝殻条痕を施し、口縁端部からやや下がった位置に断面薄錐形の突帯を貼り付けた後、突帯上面と口縁端部にナデ調整を施している。突帯上にO字形の刻目を施す。縄文時代晩期後半の滋賀里Ⅳ式のものと考えられる。

202は、平安時代の溝S D 144出土の凹基式石鏃である。石材はサヌカイトである。先端部とかえり部が欠損しているが、長さ1.8cm、幅1.5cm程度のも

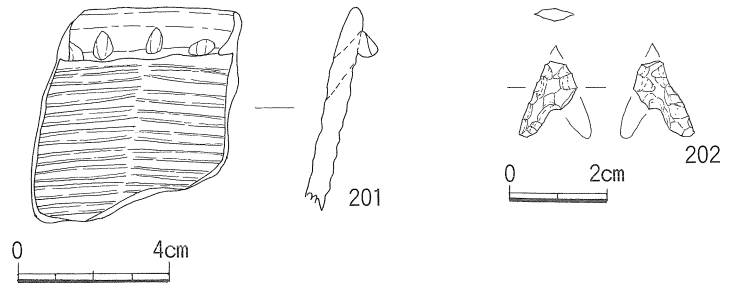


fig.72 縄文時代の遺物

## 3. 弥生時代中期の遺構と遺物

### (1) 遺構

弥生時代中期の遺構面である暗灰色シルト層は基本層序の項で述べたように、調査区の中央部のみ存在し、南側と北側は、弥生時代後期以降の流路によって削られている。検出された遺構は溝と浅い土坑のみである。

- S K 401 S K 401は東西方向に細長い土坑である。西側は調査区外に延びるため全体の形状は明らかでない。長さ2.9m以上、幅1.5m、深さは0.18mを測る。断面の形状は浅い船底形を呈し、埋土は淡暗灰色粘土と暗灰色極細砂混じりシルトの2層に分かれる。東西方向の浅い溝状の遺構の可能性もある。
- S K 402 S K 402は東西方向に細長い楕円形の土坑である。長さ2.5m、最大幅0.7m、深さは0.1mを測る。
- S K 403 S K 403は南北方向に細長い土坑である。長さ1.9m、幅0.4m、深さは0.1mを測る。S K 404に切られている。
- S K 404 S K 404は南北方向に細長い長方形の土坑である。東側はS D 403に切られているため、正確な規模・形状は明らかではないが、南北2.0m、東西0.5m程度の規模と考えられる。深さは0.05mを測る。
- S K 405 S K 405は楕円形に近い不定形の土坑である。長さ1.9m、幅0.4m、深さは0.1mを測る。S K 404に切られている。
- S D 401 S D 401は東西方向のやや弧状に曲がる溝状の遺構である。幅0.6m、長さ4.6mを測る。一部幅0.4mで深くなる部分があり、その部分では深さ0.1mを測る。
- S D 402 S D 402はほぼ東西方向に直線的に伸びる溝である。東西両側は、調査区外に延び、長さ約6.5mが調査区内で検出されている。調査区内の東端でS D 403が合流する。最大幅

1.6m、深さ0.07mを測る。

S D 403 S D 403はほぼ東西方向に直線的に延びる溝である。北側では、調査区外に延び、長さ約15mが調査区内で検出されている。南はS D 402に合流する。合流部付近はやや幅が広がり幅0.6m、深さ0.08mを測り、北側では幅0.25m、深さ0.05mを測る。

S D 404 S D 404はほぼ東西方向に直線的に伸びる溝である。幅0.25m、深さ0.05mを測る。S D 403と方向は違うが、形状が似た溝である。

第4遺構面では、上記の遺構のほか、直径0.2~0.3mのピットが2基検出されている。

## (2) 遺物

第4遺構面に伴う遺物は少なく、遺構からはほとんど遺物は出土していない。遺物包含層である濁青灰色シルト層から、図化できる遺物が少量出土しているにすぎない。

203・204は広口壺の頸部から口縁部にかけての破片である。

203はやや外反する頸部から大きく開いた口縁部を持つ。口縁端部は、上下に拡張し、広い面を持つ。この拡張した口縁部端面に、櫛描き波状文を施す。頸部以下の外面には、縦方向のハケメを施す。

204は斜めに開く頸部から屈曲して外反する口縁部を持つ。口縁端部は、若干肥厚し面をもつ。内外面の調整は、摩滅が著しく明らかでない。

以上2点の土器は、弥生時代中期後半の時期が与えられるものと考えられる。

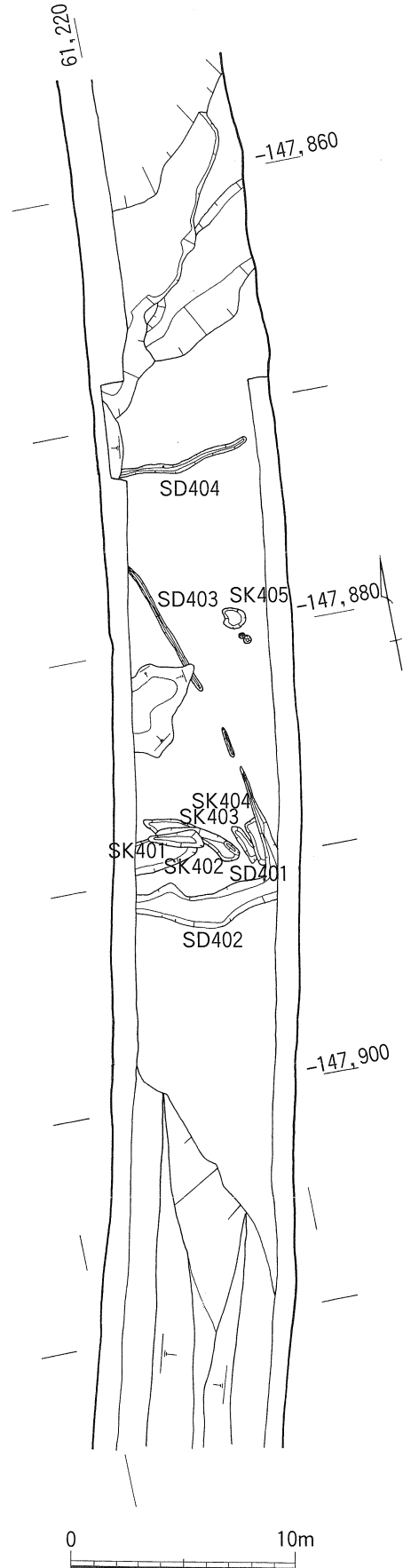


fig.73 第4遺構面



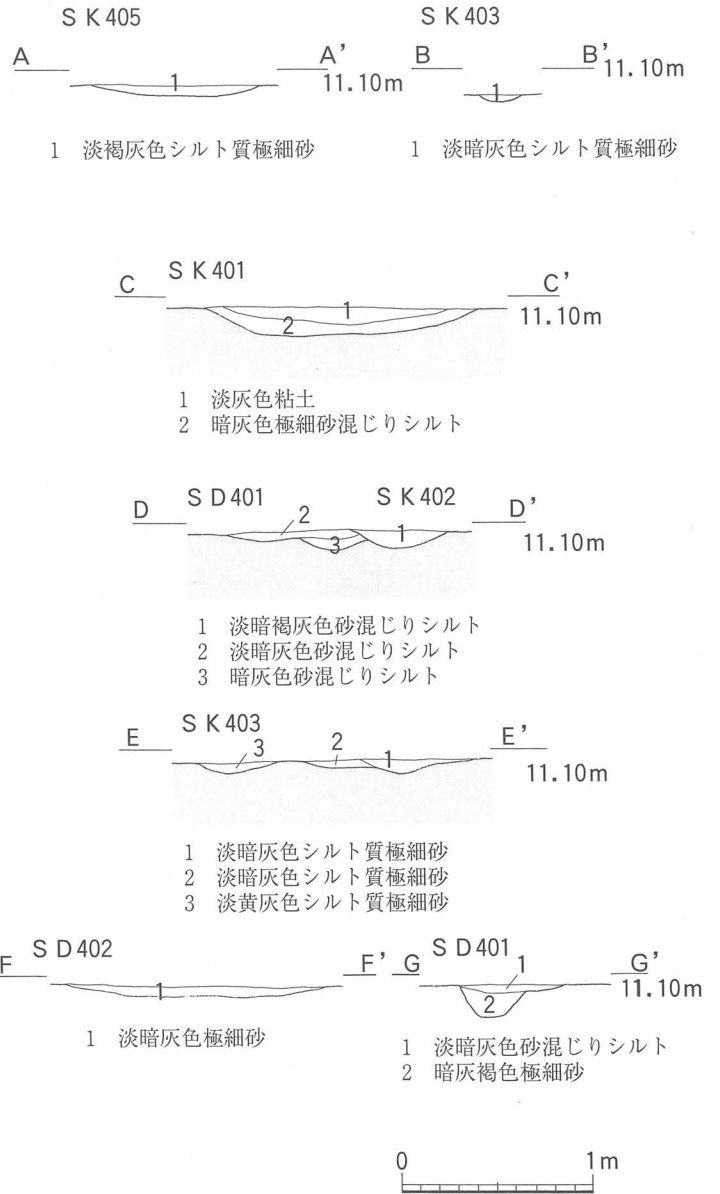
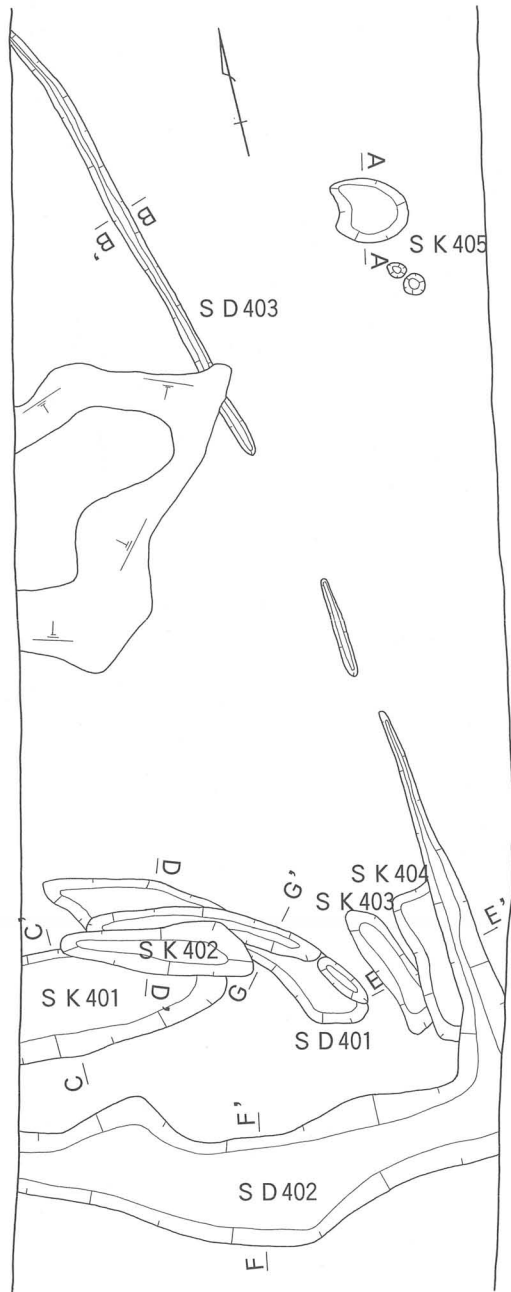


fig.74 弥生時代中期の遺構

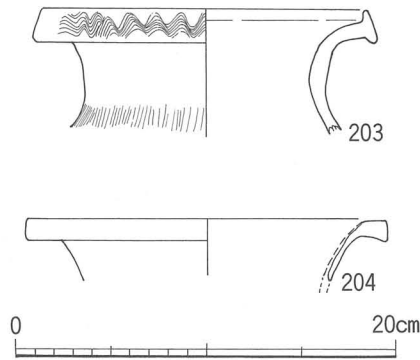


fig.75 弥生時代中期の遺物

#### 4. 弥生時代後期末の遺構と遺物

##### (1) 遺構

第3遺構面は、濁灰色シルト層を基盤とする遺構面であるが、この面も流路によって、調査区内の南側と北側が削られているため、中央部のみ存在する。また、遺構は非常に散漫で、浅い落ち込みと、土器溜りが検出されたに過ぎない。

第3遺構面の南端付近で、3基の浅い落ち込みが検出された。

**S X 301** S X 301は、東西方向に細長い浅い落ち込みである。東側は調査区外に延びるため、全体の規模は不明である。調査区内では、東西の長さ約5m、南北の幅約2m、深さ0.1mを測る。底部はほぼ平らで、埋土は暗灰色粘土である。東西方向に延びる溝状の落ち込みの可能性もある。埋土内から、弥生時代後期末と考えられる土器の小片が出土している。

**S X 302** S X 302は、S X 303の北側で、調査区の東端でその一部が確認された。調査区外の東側に延びる遺構のため、全体の規模・形状は不明である。調査区内では、東西の長さ約1.4m、南北の幅約1.3m、深さ0.12mを測る。底部はほぼ平らで、埋土は暗灰色砂混じり粘土である。

**S X 303** S X 303は、不定形の浅い落ち込みである。南北最大さ4.2m、東西最大幅3.8m、深さ0.12mを測る。底部はほぼ平らである。埋土は、暗灰色砂混じり粘土である。

以上の3基の遺構は、その形状などから、自然に形成された浅い窪みの可能性もある。

S X 301～S X 303北側の濁青灰色

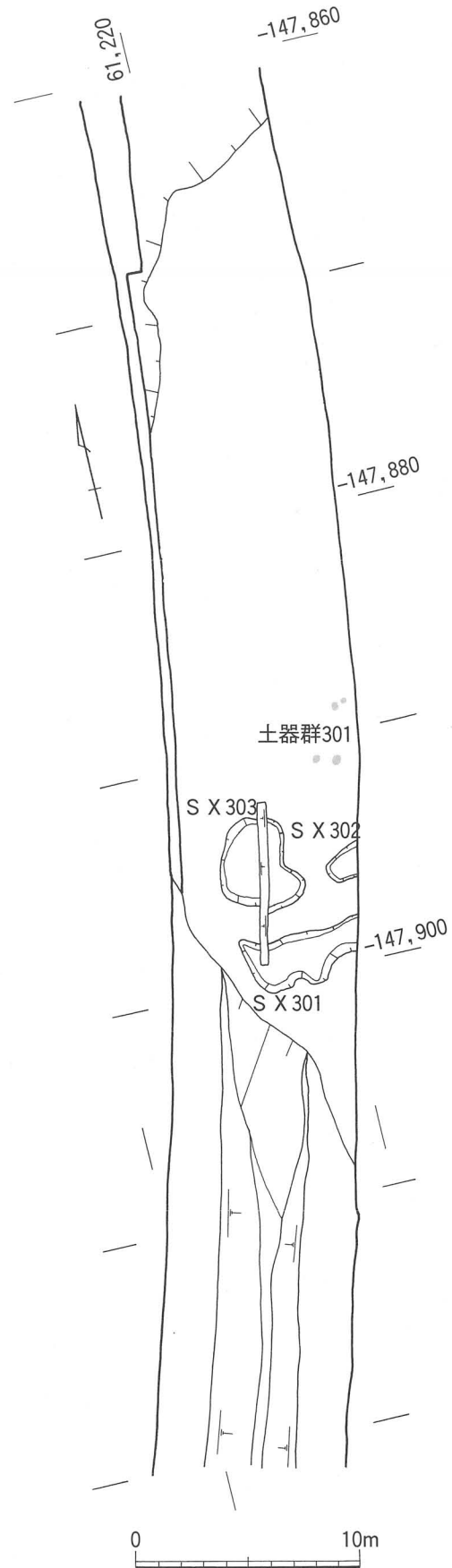
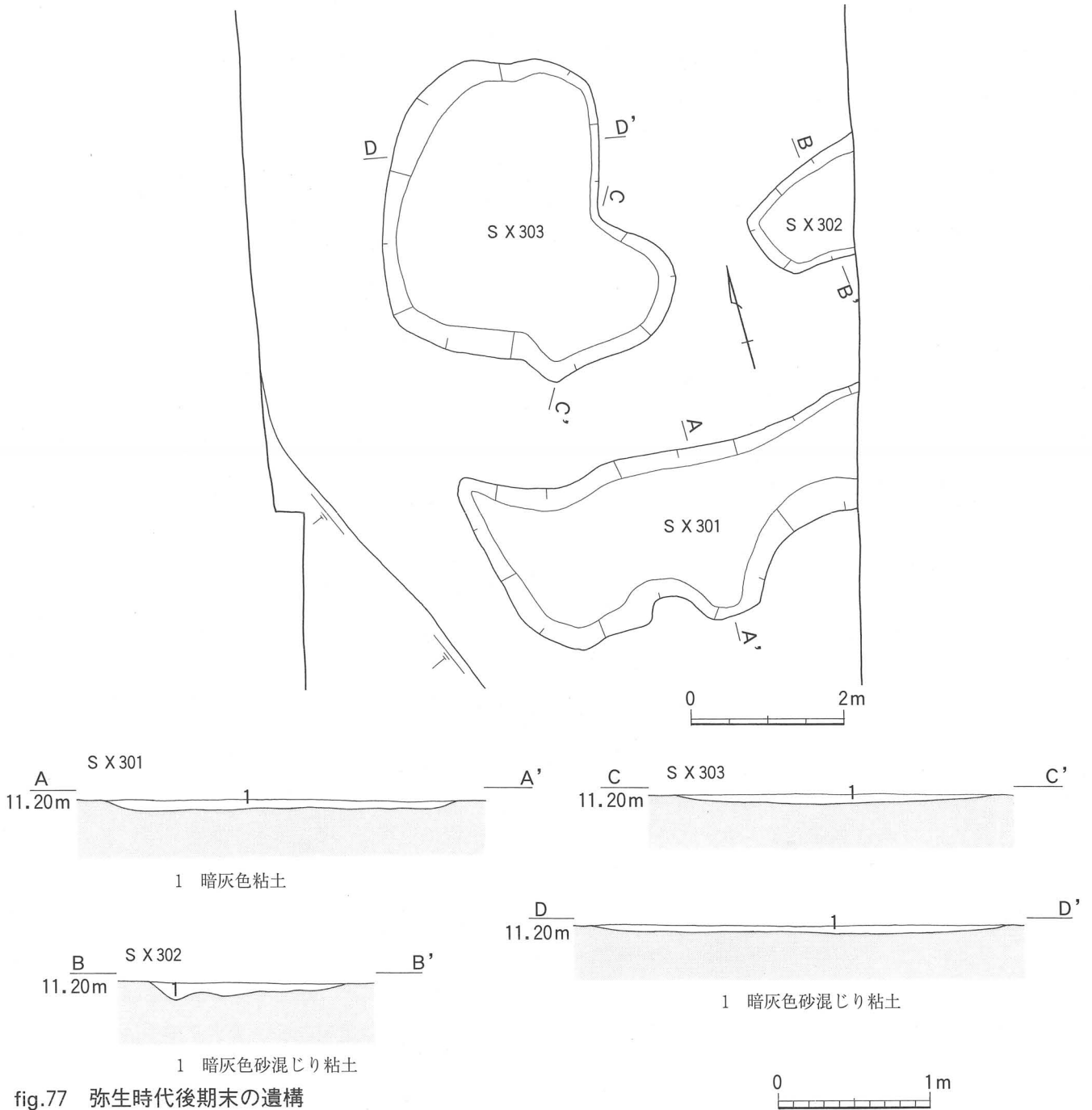


fig.76 第3遺構面



シルト層上面において、約2.0m×2.5mの範囲で、完形に近い土器が数点出土した。この付近では明確な遺構は検出されなかったが、その出土状況から、人為的に置かれた土器と考えられる。出土した土器は、壺・甕・高坏である。

(2) 遺物

弥生時代後期末の遺物は、遺構からはほとんど出土しておらず、土器群301と第3遺構面直上の黒灰色粘土層からの出土がほとんどである。それ以外に、黒灰色粘土層を切り込んでいる上層の遺構や、流路等からも遺物が出土している。

205は甕の口縁部で、口縁端部外面に面を持ち、その面に幅広く浅い凹線を施す。

206から209は広口壺の口縁部から頸部である。206は筒状の頸部から屈曲して大きく外

反し、口縁部は上部につまみ上げる。207は口縁端部下に粘土帯を貼り付けて口縁端部に面を持つ。この端面に3条の凹線を施す。208は筒状の頸部から外反した口縁部を持つ。口縁端部は若干上下に拡張し、端面は幅の広い凹線を施す。210・211は直口壺である。211は外面の頸部に半截竹管による逆C字形の連続刺突文を、頸部から体部の肩部にかけては、上から櫛描波状文・直線文・波状文・直線文を施す。口縁

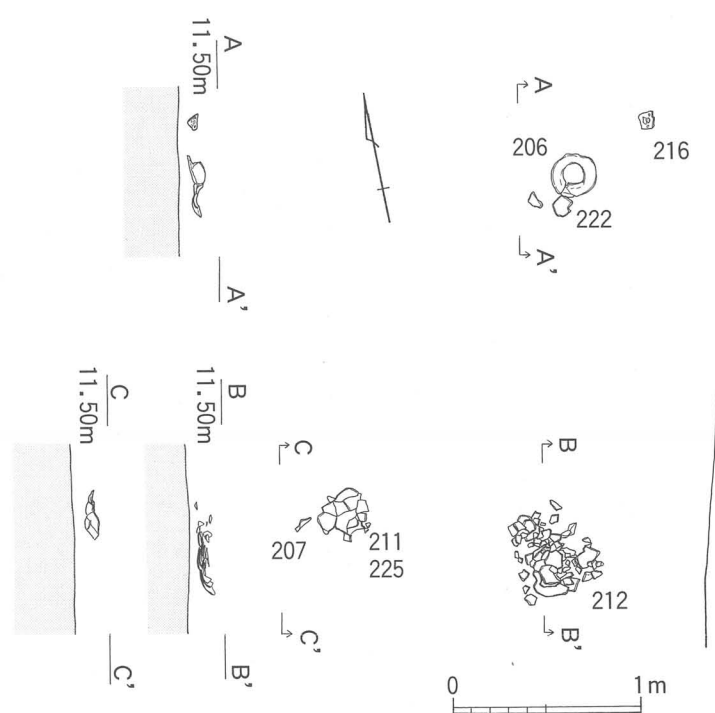


fig.78 土器群301

部外面は縦方向の内面は横方向のヘラ磨きを施し、体部外面は縦方向のヘラ磨きを、内面は板ナデを施す。212は壺の底部から体部にかけての破片である。外面の調整はタタキの後、縦方向のハケを施しその上から体部最大径付近を中心にヘラミガキを施す。

213は鉢である。内湾気味の体部に口縁部は大きく外反し、口縁端部は若干つまみ上げる。体部外面の調整は明らかではないが、内面は丁寧なヘラミガキが施されている。

214～216は高坏である。筒部が長く中空のもの(214)と中実のもの(215)と、短い筒部のもの(216)がある。

218は脚付鉢の脚部、219は壺または鉢の底部である。

220・221・222は甕の底部である。220・221は突出気味の底部で、体部外面は底までタタキを施す。内面の調整は、底部は簾状ハケメ、体部は縦方向のハケメを施す。

223は底部穿孔の鉢または甕の底部である。やや突出気味の底部に丸みをもった体部を持つ器形と考えられる。

224は壺の底部で、わずかに突出した底部で、体部は球胴形を呈するものと考えられる。内面の調整は不明であるが、外面は丁寧な横方向のヘラミガキが施されている。

225は甕の底部である。丸底に体部は球胴形を呈すると考えられる。体部内面の調整は不明であるが、外面は右上がりのタタキの後、縦方向のハケメが施されている。

なお、206・207・211・212・216・222・225は土器群301、218・220・221は流路201、それ以外は黒褐色粘土層ないしはこの層を切り込む後世の遺構からの出土である。これらの遺物は弥生時代後期末(庄内併行期)のものと考えられる。

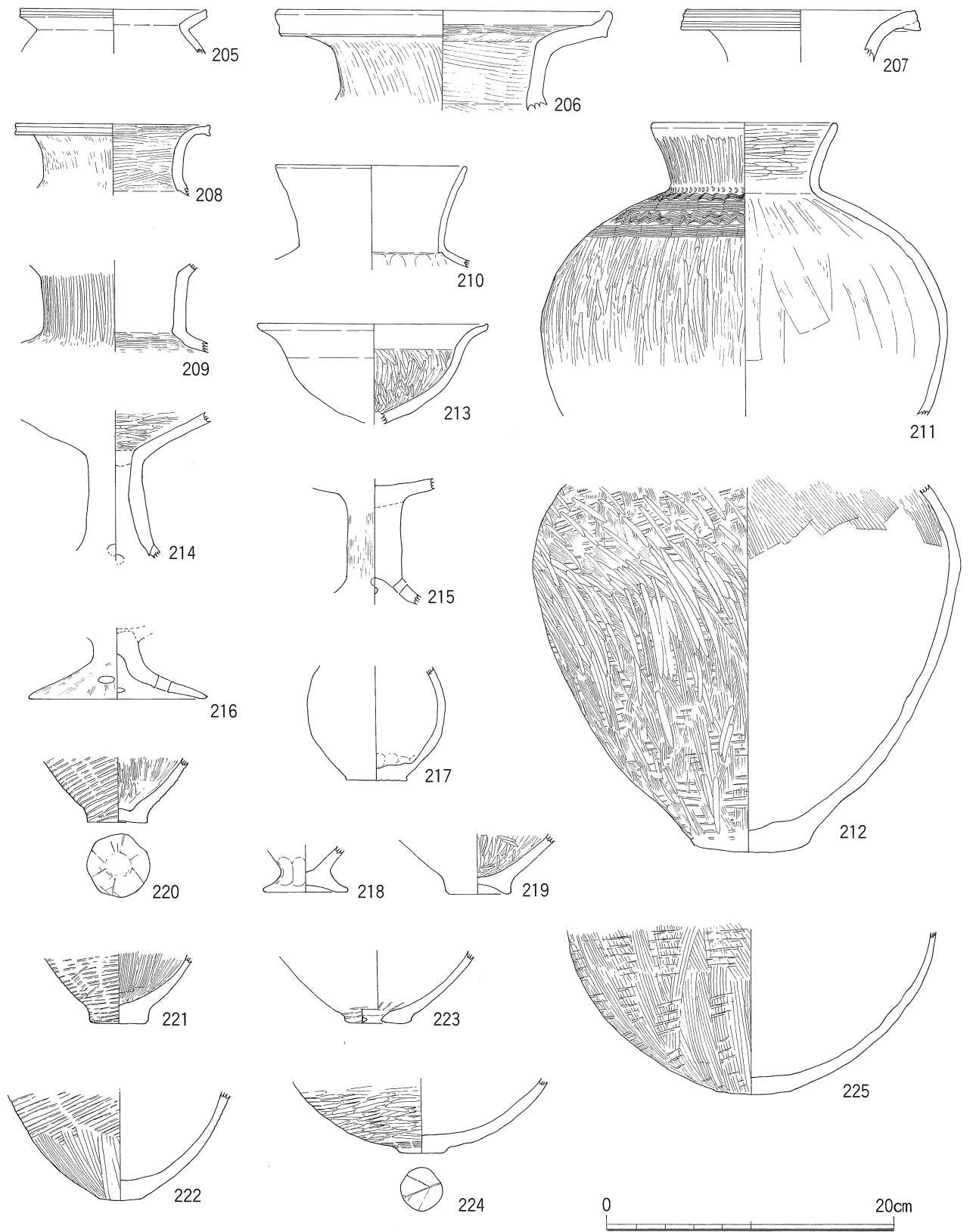


fig.79 弥生時代後期末の遺物

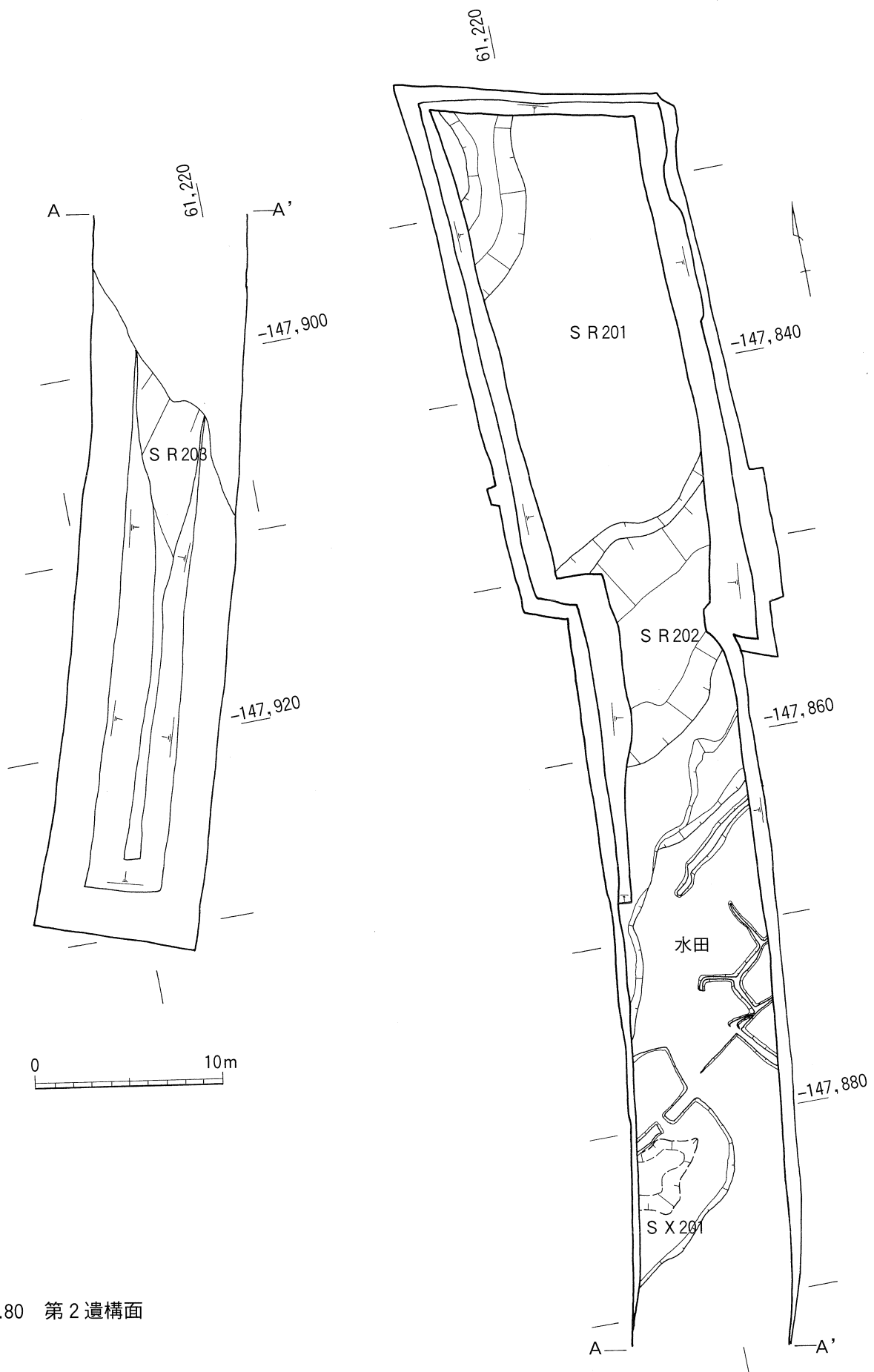


fig.80 第2遺構面

5. 古墳時代から飛鳥時代の遺構と遺物

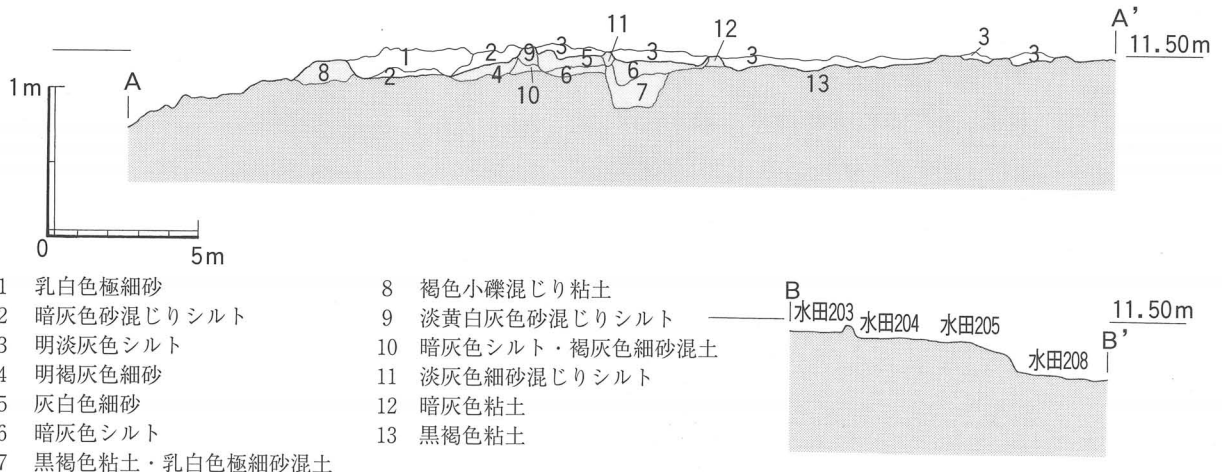
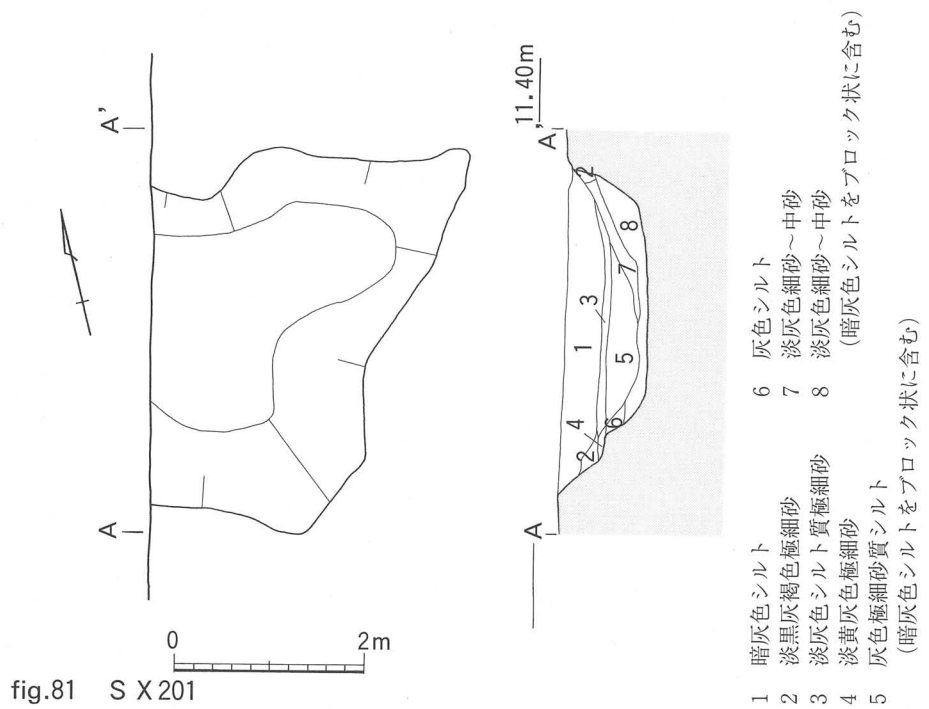
(1) 遺構

第2遺構面は弥生時代後期末の遺物包含層である黒褐色粘土層をベースとして、古墳時代の遺構が造られている。またこの遺構面は調査区の南と北では、古墳時代から飛鳥時代の流路が斜めに横切っているため、第3遺構面以下と同様調査区の中央でのみ検出された。

i) 土坑

S X 201 S X 201は4.0m×3.4m以上の不定形の落ち込みである。深さは0.8mを測り、底はほぼ平らである。西側が調査区外に延びるため、全体の規模・形状は不明である。

埋土の状況は、暗灰色または灰色のシルトから細砂層が中心で、また、中層では、黒灰色極細砂層が薄く一様に堆積していることから、一時期、滞水していたものと考えられる。



また、この遺構は後述する水田耕土層を除いた段階で検出されたことから、水田を造成する以前に掘られ、徐々に埋まりながら、完全に埋まった後に、水田が造成されたものと考えられる。

埋土の中層から、古墳時代後期の6世紀中ごろの須恵器と、砂岩製の台石（写真図版45）が出土している。

## ii) 水田

第2遺構面を覆う明灰白色極細砂層と乳白色極細砂層を取り除くと第2遺構面の北半部のみで畦畔が数条確認された。この畦畔は非常に低く、完全に残存するものが少ないことや、調査区外に延びるため、水田全体の形状が判るものはない。但し、残存する畦畔の方向などから、fig. 83に示したように、9面の水田は確認でき、それ以上の水田が、調査区内に存在したものと考えられる。

水田の土壌は、黒褐色粘土層を基盤層としその上層に若干残る明淡灰色シルトが耕土層と考えられる。畦畔は北東から南西方向のものと、それに直行する方向のものがほとんどで、後述する流路201・202に平行する。各畦畔は幅0.3~0.5mで、高さ0.06m程度であるが、水田208と水田209の間の畦畔はやや幅が広く、0.8mを測る。また、水田201と流路201の間には、幅0.9mの大畦畔が、流路に沿って造られている。

水田の形状は方形ないしは不定形と考えられ、面積は、30m<sup>2</sup>から50m<sup>2</sup>程度と考えられる。水田は北東から南西方向に並んでおり、水田間の高低差は水田208と水田209が他の水田

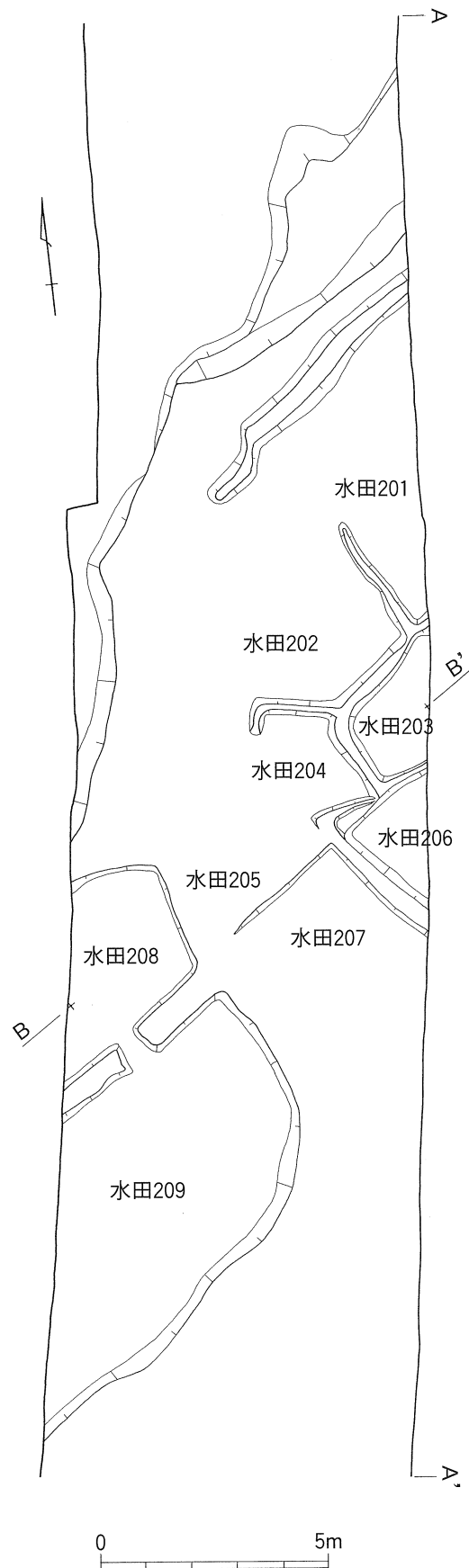


fig.83 古墳時代後期水田



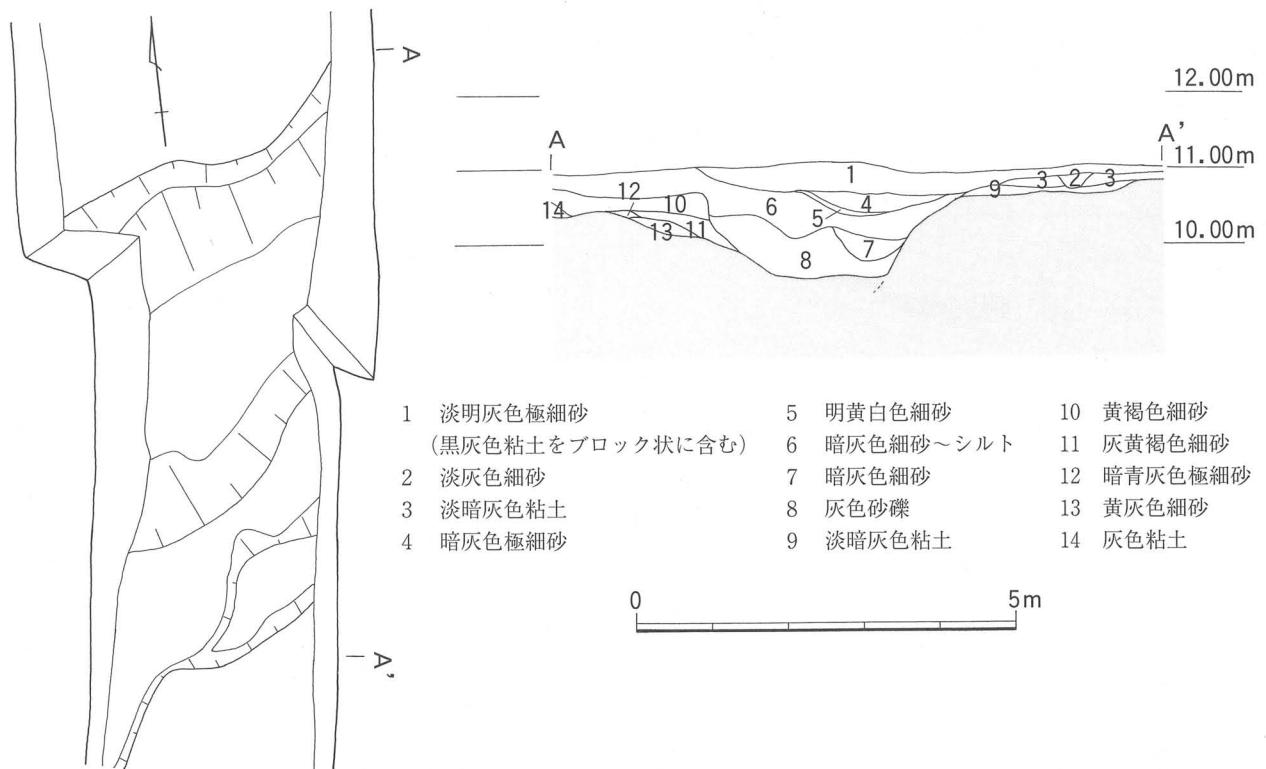


fig.84 流路202

より1段低く、約0.2mあるが、他は0.05m以内である。また、水田201が最も高く、北東から南西方向に水配りを行っていたと考えられる。

水田耕土と考えられる淡灰色シルト層と、その上を覆う洪水砂である乳白色～灰白色細砂層から出土した遺物と、水田下層で検出されたS X 201から出土した遺物から、これらの水田の時期は6世紀後半と考えられる。

iii) 流路

**流路201** 流路201は調査区の北側を北東から南西方向に流れる流路である。この流路は、第4遺構面を切り込んでいるため、弥生時代中期以降から流れているが、その堆積のほとんどが古墳時代であるため、ここで報告する。第2次調査の調査区内では、北西側の肩が検出されておらず、また、第3次調査区においても中世の流路によって大きく削られているため、その幅は明らかでない。また、完掘していないため、深さは明らかでない。調査区の中央部で、標高9.0m付近までトレンチ状に断ち割り調査を行った結果、下層の黄褐色砂礫層から古墳時代後期の須恵器が出土している。この黄色褐色砂礫層が流路のほとんどを埋め尽くしており、最終的にはその流れは、南東に寄って流路幅を狭めて、流路202となる。

**流路202** 流路202は流路201の最終段階の流れで、幅約6m、深さ約1.5mを測る。その埋土は大きく分けて下層の灰色砂礫層と上層の暗灰色シルト～極細砂層に分かれ、当初は水流があったが、最終的には緩やかな流れとなったものと考えられる。この流路から溢れた流れが、流路201の黄褐色砂礫層を覆う青灰色極細砂層を堆積させており、この層から出土した遺物より、7世紀半ばにはほぼ埋まったものと考えられる。

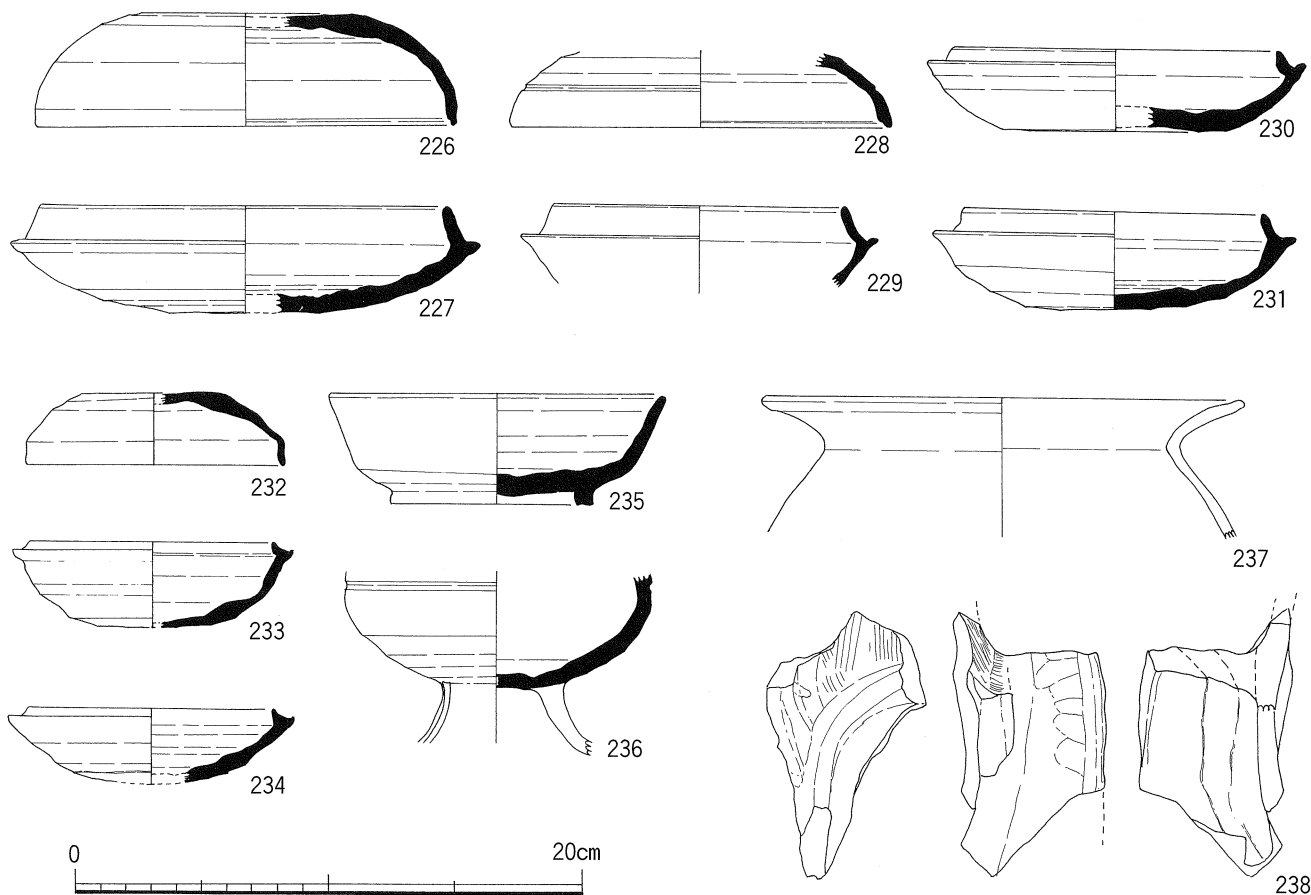


fig.85 古墳時代後期から飛鳥時代の遺物

流路203は調査区の南端を北西から南東に流れる流路である。この調査区では南東側の肩が検出されている。そこでは、第2遺構面を切っているが、下層の砂礫層より古墳時代後期の須恵器が出土しており、そのほとんどは古墳時代の流れである。最終的には平安時代中期には埋まっている。前述のS R 201と同一の流路の可能性もある。

## (2) 遺物

226はS X 201出土の須恵器坏蓋である。外面約1/2に回転ヘラ削りを施し、口縁部内面に沈線を有す。陶邑田辺編年<sup>(1)</sup>（以下同様）のTK10型式にあたり、6世紀中ごろのものである。

227・228・229は水田201・204の耕土層である淡灰色シルト層出土の須恵器である。TK10型式からTK43型式のもので6世紀後半のもと考えられる。

230・231は流路202出土の須恵器坏身である。たちあがりは短く、TK209型式に属すると考えられ、6世紀末の時期が与えられる。

232～238は1～3区の青灰色極細砂層出土の遺物である。

232は須恵器の坏蓋である。233・234は須恵器の坏身である。235は貼り付け輪高台を有する坏身である。236は脚付壺である。体部下半は回転ヘラケズリを施し、体部最大径付近に沈線を1条巡らせる。237は土師器の甕である。238は土師質の竈と考えられる。これらの遺物は7世紀前半から中ごろのもと考えられる。

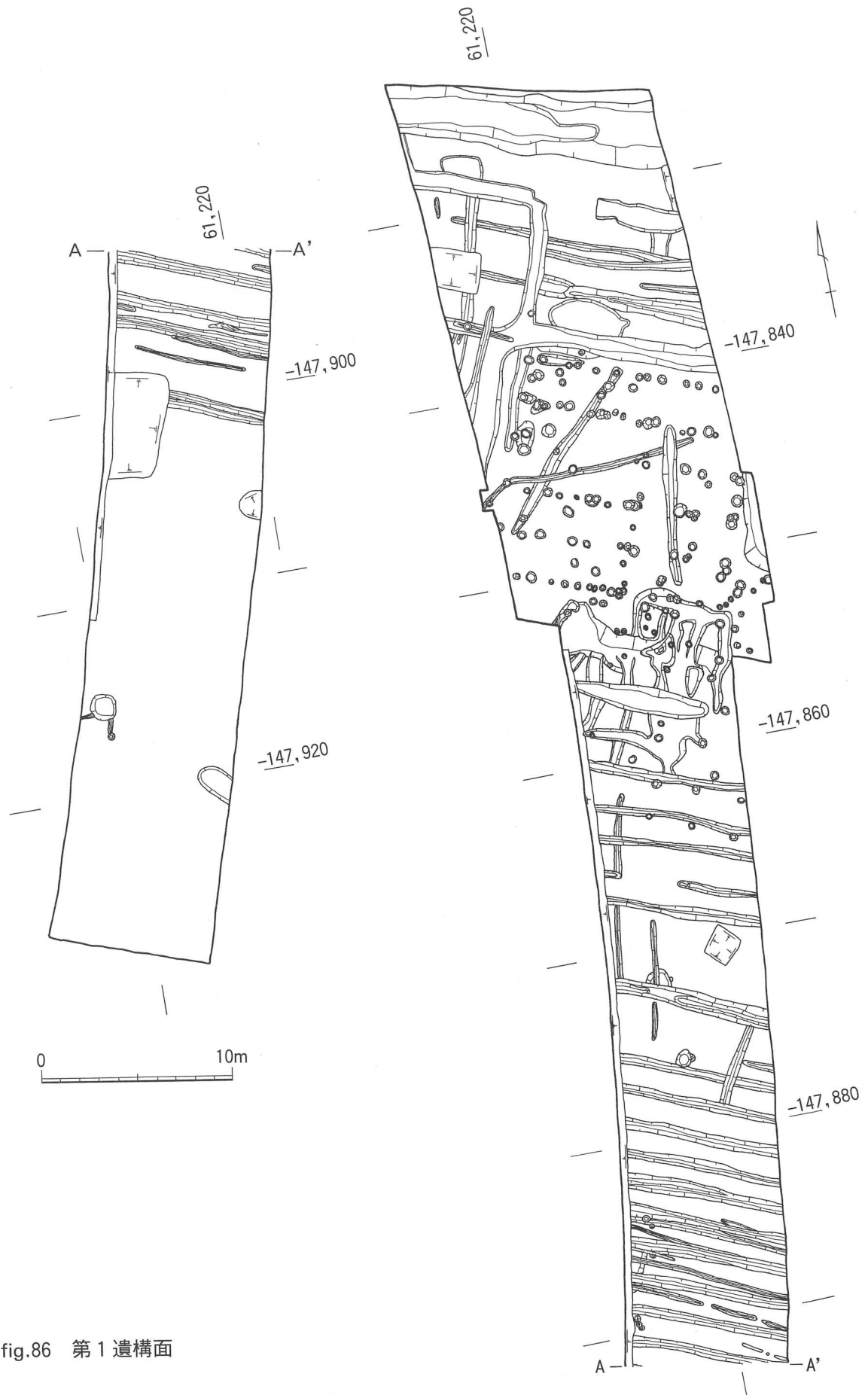


fig.86 第1遺構面

Y=61,210

Y=61,220

Y=61,230

X=-147,820



X=-147,840

X=-147,860

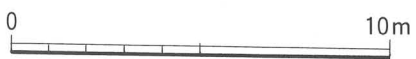
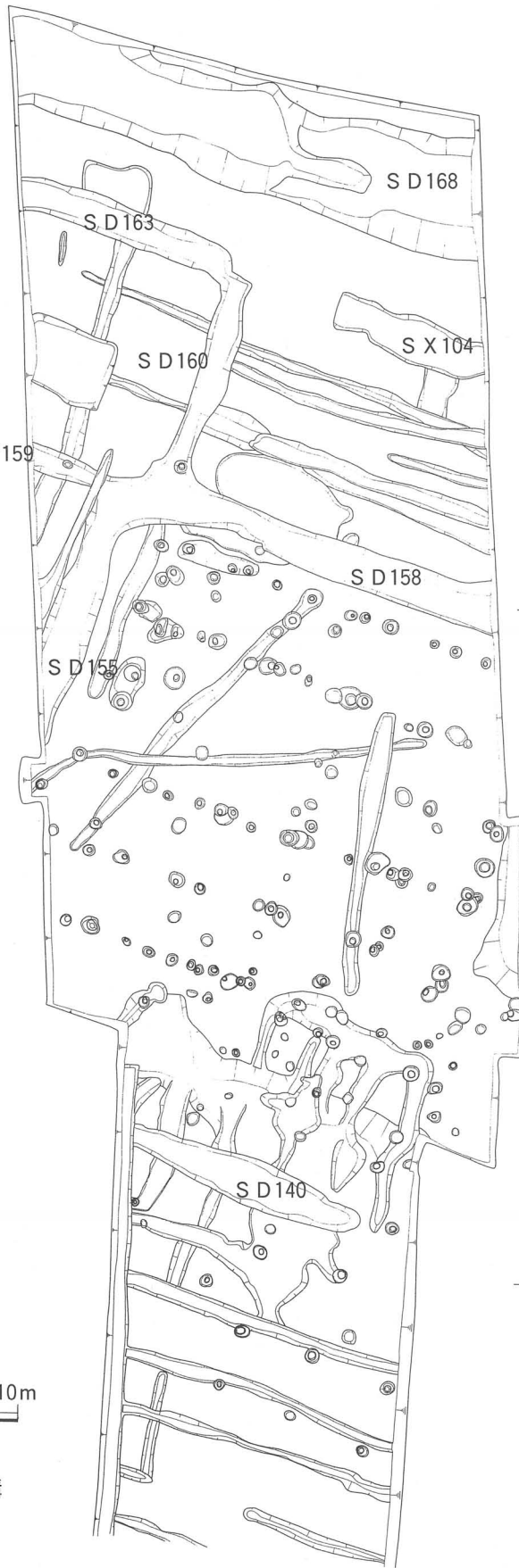


fig.87 第1遺構面北半の遺構

## 6. 平安時代後期の遺構と遺物

### (1) 遺構

平安時代後期の第1遺構面は、南半部では黄褐灰色細砂層を、北半部では黄褐灰色シルト層または、灰色砂礫層をベースとして遺構が検出された。

南半部では主として、平行した多数の溝が、北半部では、掘立柱建物に伴う柱穴や溝等が多数検出された。

#### i) 掘立柱建物

調査区北半の2区から4区にかけて、約180基の柱穴が確認された。それらの柱穴はほとんどが溝SD140・SD155・SD158に囲まれた範囲内に集中しており、その溝に囲まれた区画内に、数棟の掘立柱建物が存在したものと考えられる。現地調査終了後、平面図上で検討した結果、柱穴の並び等から、SB101からSB106の合計6棟の掘立柱建物を復元した。この6棟は柱穴の切り合い関係と建物配置等から、SB101・SB102を1時期とする建物群と、SB103・SB104・SB105・SB106を1時期とする建物群の最低2時期の建物群が想定され得る。この2時期の建物群の前後関係は、柱穴の切り合い等から前者の建物群が古く、後者の建物群が新しいと考えられる。但し、SB105は古い時期の建物群に属する可能性もある。

これらの建物群は灰色砂礫層の部分を中心に造られており、シルト～細砂層などの軟弱な地盤を避けて造られているものと考えられる。

**SB101** SB101は東西3間、南北5間の建物である。南北軸の方向はN20°Eである。建物規模は東西7.7m、南北11.8mで、柱芯間の距離は東西方向で2.0～2.5m、南北方向で2.2～

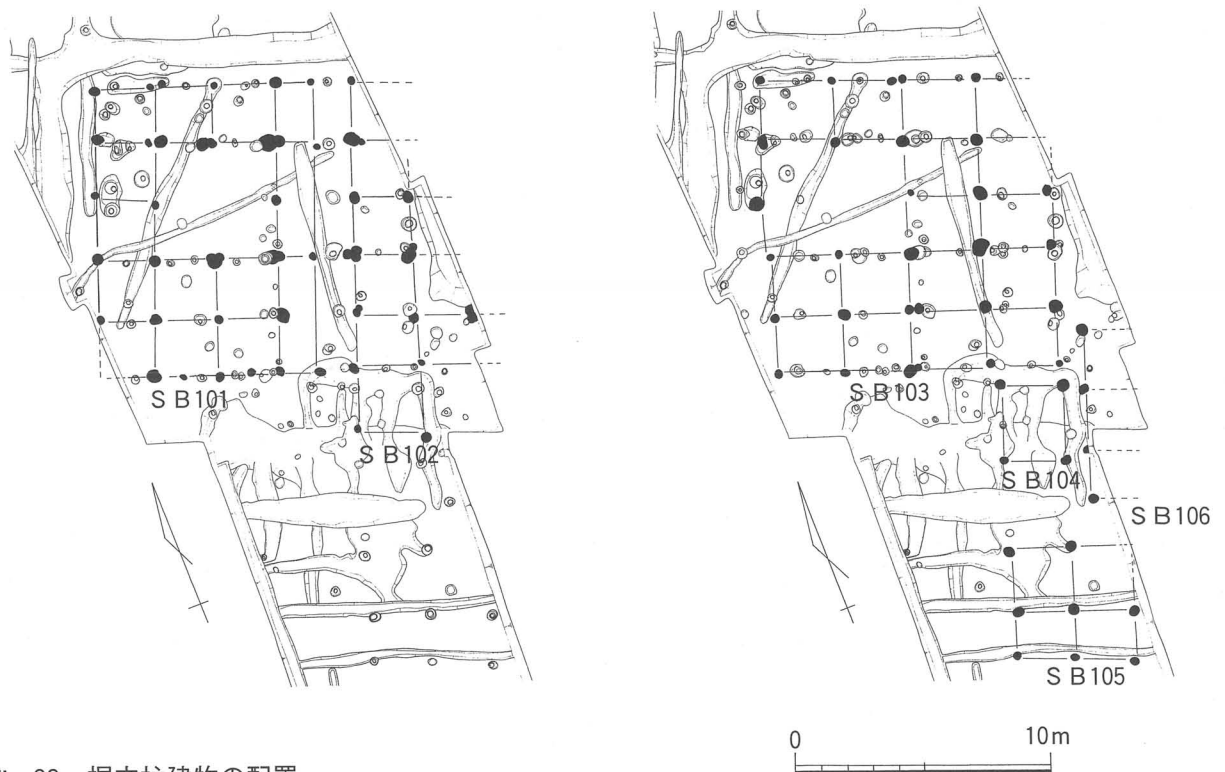


fig.88 掘立柱建物の配置



fig.89 S B 101